

.hack//G.U. THE HERO

天城恭助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

・ h a c k // G . U . のキャラのそつくりさんを僕のヒーロー
アカデミアの世界観に合わせてぶち込んでみた。が、コンセプト。
以下、それっぽいあらすじ。

本編開始から10年前

8人のヴィランによつて災害にも等しい事件が起こつた。それに
より多数の死傷者、重傷者が出了た。その巻き込まれた人たちの中に三
崎亮はいた。亮は内臓に重大な欠損を負い、移植手術をするほか助か
る道がなかつた。そして、移植された内臓はそのヴィランたちの1人
のものだつた。

多分、エタるので誰か書いて。

目 次

三崎亮：オリジン

三崎亮の個性

悲劇の舞台

消失

メイガス

レイヴン

胎動

感染

開眼

11年前の真実

幕間 始まりの日

雄英体育祭まで2週間

雄英体育祭まで1週間

雄英体育祭

障害物競走

騎馬戦

思惑

倉本智香

一ノ瀬薰

黒い泡

資格

女傑

猫

142 135 131 122 115 110 104 97 93 86 81 76 66 62 54 46 37 30 23 16 12 7 4 1

三崎亮：オリジン

「こつちに来るな、化物!!」

数人の子どもが一人の子どもに向かつて石を投げていた。

「うぐつ……ぐすつ」

子どもたちの年齢はみな5、6歳程度であつた。白髪の子どもの身体の一部は人のモノとは思えないものに変化していた。

世界の人口の8割が何らかの超常能力・個性を持つ時代にあつてもより特異な者は差別的な扱いを受けることがあつた。

「コラ！ 止めないか！」

「逃げろー！」

青髪の青年が、それを止めて白髪の子どもをいじめていた子供たちは走り去つていった。

「全く……大丈夫か？」

「……おじさんは怖くないの？」

白髪の少年は青髪の青年を見上げて言う。その顔の一部はまるで人形のような、球体と化しており角の様なものも生えていた。

「おじさん……まだ、そんな歳じゃないんだが」

青年は小さくぼやく。老け顔とは思わないのだが、小学生低学年からみたらそう見えてもおかしくはないのだろう。

「ああ、全く怖くないとも。ヒーローを志すものとして、当然さ」

立てるかいと、青髪の青年は手を差し伸べる。少年はどこか眩しき気に思え、少し手で目を覆う。戸惑いつつも、青年の手を取り、立ち上がる。

「w e l c o m e t o t h e w o r l d」

「え？ 何？」

「おまじないみたいなものさ」

「おじ……お兄さんはヒーローを目指しているの？」

「そうだよ。そうだ。今のうちにヒーロー名を名乗つておこうかな。

近いうちに免許も取れそうだしね」

「すごいね！ それでなんて言うの？」

「オーヴアン」

白髪の少年、三崎亮はその日からヒーローを志した。

その数日後

「あ、オーヴアン！」

亮は、公園にてオーヴアンを見つけ駆け寄る。

そして、オーヴアンの傍に自分と同い年ぐらいの少女が居るのに気が付いた。

「オーヴアン、そいつは？」

「そいつは？　はないでしょ」

「なんだとお」

「何よ？」

「ははは。まあ、喧嘩するな」

少女の名前は七尾志乃。癒しの個性を持つた少女だった。

「でも、オーヴアンこの子、言葉遣いひどいよ」

「この子じやねえ。俺は三崎亮だ」

「私は七尾志乃」

「そんじや、志乃勝負するか？」

「パス。そんなに暇じやないの」

「ははは。急に賑やかになつたな」

オーヴアンは二人の様子を見て、笑っていた。

「笑うなよ、オーヴアン！」

「いや、すまんすまん。でも、この感じなら二人を会わせてよかつたな」と

「なんでそんな上機嫌なの？」

「お前らが俺以外に口をきいているの初めて見たからな」

「なつ!」

志乃も亮も個性だつたり、性格であつたり、浮世離れしていたため

に友達がいなかつた。その二人を会わせてみたら、殊の外子供らしく口喧嘩を始めてオーヴァンは嬉しく思つたのだつた。

それから、10年の月日が流れた。

「そつか。志乃と初めて会つた時は、喧嘩したんだつけか……」

ベッドから起き上がり、亮は一人ぼやく。過去の記憶を夢に見て、涙が一筋流れていたことに気付く。

「ちつ！」

そんな弱弱しい自分に舌打ちを打つ。

志乃是1年前に正体不明の敵ヴァイランに殺されていた。

亮は現在ヒーローとなつて、志乃の仇を取ることを決意していた。

今日は雄英高校の試験日。亮は夢復讐への一步を踏み出さんとしていた。

三崎亮の個性

雄英高校の実技試験。

4種の仮想ヴィランロボを個性で行動不能にすることで、それぞれに応じたポイントを集めるもの。

4種はそれぞれ0P、1P、2P、3Pと割り振られている。
妨害行為は禁止。

なんだあ？ 余裕じやねえか。

それが三崎亮の感想だった。まるでヴィランの様な笑みを浮かべる。一時は、自身の個性にコンプレックスを持つていたが、今となつては自身の個性を最強の力であると信じていた。

試験会場に向かい、大量の人混みの中、神経を集中させる。有象無象は、気にかけずただ目的のために。

「じゃ、スタート」

唐突に告げられた開始の合図に亮はすぐに反応した。他の受験生を置き去りにし、早々に個性を発動させる。

腕は鋭い爪をもつた腕に、足は槍の様な細い足に。色は黒くどことなく機械のような、人形のような雰囲気であった。しかも、僅かだが宙に浮いていた。走るでもなくスライドするように移動する。明らかに普通に人が走るより速い速度である。

「ずあっ！」

仮想ヴィランロボに向けて腕を振り下ろす。仮想ヴィランは真つ二つに割かれて壊れる。

「よし、次い！」

亮の動きは止まることなく、仮想ヴィランを破壊し続けた。一人の少女を見かけるまでは。

「つ、志乃！」

すれ違つたうちの一人が志乃によく似ていた。だが、違う。よくよ

く見れば自分と似たような個性を使っていた。
亮の視線に気づいたのか少女も足を止めた。

「あの……何か？」

「なんでもねえ……」

亮はすぐにその場を去った。

「ちつ」

亮は舌打ちをする。思考が乱れ、仮想ヴィランを撃破することに集中できなくなっていた。不意に受験生の姿が目に入る。と、同時に瓦礫が受験生に落ちようとしていた。

「！ らああ!!」

瓦礫ごと傍にいた仮想ヴィランをぶつた斬る。

「てめえら雑魚は隅に縮こまつてろ!!」

受験生にそう罵倒を言い残しその場を去った。

くそつ、くそつ、くそつ、くそつ、くそつ！

志乃との思い出、約束がフラッショバックする。

『私たちはヒーローを目指すんだから人助けをしないと』

『大丈夫？ 亮』

『亮？』

不意に暗くなり空を見上げる。ギミックである、0ポイントの仮想ヴィラン。超巨大なそのロボットが前に立っていた。他の受験生たちが逃げ出す中、亮は立ち尽くす。

「俺は、ぜつてえに逃げねえ」

仮想ヴィランに対する姿と自身の追い求めるヴィランの想像の姿を重ねる。

「てめえは絶対に俺がぶっ殺す！」

亮は個性により浮きあがり、0ポイント仮想ヴィランの腹の高さで止まる。

腕を突き出し、0ポイントヴィランに突進する。腹の部分にぶち当

たりそのまま突き抜ける。

「三爪痕トライエッジ!!」

悲劇の舞台

『私が投影された!!』

「おつ」

雄英から届いた合否通知。その映像に唐突に映し出されたNo.1ヒーローの姿に驚く。亮はヒーローに詳しいわけではないが、さすがにオールマイトのことは知っていた。

「今回君の得点はヴィランポイント50ポイント。これでも合格圏内だが、見ていたのはそれだけじゃない！ 審査制のレスキュー・ポイント！ 君には25ポイントが付けられた。合計75ポイント。堂々の合格だ！」

亮は合格したことをあまり喜んではいなかつた。ヒーローを目指してはいるが、究極的な目的はそこではない。伝説のヴィラン「トライエッジ」を殺すことにある。

トライエッジは姿さえ誰にも見られたことがない。ネットの掲示板で名づけられたヴィランである。現れた場所には必ず三角形の傷痕^{サイン}を残す。それだけならばただの悪戯かもしれない。だが、被害者も存在する。志乃は赤く光る傷痕を残して死んだ。

亮は雄英ならば、情報も集めやすいと考えた。そして、トライエッジは恐ろしい強敵であるはず。そのためには更に強くなる必要がある。雄英ならば、強くなる環境としても十分だろう。

携帯が震える。何かの着信だ。その送信者を見て驚く。

「オーヴァン!?」

『いつもの公園で待つ』

今まで一切の連絡がなかつたのに、急にだ。
ともかく、オーヴァンの待つ公園へ向かつた。

そこには、左腕に枷のようなものを巻き錠前でカギをしている男。オーヴァンの姿があつた。出会つた頃にはしてなかつたが、小学校を卒業するころにはそうなつていた。不思議に思つて聞いたが、はぐらかして詳しく話すことはなかつた。

「久しぶりだな。亮」

「久しぶりって……あんたが突然いなくなつたんだろ！　あんたが居なくなつた後、志乃は……！」

「知つているよ」

「知つてているつて……どうして志乃の葬式に顔も出さなかつたんだ！」

「ヒーローの仕事が忙しくてな……どうしても抜け出せなかつたんだ」

「……あんた、一体どこにいたんだ……？」

「亮。お前は今のところ俺の期待によく応えてくれているよ」

オーヴアンはゆっくりと歩きだす。

「そいつは小さな種子だつた。そこに宿るもののが何なのか。確かめるために俺はそいつを育てた」

「育てる？　何の話だ。オーヴアン」

オーヴアンは足を止めた。

「比喩的な言い回しさ」

「その変な腕になつてから、オーヴアンは話をはぐらかす……」

「……トライエッジのことを知りたいか？」

「ヤツを知つてているのか！」

「あれはただのヴィランではない。消えない傷痕を残す。俺の調査が正しければ、今日奴は戻つてくる。あの、悲劇の舞台にな……」

「あのさびれた聖堂か……！　ついに、ヤツをこの手で……！　絶対に志乃の仇を取つてやる！　なあ、オーヴアン」

「ああ、これは俺たちにしかできないことだからな」

「俺たちにしか……！」

「俺は準備があるので先に行く。あの場所でまた会おう」

オーヴアンはその場を去つていった。亮も自身にできる準備を武器を用意した。頼りないかもしれないが、包丁などの刃物をいくつか用意し、あの場所へ。

そこは倒壊した建物がそのまま残されていた。そして、中には台座

が残されており、そこには三角形の傷痕が残っていた。その下には花束が添えられている。

亮はここで志乃と会話したこと思い出していた。

『昔、ここには少女の像があつたんだって』

『少女?』

『アウラ——そう呼ばれてたらしいよ』

『なんでなくなつちまつたんだろ?』

『さあ、愛想尽くしちやつたのかもね。この世界に……』

思い出から引き戻すように音が聞こえる。ハ長調ラ音、亮が知る由もないが、そういう音だつた。

「何の音だ……!?

見渡しても何もいない。もう一度台座の方を振り返ると、青い球体が浮かんでいた。そして光と共に小さく爆発した。

爆風に目を閉じて、目を開けたときには蒼い炎を纏つた男が浮いていた。

朱い色をしたツギハギの服と帽子。地に降りて、武器を構えた。独特な武器だった。扇子のように開いて三の字のような形になつた短剣を二つ持つていた。

「こいつが、トライエッジ……!?

あの三角形の傷痕のイメージと重なる。亮はこいつこそがトライエッジだと確信した。

「てめええええええ!!

亮は個性を発動させた。全身が異形の姿へと変わる。実技の試験とは違いより禍々しく、歪に、凶悪に尖つた爪や脚部。三つ目で口や耳もない姿。

亮は爪を振るつた。人に当たれば容易に人を殺傷するモノだが、そいつは短剣一本——つまり左手だけで防いでいた。

「このお!!」

その後も、連續で攻撃するも全て片手で防がれる。そして、そいつは右手の短剣を振るう。亮はそのまま弾かれ飛ばされ、右手の爪と化

した指が粉々に割れていた。

「があああああ！」

異形のまま血は流れないが、激痛が走る。亮は睨みつける。

「一体何なんだ、てめえは……？」

相手が応えることはなかつた。ただ虚ろな目で亮を見ていた。

「こいつが……こいつが……志乃を……！」

右手を元の人間の腕に戻して包丁を持つ。
対照的にトライエッジは武器をしまつた。

「まだまだあ!!」

左手でトライエッジを再び攻撃したが、右手の素手だけで受け止められた。

「!? これならどうだ！」

右手にあつた包丁を突き刺すが、左の掌が覆うようにすると消し去られてしまつた。

「!?」

驚いている間に、トライエッジの手が亮の顔を覆つておりそのまま突き飛ばされた。とても人間の力とは思えなかつた。今までの戦いから見てまるで複数の個性を持つているようだつた。

だが、亮はまだ諦めてはいない。

今度はトライエッジが右手を挙げた。

「何をする気だ？」

そのまま亮に右の掌を向ける。トライエッジの右腕を腕輪のように光が纏う。そこから光が翼の様に広がる。その翼は腕はを中心には回転し、掌には徐々に光が集まり、それが亮に放たれた。

「……！ 避けられねえ！」

光の玉が亮を直撃した。

「があああああ！」

全身に痛みが走つた。光は1、2秒の間だけ亮に纏わり付いていたが消え去つた。

「なんだ……？」

異形となつていた部分が崩れていくように消え去つっていく。

まるで自分そのものが消え去るようだつた。

「はあはあ、はつ、はつ、ああああああああ!!」

亮は恐怖に怯えたような絶叫を挙げて気絶した。トライエッジが

去る姿を目の端に写して。

消失

「……」は……

亮が目覚めたとき、そこは病院のベッドの上だつた。

「ようやく目覚めたか」

そこには見知らぬ小汚い男が居た。

「入学早々サボりかと思つたが、面倒なことに巻き込まれたみたいだな」

「あんたは……？」

「俺は相澤消太。雄英高校1—Aの担任。つまり、お前の担任ということになるな」

「担任……？」

亮はまだ意識がはつきりとしなかつた。そして、トライエッジとのやり取りを思い出し、飛び起きた。

「トライエッジは！」

「トライエッジだと？　まあ、詳細は警察に話してもらうが、何があつたか簡潔に話してくれ」

亮は、オーヴァンからトライエッジの情報をもらつたこと。トライエッジらしき者と出会い戦いを挑み、負けたことを伝えた。

相澤は、亮の行動に呆れた。問題行動のこともそうだが、入学早々出遅れることもあり、除籍処分も考えたが、校長から止められていたこともあり留まつた。

まだ、自分の生徒だとは言い難く、説教も警察がしてくれることだろう。

しかし、オーヴァンなんて久しく聞いた名だ。と、相澤は思つた。11年前のモルガナ事件の被害者の一人で重傷を負い、もはやヒーローを目指すことは叶わないと思われながらも、そこからヒーローになつた。一時は華々しいデビューを飾り将来を有望視されたが、今では見かけることはない。

「……まあ、いい。学校に来たらすぐに体力テストをする。準備して

おけ」

その後、身体の方に問題ないと医者にお墨付きをもらい退院。調書を取るために警察署まで出向いたり、結局、雄英高校に登校することになったのは入学式から翌週になつた。

雄英高校には、友達を作りに来たわけではない。だが、非常に気まずい。亮は1—Aの教室の目の前で、手を止めてしまった。

「おや？ 君は……君が三崎君か!？」

眼鏡をかけた真面目そうな少年。飯田天哉が亮に話しかけた。

「あ、ああ。そうだけど……」

「そうか！ よかつた！ 早く教室に入りたまえ」

教室の戸を開けて、先に入るよう促す。喜色満面であることないしれない温度差を感じつつ「お、おう」と教室に入る。

「君の席はここだ」

「サンキュー」

周りの話す声が聞こえるが、特に気にしない。ここには目的のために来ているのだから無駄な会話は必要ない。

担任である相澤が教室に入ってきた。

「三崎、ちょっとこっちに来い」

黒板の前に立つ形になつた。

「前から知らせてはいたが、こいつが事故があつて入学が遅れた三崎亮だ。ほれ、適当に挨拶でもしろ」

「事故？」

訝しきに思う。ヴィランに襲われたのだから事故ではなく事件だ。単に言い方を変えただけかもしれないが、その言葉に引っかかつた。

「三崎亮だ。よろしく」

ただそれだけ伝えればいいだろうと、それだけ言つた。

一部クラスメイトは「それだけしか言わないのかよ」と思つた。

「お前らにおしゃべりする暇なんかないぞ。三崎はこれから体力テストだ。いいな？」

「はい」

相澤に連れられ、体操服に着替えた後にグラウンドへ出る。

「よし、これから個性を使って体力テストを行う」

「個性を使つて？」

「今まででは個性を使わず画一的な平均を取つてきただろうが、ここでは現在の限界値を知るために個性を使え」

なるほど。合理的だ。と、意気込み手だけを変化させようとしたりが、変化しなかつた。

「？」

「どうした」

「個性が発動しない……？」

何故。どうして。と、混乱する。自身の記憶を探り、一つ思い当たる。

トライエッジから最後に受けた攻撃。まるで自身が崩れ去るかのように見えたあの攻撃だ。

「個性が使えないのか？」

「……はい」

相澤は数秒逡巡した後、

「とりあえず、個性なしで測るぞ」

そう告げた。

亮の体力テストは至つて平均的だつた。個性なしの割には良い方というぐらいで、とびぬけた物は一つもない。

相澤は頭を悩ませた。入試での活躍は確かに目を見張るものがあつた。だが、現状の体力テストを見る限りとてもヒーローを目指せるものとは思えない。それなら除籍処分にするのが彼の常だつた。しかし、校長から理由もわからず止められていた。三崎亮を退学させはならないと。当然、理由を聞いたが頑なに話すことはなかつた。

亮は焦りを感じていた。あまりにも情けない結果しか出せない。単純に身体能力で言えば中学の頃よりは良くなつてはいるが、あまりに普通だ。個性をもつてすれば、いざか、あるいは複数の項目で普

通ではない記録が出せる。

結局、全ての項目を測り終えて、普通の結果だけを残すこととなつた。

個性を使うことすらできない今の現状では、ヒーローを目指せるものではない。余計に苦しめることになる。この状況が続くようなら早急に諦めさせた方がいい。そう言つてやりたいのだが、二の足を踏んでいた。それを言うために自身の教職を諦める必要があるかもしれない。他のヒーローを目指せるものを置いて、自身が辞めるわけにはいかなかつた。

「……飯を食つて、午後の授業に備えろ」

それだけしか言えない自分に腹が立つていた。そして、他の自分の仕事に戻るしかなかつた。

残された亮は、拳を握りしめ

「畜生っ！」

そう言うことしかできなかつた。

マイガス

クツクヒーローランチラツシユが作る、食堂で昼食を取る。場所が広いこともあって、一人の席を見つけるのは思つたより簡単だつた。亮は、あまり人と関わりを持ちたくない。志乃を失つてからは、余計にその思いが強くなつていた。

「あの、お一人ですか？」

「ああ？」

苛立ちのまま振り返るとそこに立っていたのは以前、試験会場で見かけた志乃によく似た女だつた。

「あ、ああ……」

その顔を見て、声のトーンが小さくなつた。

「前の席、失礼しますね」

前に座ると顔が余計によく見える。亮には、それが見たいが見たくないものだつた。

「合格できただんですね。よかったです。しばらく見かけなかつたので心配していたんですよ。試験の時、すぐかつたので私が合格できていってあなたができるいないなんてとても思えませんでしたから」

笑顔もよく似ている。志乃はもつと落ち着いた雰囲気ではあつたが。

「そういえば、お互い名前も知りませんね。私は日下千草くさかちぐさと言います」

「三崎亮だ」

「……何かありました？」

「そりや、何かはあるだろうよ」

「いえ、そうではなくてですね、話しかける前は元気なさそうに見えて、今は私から視線反らしてませんか？」

「……特に意味はない」

「そうですか……何か困ったことがあるなら私に何でも相談してくださいね！」

「ああ」

煩わしいと思いつつもただ無下することはできなかつた。志乃に

よく似ていたから。

午後の授業には、ヒーロー基礎学の授業が行われた。

オールマイトが教室に現れたときは、クラスメイトが色めき立つていたが亮は終始不機嫌そうな顔をしていた。

オールマイトから戦闘訓練を行うために、コスチュームに着替える様に言われた。

全員が入試にも使用された演習場に出た。

「始めようか有精卵共!! 戦闘訓練の時間だ!」

戦闘訓練は基礎を知るために屋内での戦闘演習をするとのことだった。

クラスメイトは同時に質問を投げかけるためにオールマイトは困っていたが、とりあえず状況設定が説明され、組み合わせはくじで行われることになった。

「オールマイト」

「なんだね。三崎少年。つて、コスチュームに着替えていないのかい？」

「いえ、調子が悪いんで見学にさせてください」

「ふむ……しようがない。けど、体調管理はしつかりね」

オールマイトは内心、一人余るのをどうしようかと悩んでいたので渡りに船だつたりした。しかし、教師としてこういうのもしつかり対処できないとますいんだろうなあと別な悩みも抱えていたりした。相澤と情報共有をして、現在亮が個性を使用できないことも聞いてはいたが、ここでデリケートな問題に突っ込むこともない。

亮はクラスメイトの戦いぶりをみながら、トライエッジ対策を考えていた。

緑谷と爆豪の闘いを通してみて、緑谷のパワーや爆豪のコスチュームによる爆破ならあるいはトライエッジの防御を崩せるかもしれない。だが、参考にはならないし同じことができたとしてとても倒せるとは思えなかつた。

そして、その後のクラスメイトの戦いぶりをみて、いつも通り個性を使えたとして、勝つのが危ういと思うのは、轟ぐらいだろうか。だが、轟との戦つたとしてもトライエッジの対策にはならない。

しかし、その対策以前に自分の個性を取り戻さなくては雄英に居られるかも危うい。個性がなければヒーローという職業はほぼ成り立たない。

講評を聞きつつも、自身の心配事のためにほとんど聞き流す形になってしまった。

放課後、クラスメイト達が爆豪との戦闘演習で怪我をした緑谷を心配し、あるいは授業の感想を言いに行くなか、亮はまっすぐ家に帰ろうとしていた。

「三崎さん！」

校門の直前で、日下に話しかけられた。

「途中まで一緒に帰りませんか？」

「……別にいい」

亮はそのまま歩き出す。

「それってどっちですか？　あ、方向同じですね」

「勝手にしろ」

最寄り駅につき、さすがに改札まで付いてくることはないだろうと振り返ると日下は足を止めていた。

「三崎さん、変な音が聞こえませんか？」

「変な音つて、人も結構いるし何の音かわからんねえよ」

「一緒に見に行きましょう！」

「ひとりで行きやいいだろ」

「ダメ……ですか？」

悲しそうな顔をされて、亮は志乃を悲しませた様な錯覚に陥った。

「わかったよ。行けばいいんだろ、行けば」

「ありがとうございます！　こっちです」

日下の後を付していくと、人の少ない裏路地へと進んでいった。そ

して、行き止まりのその場所には三角形の赤い傷が付いていた。

「トライエッジの傷痕!^{サイン}!」

「トライエッジ? この傷痕はそう言うんですか?」

亮がトライエッジの傷痕に触ろうとすると、傷痕が光った。

「何だ!? 傷痕に吸寄せられてる!?

「うわあ!」「きやあ!」

気づけば地底空洞の様な場所に居た。目の前には湖が広がつており、そこには大きな光る木があつた。

「なんでしょう? 誰かの個性でしょうか?」

悪戯にしてはたちが悪い。あまり長居はしない方がよさそうである。

「三崎さん。あそこに人が!」

そこには薄紫の長髪の青年がいた。木に腰をかけ、掌の上には黒い泡——穴のようなものがあり、それと戯れているように見えた。

「なんだろう? 綺麗……」

青年の容姿が美形だつたこともあり、その光る木と併せて幻想的に見えた。しかし、その浮かぶ黒い泡からは不吉な印象を受けた。

「聞こえる……音があの人の方から」

青年の肩には白い猫がおり「にゃあ」と鳴く。青年はその猫を気にかけながら、木の裏側へと行つた。

「あいつ、なんなんだ?」

「聞いてみましょう」

日下は走つて青年の後を追う。

「待つてください!」

誰かがそう言つた。

「え?」

日下と亮は振り返り声の主を探した。

その後ろでは、黒い泡が合わさり空間にできた巨大な穴と化した。

そこから3m以上はありそなまるでミジンコのようなモノが出

てきた。それには目も口もある様には見えず、中心部が淡く光っていた。頭頂部と思われる部分からは四本、触覚のようなものが生えていた。

それに気づいた日下と亮。

「何?」

そして、亮たちをかばう様に一人の男が現れた。

「下がつてろ」

黄色いコスチュームを着た、水色の長い髪をポニーtailの様に纏めている男だつた。

「行つけえ!! 僕の——メイガスツ!!」

その言葉と共に、男は変身した。頭は仮面の様なものを被つており、腕は細長く木の枝を思わせる。木の葉を思わせる緑色の橢円形のモノも付いている。下半身に足はなく、尻尾の様になつていた。その尾にも木の葉を思わせる物体が付いていた。その全体の大きさは、出てきた巨大なミジンコに劣らないものだつた。

その姿は亮が使う個性に少し似ていた。だが、決定的に何かが違う。自身が使うものと形が違うとか大きさが違うとかそんな些細なことではない。感覚的だが、何かが違つていた。

ミジンコの様なものは、レーザー光線を男に向けて放つた。男はバリアを張つて防ぎ、直後一気に距離を詰めてパンチで攻撃する。ミジンコの様なものにあつた何かが壊れたように見えた。

そして、男は右手をミジンコに向ける。右腕は大砲の砲身の様になり、その周りからは木の葉の様なものが生えていた。そして、その砲身から光球が放たれた。ミジンコに当たると、爆発したように強く発光し、気付いた時には消え去つていた。そして、男は元の姿に戻つていた。

「無事かい？　お二人さん」

「あの……助けてくれてありがとうございます」

日下がお礼を言う。しかし、亮は男を怪しく思つていた。

「いやいや、ヒーローとして当然のこととしたまでだ」

「ヒーローなんですか？」

「正確にはインター生だけどね。それに君たちと同じ雄英生だ」

「先輩ですか!?」

「そう。三年の香住智成。ヒーロー名はクーンだ。よろしく！」

「見すると好青年に見えるが、そこはかとなく怪しい。

「あれは結局なんなんだ?」

「うーん……俺から詳しい説明はできないかな。知りたいなら俺のインター先に来るといいよ。三崎君に日下さん」

「お前、どうして俺たちの名前を!?」

まだ、名前を言つていないので名前を知つていた。自分たちは入学したばかりで有名人というわけでもない。

「ああ、ごめんごめん。無駄な警戒をさせちゃったね。俺の個性もうだけど君たちの個性もちょっと特殊なのはわかつていてるかな?」

日下も亮も他人に言つたことはなかつたが、それには気付いていた。何せ最初から普通ではなかつたから。日下も亮も互いにそれを知る由もないが。

「あれ、だんまり……? まあ、簡単に説明しておくと俺のインター先はそういうことがメインなのさ。三崎君、君の探しているトライエッジの情報も何かつかめるかもね」

「てめえ……どうしてそのことまで……!」

「だからさ。そういうこともひつくるめてとにかくおいで」

亮は日下を見やる。日下はどうするのだろうか。こいつに付いていつも大丈夫なのだろうか。日下も一緒にいいのだろうか。様々な思いが入り混じつっていた。

「どうしました?」

「……なんでもない」

「俺、なんか信用されてないみたいね……ヒーロー志望としてはなかなかシヨツクかなあ」

おどけているように見えなくもないが、本当にそう思つているようだ。

「それで、来る? そろそろ報告に戻らないといけないんだよね。時に厳しい人がいてさ」

亮は迷つたが、トライエッジのこと、自身の個性のこと知りたいことは山ほどある。少しでも情報が得られるのであれば、付いていくほかにない。

「俺は行く」

「私も行かせてください。私もある個性のことを私は知りたいです」

「そつか。それじゃ行こうか」

レイヴン

クーン」と香住智成に連れてこられた場所は都内の一等地。ヒーロー事務所が至る所にある場所だつた。50階建ての高層ビルの最上階。そのワンフロアが香住のインターナン先のヒーロー事務所だつた。

「戻ったよ、パイ」

そこには露出度が高いコスチュームを身に着けた女性がいた。眼鏡をかけており、長い桃色の髪をツインテールにしていた。

「ご苦労様。そこの二人が例の子たちね」

「ああ、あれが見えてたから間違いない」

香住は報告をしていた。亮と日下は断片的には聞こえていたが、内容は全くわからなかつた。

「おつと、待たせちゃってごめんね。改めて『レイヴン』へようこそ。三崎君、日下さん」

香住が両手を広げて歓迎のポーズを見せる。

「レイヴン?」

「ここ」の事務所の名前だよ。普通はヒーロー名と事務所つてくつつけた名前だけど、ここはヒーロー事務所には見えないしね」「クーン……」

女性が、睨みつけるように香住を見る。香住は小声で「おお、怖い」と漏らす。

「彼女はパイ。ここでサイドキックをしている」「よろしく」

パイは格好に見合わず、生真面目かつ堅そうな雰囲気を持つていた。亮と日下は思わず頭を下げて挨拶をする。

「それでここ」の事務所のトップが八咫だ」

「八咫?」

亮はヒーローに詳しい訳ではないが、全く聞き覚えがないというの

もおかしく思つた。ここの一帯は有名な実力者のヒーローばかり。
そうでなくてはこんなところに事務所を構えることなどできない。

「八咫はここ奥の部屋に居る。お目当ての話は八咫から聞いてくれ」

「あれ、一緒に来ないんですか？」

日下が疑問を口にする。

「話を聞くのは君らだけだしね。まあ、とにかく行つておいで」

奥の部屋に入るとそこは薄暗かつた。そして、かなり広い。このフロアのほとんどのスペースをこの部屋が占めているであろう広さだ。そして、その奥には何かの端末らしきものが置いてある。その端末らしきモノの上にある壁にはウロボロスの意匠があり、回転し続けていた。

突如、電源が入ったように明るくなる。だが、その明るさは蛍光灯などの明るさを得るためのものではなく、電源が入つてることや、何かしらが動いていることを伝えるランプのような明かりだ。

「ようこそ知識の蛇へ」

端末のある場所に立っていたのは、金髪の坊主頭をした男だった。服は色眼鏡をつけた修行僧の様にも見える。

「あんたが八咫つてやつか？」

「はじめまして……と言うのも妙な感じだ。私は君たちをずっと見ていた」

八咫が端末に手をかざすとその部屋に一気に映像が映し出される。「なっ!?

それらは、監視カメラの映像のように見えた。だが、尋常な数ではない。ざつと見ただけでも数百はありそうだ。

「今は世界の人口のおよそ8割の人間が何らかの超常能力を持つ社会だが、それらを大きく狂わすほどの異常が起こつていて。それは、事象として、あるいは対象として様々な形で世界に表出す。三崎亮、君が体験した個性の異常もその一つだ」

「え? 三崎さん、それ大丈夫なんですか!?」

「あ、ああ。つて、そうじやねえ! 僕たちを監視していたのか!? 何

の権利があつてそんなことをしゃがる！」

「私はこれでもヒーローなのでね。ちゃんとした調査だよ」
「調査だと？」

「本来、この世界にはありえないはずの異常。しかし、この世界に確實に存在する現象。我々はそれらを総称してA I D Aと呼んでいる」
聞いたことがない言葉。おそらくは何らかの略称だが、検討が付かない。

「今はまだ、ほとんどの人間に知られていない。現段階においてはその程度のレベルではある。しかし、三崎亮、君はそれに遭遇しているはずだ。そして、その脅威を、危険性を目の当たりにしている」

「……トライエッジ」

「彼が君に使つた技。あれは、データドレインと呼ばれている技だ」「データ……ドレイン？」

「個性を封じる個性自体は存在する。だが、データドレインの本質はそこではない。あれは、個性を含めた身体を改変させる技だ。その程度で済んだのは運が良かつたとも言える」

改変という言葉がどの程度のものかはわからないが、死んでいてもおかしくはなかつたということだろう。

「トライエッジはA I D Aなのか？」

「その可能性は否定できない」

亮はその曖昧な言葉に対し舌打ちをする。

「また被害者たちの行方も調査中だ」

「被害者たちの行方？」

「A I D Aに攻撃された、あるいはそれに類する何かに攻撃された時、その人間はどこかに消え去る」

亮は志乃が殺された時のこと思い出した。志乃を攻撃した張本人を見る事はなく、現場に着いた時には既に息絶えようとしている志乃がいた。すぐに救急車を呼ぶために携帯にかけながら志乃に駆け寄つたが、志乃はその場に大量の血痕と亮に言葉だけを残し、光の塵の様になつて姿を消した。その残された血の量からほぼ確実に失血死していると考えられたため志乃は遺体がなくとも死亡したと

断定された。

「我々はその様な被害者たちを未帰還者と呼んでいる」

「未帰還者たちは一体どこに行つたんだ」

「調査中だと言つたはずだ。怪しい場所があるにはあるがね」

「なら、そこを探しやいいだろ！」

「既に調査済みだ。それに君たちも訪れただろう。あの異質な場所を」

得体のしれない何かに襲われた場所。おそらくは得体のしれないあれがA I D Aと呼ばれるものなのだろう。とにかく、あの場所は確かに普通ではない。どこにも出口はないが、傷痕を通してのみ出入りが可能な場所だ。

「あれはロストグラウンドと呼ばれている。この世界のどこでもない場所。G P Sや発信機を付けて訪れても、世界中のどこにも反応がない。つまり、少なくともこの地球上ではないことは確かだ。一般には知られていながら、既にいくつか発見されている。君たちが入った場所は最近新たに確認された場所だ」

そこに香住が調査に行く前に、亮たちが訪れていた。

「それで、どうして私たちを呼んだんですか？」

「君たちにA I D A調査を協力してもらいたい」

「私たちまだヒーローの仮免試験も受けてない学生ですよ」

「現状、A I D Aに対抗するには特殊な個性を持つ人間にしかできない」

「それが、俺たち？」

「その特殊な個性を使うものたちを碑文使いと呼ぶ。クーンやパイもその一人だ」

何故、碑文使いと呼ばれているのか。何故、自分たちはその個性を使うことができるのか。何故、碑文使いにしかA I D Aに対抗できないのか。疑問は尽きない。

「どうして、碑文使いにしかA I D Aに対抗できないんですか？」

「A I D Aは普通の攻撃で傷つくことがない。どれだけの破壊力を有する個性や武器であろうともだ。碑文使いの能力だけがA I D Aを

駆除することができる」

確かにその様な存在であれば、頼らざるを得ないのもわからないこともない。しかし、いくらヒーロー志望と言えど学生を頼るのは如何なものだろう。

「どうして、私たちにその碑文があるんですか？」

「君たちもおおよその検討はついているのではないかね？　君たち二人は11年前に事件に巻き込まれたはずだ」

11年前、通称モルガナ事件と呼ばれる事件があった。8人のヴィランによつて、災害レベルの被害がもたらされた。おそらく、ヴィランが起こした事件の中で最も甚大な被害を出した事件。

「その際に君たちは、移植手術が必要になるほどの重傷を負つた。だが、君たち以外にも重傷を負つた者はたくさんいた。ドナーが不足するのも当然だ。人工臓器では無理があつた。そこで、君たちに提供されたのはそのヴィランたちの臓器だよ」

その真実はヒーロー志望にとつては、かなり酷な話だつた。臓器移植を受けたことは二人とも知つていたことだが、ヴィランのモノであることは知らなかつた。

「そのヴィランの臓器を移植された者たちは、元々持つていた個性に加えて、変身する能力を得た。それが君たち碑文使いだ」

元々持つている個性。亮も日下も変身する個性の他に元々個性を持つっていた。それも使えなくなつたわけではない。複合個性というわけでもないにもかかわらず、全く関係性のないそれらは普通では考えられないことだ。

亮は元々『鍊装士』という個性を持つていた。しかし、複数の武器が使えるはずのその個性は短剣しか創り出すことができなかつた。変身する方が手つ取り早い上に変身は身体能力も大きく上昇するので使うことはなかつた。また、個性の併用もできなかつた。
「そういえば、三崎君は元々持つていた個性が使えるかは試していいのかね？」

確かに試していなかつた。もう使うこともないと思つていたからだ。ほぼ存在も忘れかけていた。

「……はあっ！」

腰に差している短剣を引き抜くように動作をすると、その手には短剣が握られていた。

「できた……」

これで最低限の力は確保できた。と、考えてもいいのかは判断に困る所だった。

「碑文使いの能力と個性の併用は不可能であると思われるが、元々の個性を鍛えておいて損はない。個性を鍛えれば、碑文使いの能力も向上することがわかっている。ただ、加えて言うと君たちはまだ真に碑文使いと呼べる状態ではないがね」

「どうしてだ？」

「それは君たちがまだ開眼していないからだ。開眼した者の変身は憑神と呼び、碑文使い以外の人間に変身した姿が見えることはない。そして、AIDAに対抗できるのは開眼した碑文使いだけだ」

「お前たちに協力すれば開眼できるのか？」

「もちろん。むしろ、そうなつてもらわなければ困る」

「いいぜ。協力してやるよ。ただし、俺に指図すんな。それが条件だ」

「日下君、君は？」

「私は……この個性を誰かに役立てられるなら手伝わせてください」

「よろしい。時間ももう遅い。憑神については後日、クーンから直接聞くといい」

三崎達がそれぞれの帰路についた後

「八咫様……本当にあんな学生に力を持たせても大丈夫なのでしょうか」

「……遅かれ早かれ彼らは開眼に至る。そこは問題ではないよ、パイ」

八咫はオーヴァンの個人情報を見ながら思考を続けた。

そして、ところ変わつてオーヴァンはある者と接触していた。

「探したよ。オール・フォー・ワン」

「僕を探し当てるとはなかなかやるじやないか。でも、僕は君のことまるで知らない。教えてくれないか？」

オールフォーワンの聲音はとても穏やかだった。しかし、心中は穏やかではない。

場所が誰かに割れるようなことは一切していない。完全に闇に潜んでいたはずだつた。それなのにこの男は居場所を突氣止めた。

「今は活動していないが、ヒーロー名、オーヴァンだ」

「ヒーローが僕のところに来る……か。そもそも僕のことを知るヒーローはほとんどいない。一体、何をしに来たんだい？」

何者なのが知つていて、この場にやつてきたヒーローならば、捕まえるために行動するのが普通だ。ならば、オーヴァンの目的はそれ以外だ。

「あんたと敵対するつもりはないよ。ただ少しばかり協力しに来たんだ」

「協力？　ヒーローが、僕に？」

オールフォーワンの声に笑いが混じる。

「單刀直入に聞くよ。その目的は？」

「黄昏の鍵」

その存在を知るは、未だ誰もいない。

胎動

翌日のH.R.、相澤から学級委員長を決めるように告げられた。クラスのほぼ全員が率先して引き受けよう、というよりやりたがっていた。その中で三崎は一切やる気はなかつた。

飯田の提案により投票で決めることになり、三崎は特に何も考えず飯田に投票した。

結果的には、緑谷三票の八百万二票で委員長と副委員長は決まった。飯田には一票しか入つていなかつたため、他の誰かに入れたのだろう。やりたがっていたのに何を考えているのやらと内心思つただけで三崎は誰に言うこともなかつた。

昼休み、クーンこと香住の姿を見つけた。向こうも気づいたのか、こちらに駆け寄つてきた。

「G・U.」に入るんだつてな。これからよろしく

「ジーユー？」

「八咫から聞いてないのか？ レイヴンは仮の名前で俺らは『G. U』って呼んでる

「意味は？」

「何かのプロジェクト名だつて聞いたけど

「ふーん……それより、憑神について教えろよ

「別に気にしちゃいないけど、先輩に中々すごい態度するね」

「敬語使つた方がいいのか？」

「いや、全然気にしなくていいよ。俺もその方がやりやすい」

「三崎さん！ 香住さん！」

日下も来たので、そこで昼食を取りながら話を聞くことになつた。

曰く、憑神とは個性に非ざる個性。肉体よりも精神に結びついている力だと言う。

精神に結びついている力故に身体をいくら鍛えたところで開眼に

至ることはない。

「それじゃあ、どうすんだよ」

「心で碑文使いのルールを理解するしかない」

クーンが自身の胸を親指で指差しながら言う。

「心で理解つて……どうやって?」

「意識を研ぎ澄ますこと……一番手つ取り早いのは実戦なんだけど、

対人でやるわけにもいかないからなかなか難しいんだよね」

「お前も確かな方法が分かっているわけじやないのか」

「たはつ。痛いとこ突くね。俺やパイが碑文使いとして開眼したのも偶然の事故のようなものだつた」

ウウーーーー!!

警報が鳴り響いた。

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんはずみやかに屋外へ避難してください』

「なんだ?」

「誰かが校内に侵入したみたいだね。落ち着いて行動しよう」

「でも、皆さん相当に焦つて出口で混みあっちゃつてますよ! 誰かがちゃんと誘導しないと!」

「ンなこと言つても、あの状態じや下手に動けねえよ。つたく、何をそんなに慌てるんだか」

ここは現役のヒーローたちが教師を務める高校である。ヴィランが攻め入つて来たのだとしても相当に強力でない限り、優々と対処できるだろう。

「少なくとも俺はセキュリティ3が突破されるなんてのは初めて聞いたし、慌てるのも無理はないさ。ここにいる誰も彼もがヒーロー科と言ふわけでもないしね」

その混乱の人混みの中、一人が浮き上がり出口の壁の所に激突した。そのポーズは非常口の看板の様になっていた。

「皆さん、大丈一夫!! ただのマスクミです!」

そうやつて飯田が混乱を収めていた。

「お、やるねえ。彼」

「……麗日の個性でも借りたのか？」

飯田の個性だけでは不可能な動きであつたこと。緑谷と麗日と飯田が一緒に行動しているのを見かけたことからの連想だつた。

「おや、知り合いかい？」

「クラスメイトだ」

「へえ。あれは仲良く……とまでは言わないけど、関係は作つた方が良いとと思うぞ」

「なんだ、急に」

「ただのお節介だよ。まあ、彼に限つたことじやないけど情報を集めるならもう少し気を使つた方が良い」

「……気には留めておく」

香住の言うことも最もなことである。しかし、三崎の性には合わないことで、できそもなさそうだし行動しようとも思わなさそうだと思つていた。

午後の委員決めで緑谷が飯田を学級委員長に推薦したために飯田が学級委員長となつた。

特に気にしていたわけではないが、自分としては情報集めと自身の特訓に時間を費やしたいので、時間の無駄だと感じるのが否めなかつた。

放課後は香住に憑神を使えるようにするための訓練を頼もうとしたのだが、予定があるとさつさと帰つてしまつた。仕方ないので相澤に演習場を借りる許可をもらい、鍊装士の訓練をすることにした。

個性自体を成長させることは一朝一夕には叶わないと感覚的に理解できていたので、扱い方を身体に馴染ませるのが今一番やるべきことだと判断した。

理由は判然としないが、逆手の二刀流が一番自分に合つている感じたためにその型を練習した。三爪痕も同様の型であつたことを思い出したが、使えるものは何でも使うと心に決めていたため嫌悪感を押し殺した。

怒りと憎しみの全てを力に変えて、三爪痕を討つ。その一念で練習を続けた。

「さすがにそろそろ帰れ」

相澤に声をかけられて、日が沈み暗くなっていることに気付く。汗が大量に流れ、息も整わない。

「……状況が状況だけに焦るなとは言わん。だが、一度落ち着け」「俺にはどうしても成し遂げたいことがある。落ち着いてなんていられない」

「三崎……お前、本当にヒーローになりたいのか？」

疲れもあつてか、本当のことと言つてしまいそうになる。

「ヒーローには……ヒーローは俺にとつては手段です。目的のために必要な」

「そうか」

ヒーローになることはゴールではない。ヒーローになつてから活躍できるかが問題だ。そのことは、教師も生徒も皆がわかっていることだろう。だが、目的となると一体それは何なのか。

「目的については、話してくれないのか」

「言えません」

相澤は三崎に尋ねてはいるが、本当はおおよその検討は付いていた。三爪痕が関連している可能性が高い。病院で口にしていた伝説のヴィランの名。蒼炎を纏つた男。三爪痕に狙われた者は行方不明になる。三爪痕が訪れた場所には三角形の傷痕が残される。実在はするようだが、誰も見たことがない都市伝説の様な存在だ。それに三崎亮は会っている。しかも、恨みを抱いている様に見えることから被害者の中に家族か友人のどちらかがいるのだろう。

「わかった。言う気になつたら聞かせてくれ」

校長、本当に三崎を雄英に置いたままで大丈夫なんでしょうか。
そう思わずにはいられなかつた。

三崎が駅前を歩いていると香住を見つけた。

あいつ、こんな時間に何やつてんだ？用事があるって言つてたけど

……

「君たち、残念だけど今日はここまでだ」

「ああん、クーン様あ。もう少し遊んで行きましょうよお」

「そうですよ。クーン様」

香住が2人組の女性と話し込んでいた。デートという奴だろうか。いや、おそらくナンパだろう。

「ああ、そんな情熱的な視線を向けないでおくれ。君たちの視線にしば……」

香住が三崎の存在に気付いた。

「しばらくぶりだね。三崎君！」

「よお、クーン様。随分と楽しそうじやねえか」

「いや、これは、なんだ。パトロールと同時に情報収集をする大事な仕事でな。決してやましいことをしていたわけではないんだ」

「クーン様、この子誰？」

「こいつは俺の後輩で……ああ、すまないけど今日は帰ってくれないかな。これ、俺の連絡先。それじゃ！」

香住は三崎を人気の少ないところに引っ張つて行つた。

「ナンパとはいひ身分だな」

「だから、さつきのはパトロールだつて……」

「ほお……なら、パイに伝えてもいいんだな」

「待つてくれ。俺が悪かった。このことはパイには言わないでくれ」

「つたく、俺の頼みを断つておいてそれかよ。それにヒーローとしてどうなんだよ」

「いや、さつきの全部が全部嘘つてわけでもなくてだな。最近、怪しい動きをしている連中がいるんだ」

「……AIDA絡みか？」

「まだわからん。だが、可能性は高い。ヴィランがAIDAを利用するにせよ、自滅するにせよ危険なことには変わりない。早めに対処しなきゃならん」

「なら俺も……」

「ダメだ。お前はまだ仮免もなければ開眼もしていない。危険だし、規則違反だ」

「ちつ……」

三崎は無理やりにでも押し掛けようとも思ったが、三爪痕が係わっているかはわからない上に無暗に香住との関係を悪くするのも今後に差し障るかもしれないからやめた。

「そう焦るな。一刻も早く三爪痕をなんとかしたい気持ちも察するけど、焦つたところでいいことなんかないよ」

てめえに俺の気持ちがわかるか！ と、言いたい気持ちを堪え「そ

うだな」と、応えた。

「気を付けて帰れよ」

「ああ」

翌日の午後。

相澤から今回のヒーロー基礎学が救助訓練であることが伝えられた。コスチュームに着替え、バス移動となつた。

三崎のコスチュームは至る所に黒い革のベルトを巻いたようなコスチュームで肩と腹が露出していた。

何かを指定した覚えはないので文句はなかつた。ただ、少しばかり氣恥ずかしくもあつた。それでも、態度に出した方がより恥ずかしくなつてしまふとも思つたのでいつも通りの態度でいた。

常闇が何故か「同志か……」と、妙な共感をしていたように見えた。恐らく、勘違いである。

飯田が張り切つて、席順に並ばせたが、バスが観光バスのタイプでなく市営バスなどにあるタイプだつたためにから回つていた。

バス内では個性の話、緑谷の個性がオールマイトに似ているということを蛙吹が指摘した。そのあとは、ヒーローと言う職業が人気商売

みたいなところがあるという話から爆轟がいじられていた。

三崎はその話題に乗ることはなく、ただ傍観していた。志乃が生きていたらどうだつたんだろうか。と、そんな感傷に浸っていた。

訓練場に到着し、その広大なドームに拡がる様々な施設にU.S.J.かよと騒ぐ。

嘘の災害や事故ルームという名称で、本当にU.S.J.だつたとは誰の言か。割どこじつけにいつている様な気もする。

スペース13号というヒーローは災害救助で活躍するヒーローらしく今回の指導をするらしい。三崎は災害救助に全く持つて興味がないために欠伸を噛み殺しつつ、13号の言う小言を聞いた。

要約すれば、個性という危険な力を持つていて、それを人助けに活かすことを学ぼうということらしい。ヒーローらしい考え方と言えばそうなのだろう。逆説的に復讐を志す自分はヴィランらしいのだろう。まして、ヒーローになる気があまりないので、さもありなんと言つたところか。

ふと、目を横にやると、黒い何かが見えた。そこからは人影がみえ、やがてそれらが正体を表していく。

「一かたまりになつて動くな!! 13号、生徒を守れ!」

相澤がいち早く気づき、告げる。

「何だ? 入試時みたいにもう始まつてんぞつてパターン?」「動くな! あれば、ヴィランだ!」

三崎は、自分で心臓ではない何がドクンッと鼓動をしたのを感じた。

感染

嘘の事故や災害ルームにてヴィランが現れた頃。

オールマイトは出勤前に制限時間ギリギリまで活動したために、学校の仮眠室にて休まざるを得ない状況にいた。その姿は世間に隠している骸骨の様に細身になつた本当の姿となつていた。

教師の仕事に専念しなくてはいけない身で、ついついヒーローとしての仕事に手を出してしまう。反省しているが、果たして直す氣があるのか。

仮眠室のドアをノック音が聞こえた。そして、扉が開けられた先にいたのは八咫であった。

「久しいな、オールマイト」

本当の姿は世間一般には全く知られていないはずなのに、一目で何者であるかを見破られた。オールマイトは内心かなり焦った。その上、自分の既知であるかのような話し方だ。

「な、なんのことか。私は八木というものですか」

「隠す必要はない。あなたの事情は既に知っている」

「そう。彼は情報通だからね」

そして、傍に立っていたネズミなのか犬なのかよくわからない生き物。

「校長先生」

「YES！　ネズミなのか、犬なのか、熊なのか。かくしてその正体は

——校長さ！」

「本日も大変整つた毛並みでいらっしやる」

「秘訣はケラチンさ。人間にこの色艶はだせやしないのさ」

八咫は咳ばらいをして、暗に早く会話をさせろと伝えた。

「おつと、この話はまた今度。君が事件を解決に動いたことも今は後回しさ」

「それで、彼は一体……」

「11年ぶりだから覚えていないのも仕方あるまい」

「11年前……」

オールマイトは必死に記憶の中を探る。

「もしや、火野少年か!？」

「今は少年と言われるような年齢でもないがね。それと今は八咫で通っている。一応、プロヒーローになつたのでね」

「意外だなあ！ 君はヒーローには興味ないと思つていたよ」

「プロヒーローになつたのはその方が都合が良かつただけの話だ。しかし、今日はそんな話をしに来たわけではない。私が独自に追つている案件の捜索の中でオールマイト、ひいては雄英が狙われている可能性があることがわかつた。至急に対策を取つた方がいいだろう。既に襲われている可能性もある」

「なんだつて……!?」

オールマイトは立ち上がり、マッスルフォームへと姿をかえる。
「まだ話は終わっていないぞ」

「1・3号君にも相澤君とも連絡が取れないんだ。火野君の言う通りかもしれません。間に合わなくなる前に早く行かなければ」

「……なら、早く行きたまえ。生徒が危機かもしれないのだろう」

オールマイトは、すぐにU.S.Jへと向かつた。

「やれやれ……彼は変わらんな」

「そうだね。でも、このままではいられない。彼の容体も状況もそれを許してくれない」

「衰えてもなおNO. 1ヒーローで平和の象徴と謳われるその強さでも、抗えないものはある。どれほど強く、心が強靄でも資格がなれば、あれらには勝てん」

八咫は、色眼鏡の位置を直しながら呟いた。

広場の中央に現れたヴィランたち。その集団を引き連れてきたと思わしき黒い靄状の人間。

「13号にイレイザーヘッドですか……先日いただいたカリキュラムではオールマイトはここにいるはずなのですが……」

そして、広場の中央に陣取つてゐる手を全身に着けた男。

「どこだよ。せっかくこんなに大衆引き連れてきたのにさ……オールマイト、平和の象徴がいなーなんて……子どもを殺せば来るのかな？」

それらの声は小声でヒーロー達に聞こえることはなかつたが、その悪意を隠す気など一切ない。

ヴィランが直接ヒーローの養成所とも言うべき場所を襲うのは、ヴィランにとつてもかなりのリスクが付き纏う。だが、侵入者用センサーが反応することもなく中から出てきたことを考えると、何からの策があつてここに来たことが推測された。

それらを指摘する生徒たちもいた。

三崎は唐突に現れたヴィランの中に三爪痕の姿を探したが居ないようだつた。あれが誰かと組むことは考えづらいがもしかしたらということもある。三爪痕は突然現れるのでワープの個性を使つていることも考えられた。

相澤は13号に避難と学校側に連絡を試すように伝え、ヴィランに直接戦闘をするつもりのようだ。

「先生は一人で戦うんですか!? あの数じやいくら個性を消すつていつても!」

「芸だけじゃ、ヒーローは務まらん」

相澤はゴーグルをつけ、広場に飛び降りた。ヴィランは個性で狙い撃ちしようとするも発動することなく各個撃破していく。

ゴーグルをつけることによつて視線を隠し、連携を乱す。捕縛武器を使つて体制を崩し、相手に激突させる。数が多いと言えど、チンピラと大して変わらないようなヴィランであれば全滅は無理でも生徒が逃げる時間ぐらいは十分に稼げるだろう。

しかし、そう上手くはいかなかつた。黒い靄状のヴィランが僅かな隙に階上まで上つて來た。

「初めてまして。我々はヴィラン連合。僭越ながらこの度ヒーローの巣

竜、雄英高校に入らせて頂いたのは平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのこととして

何故か、本来ならばここにオールマイトがいることを知つていたようだ。そして、それに必要な役割を果たそうとしていた。

そこに爆轟と切島が攻撃を仕掛けにいった。

「その前に俺たちにやられることは考えてなかつたか!?」

しかし、その攻撃は効いていた様子がなかつた。

「危ない危ない……そう、生徒と言えど優秀な金の卵」

靄状のヴィランから一気に靄が広がる。

「散らして轟り殺す」

そして、包み込むように閉じていく。

そして、三崎が気付いた時には土砂ゾーンの上空にいた。

「つと」

ヴィランに囲まれていたが、轟が一瞬にして氷漬けにしていた。ヴィランたちにこのままでは壊死すると脅しをかけて、オールマイトを殺せる根拠を聞き出しに行つていた。

そして、ヴィランは少し抵抗したもののあっさりと口を割つた。脳無という黒いヴィランが本命であると。

「助けに行くのか？」

「あんな奴らに平和の象徴は殺れないし、殺らせねえよ」

「そうかい」

轟が中央広場に戻るのに三崎も付いていった。

「危ねえから、お前は残つてろ」

「はあ？　てめえが言える立場じゃねえだろ。てめえも俺も生徒でしかねえんだからな」

「……そうだな」

意外とのわかりがいい。三崎はいまいち轟という人間を測りかねていた。ただ単純な実力で言えば、認めたくはないが今の自分より強い。それが単純に嫌だつた。

向かう途中で爆発したかのような轟音が響き渡つた。土煙が立ち

昇っているところから考えておそらく戦っている。それもオールマイトが。

一気に駆けて向かつた。

そこには脳をむき出しにしたヴィランをバツクドロップを決めていたが、靄のヴィランのゲートにより逆に攻撃をくらったオールマイトの姿があった。

近くには、緑谷、爆豪、切島の姿が見えた。少し離れた位置には蛙吹と峰田の姿も見える。

爆豪がヴィラン達の死角から一気に飛び出し、靄のヴィランを爆破で吹き飛ばした。

さらに轟の氷結させる個性により、脳むきだしのヴィランの半身だけを凍らせた。それによつて締めが緩まつた隙にオールマイトは抜け出した。爆豪は靄のヴィランを組み伏せていた。

俺の出る幕はねえな。そもそもサポートになるかも微妙なところだつたが……

そう思つていた矢先だつた。

「攻略された上に全員ほぼ無傷……すごいなあ、最近の子どもは……恥ずかしくなつてくるぜ敵連合……！」

そろそろやいていたが、その言に諦めはない。

「脳無、爆発小僧をやつつけろ。出入口の奪還だ」

脳むきだしのヴィラン、脳無は氷結した身体を無理に動かし身体が碎けても構わずに立ち上がつた。

「皆、下がれ！ なんだ!? ショック吸収の個性じやないのか!？」

碎けた身体がみるみるうちに戻つていく。

「別にそれだけとは言つてないだろう。これは超再生だな。脳無はおまえの100%にも耐えられるように改造された超高性能サンドバッグ人間さ」

動き出した脳無は、轟に向かつて走り出す。そして、その速度は

速い!!

その移動から攻撃までの一連の動作によつて生じる余波でさえ、強

烈な風圧だった。

それを目で追える者は、その場ではオールマイトだけだった。故に、爆豪には避けられない。しかし、爆豪に脳無の攻撃が当たることはなかつた。オールマイトがかばつたからだ。

「加減を知らんのか……」

「仲間を助けるためさ。仕方ないだろ？　さつきだつてほらそこの地味なやつ。あいつが俺に殴りかかるうとしたぜ？　誰がために振るう暴力は美談になるんだ。そうだろ？　ヒーロー？」

大仰に手を広げ。たくさんの手を受けたヴィランは語る。

「俺はな、オールマイト！　怒つてるんだ！　同じ暴力がヒーローとヴィランでカテゴライズされ善し悪しがきまるこの世の中に！　何が平和の象徴！　所詮抑圧のための暴力装置だ、お前は！　暴力は暴力しか生まないのだと、お前を殺すことで世に知らしめるのさ！」

その語りにオールマイトは冷静に答えた。

「めちゃくちゃだな。そういう思想犯の眼は静かにもゆる者。自分が楽しみたいだけだろ。嘘吐きめ」

先ほど語っていたヴィランは面の様に付けていた手で隠れているのにも関わらずニヤついているのが見て取れた。

「バレるの早……」

余裕なのか、頭のねじが飛んでいるのか。あるいはその両方か。異質さが際立つ。

みんなでオールマイトをサポートすれば、撃退できる、と切島は言うが

「ダメだ！　逃げなさい」

「さつきのは俺がサポートに入らなければかつたでしよう」

緑谷も何か言いかけたが、口を閉ざした。

「それはそれだ、轟少年！　ありがとな！　しかし、大丈夫！　プロの本気を見ていいなさい！」

「脳無、黒霧やれ。俺は子どもをあしらう」

「クリアして帰ろう！」

ヴィラン達が一斉に攻勢に出る。

「おい来てる。やるつきやねえって」

「ちつ！」

三崎もまた万全ではないが、構えを取るしかない。

しかし、その前にオールマイトが脳無に立ち向かった。その勢いに大量の手を付けたヴィラン——死柄木弔は気圧され、動きを止める。脳無とオールマイトの拳がぶつかる。

「ショック吸收つて自分で言つてたじやんか」

「そうだな！」

「真正面から殴り合い!?」

脳無とオールマイトの殴り合いは、そのままU.S.J.の外へ

だつた。

「無効でなく、吸收ならば！　限度があるんじやないか!?　私対策!?」

私の100%に耐えるなら！　さらに上からねじ伏せよう!!」

「ヒーローとは常にピンチをぶち壊していくもの！」

「ヴィランよ、こんな言葉を知つてるか!?」

—Plus Ultra!!

オールマイトの一撃が脳無のボディを捉え、そのままU.S.J.の外へと吹き飛ばした。

「……漫画かよ。ショック吸收をないことにしちまつたぜ。究極の脳筋だぜ」

「やはり衰えた。全盛期なら5発も撃てば充分だつたろうに300発以上も撃つてしまつた」

「衰えた？　嘘だろ……完全に気圧されたよ。よくも俺の脳無を……チートがあ……！」

「全つ然弱つていないじやないか!!　あいつ……俺に嘘を教えたのかチートがあ……！」

「どうした？　来ないのかな!?　クリアとかなんとか言つてたが……出来るものならしてみろよ!!」

死柄木は、オールマイトの気迫に気圧されたが、まだ余裕があつた。

「……あんまり使いたくなかったけど、仕方ない。黒霧帰るぞ」

「死柄木弔……あれを使うのですね」

なんだ、帰るのか？

死柄木は懐から黒い球体の物体を取り出した。

「直接この目でオールマイト倒されるとこが見れないのは残念だけど、これでやられてくれるならそれはそれで良いな」

黒霧は靄を広げ、死柄木はその中に入つていきながら、球体を投げ捨てる。

球体の物体はガラスの様に碎け、黒い泡の様な中身が溢れていく。「そいつは、他者の精神に入つて暴走を引き起こす。平和の象徴が平和を壊すなんて皮肉が効いて面白いと思わないか？」

そう笑いながら消えていった。

「まさか、A I D Aか!?」

「知つてゐるの、三崎君！」

「ああ。だが、詳しく話してゐる時間はねえ！　こいつは逃げるしかねえんだ！」

俺が憑神を開眼させてさえいれば……！

黒い泡は、何もない空間に消えては現れる。それはまるで何かの鼓動であり、生き物の様に見える。そして、この場で最も近くにいたオールマイトに向かつて動き出した。その速度は、脳無に比べたら大したことがない速度だった。

「オールマイト！　そいつに触れるな！　攻撃されたら、消えちまう！」

「な、何!?」

しかし、オールマイトは既に体力を使い果たしており、一步でも動けば本当の姿を晒してしまいかねない状態だった。

Shit！

そんな悪態を内心で吐く。

だが、そのオールマイトの状態を知つてゐる者も居た。

「オールマイトオーー!!」

そう言つて駆け出したのは、緑谷だつた。オールマイトをかばうために前に立つた。

「緑谷少年!!」

「S M A S H!!」

A I D Aに向かつてオールマイトの天候をも変える一撃を彷彿とさせる拳が放たれた。その一撃によつて緑谷の腕は、うつ血するほどだつた。

しかし、A I D Aには意味がなかつた。拳によつて生じる風圧も無いように動いていた。

「そんな……!!」

そして、黒い泡が緑谷を貫いた。

開眼

「ぐつ……!!」

「緑谷少年!!」

守り育むべき生徒に守られてしまつた。そんな後悔が過るが、まだそんな思考に陥つていられるような状況ではない。

明らかに緑谷の様子がおかしい。

「あ……あ。aaaaaaaaaaaaaaaaAAAAAAAH!!」

どこかノイズ交じりの絶叫。やたらめつたらに身体を揺さぶり、それによつて暴風が巻き起ころ。砂埃が大きく舞い上がり、視界が遮られる。

「なんだ!? どうしたんだ! 緑谷のやつ! あの黒い泡のせいか! ?」

「あのヴィランは他者の精神に入り込み暴走させるとか言つてたらから、それだろ」

「はっ! デクをぶつ倒すいい機会だ! 要は大人しくさせりやいいんだろ!!」

「やめろ! あれは迂闊に手を出していいもんじゃねえ!」

志乃が消えてしまつた時のことが、フラツシユバックする。まだ三爪痕とA I D Aが同一のものであるとわかつたわけではないが、あの悲劇が起こつてしまふのではないかと心の奥底が訴えてくる。

「そうだね。君たちは下がつていなさい」

そう声をかけてきたのはセメントスだつた。気付けば雄英教師たちがU S Jに集まつていた。

「他のみんなは!?」

「ヴィランは全て取り押さえて、生徒はみんな保護したよ。後はここだけだ。君たちも早く避難しなさい」

「ちつ……」

「ここで助けに行けないなんて男らしくねえ……けど、プロに任せるとしかねえよな」

ただ、ここを去ることしかできない歯がゆさ。自身の力のなさを痛感することしかできなかつた。

そして、三崎は出口の方を見るとそこに八咫が居ることに気付いた。

「どうした？ 三崎？」

「いや、ちょっとな。先行つてくれ」

「……よくわかんねえけど、お前も早く来いよ」

三人がU.S.Jから出ていくのを見送り、八咫に話しかけに行く三崎。

「なんで、ここにあんたが居んだよ？」

「近くでA.I.D.A反応出始めてな。ここにも警戒するよう通達に來ていた。このタイミングで來るとは思つていなかつたがね」

緊迫した状況だというのに、その言葉は落ち着いていた。

「あの2人も來てているのか？ 碑文使いじやなきや、A.I.D.Aはどうにもできねえんだろ」

「2人は別件で動いている。よつてすぐにここに來ることはできない」

「なら、どうすんだ！」

「君がやりたまえ。君も碑文使いだ」

「……本氣で言つているのか？」

「もちろん。このままでは深刻な被害がでることは避けられん。かと言つて、プロヒーローであつてもこの事態を鎮静化させることは不可能だ。君の言う通り、碑文使いにしかこの状況は打開できない」

ヒーロー志望の学生とはいえ、まだヒーローの仮免許も取得していない人間に最前線に立てとその男は言つた。プロヒーローであるはずのその男が。

「俺は別にいい。ただ、そんなこと他のヒーローが許すわけないだろ」

「許すさ。なあ、校長先生」

「校長……?!」

傍にいた、動物が個性を持つたという希少な存在である雄英高校の校長。三崎はそのサイズ感故に全く気付いていなかつた。

「……本当は絶対にそんなことはさせはいけない。けれど、この場は君に頼むしかないのさ」

「さあ、行きたまえ。三崎亮君」

「どうなつても知らねえぞ」

三崎は、走つて緑谷の下へと向かう。

「君、本当にプロヒーローかい？」

校長のその質問は、三崎に対し言つた言葉に対しての疑問だつた。プロヒーローが子どもに「対処できるのはお前だけだからお前が対処しろ」なんて、例え事実であつたとして言えるわけがないし、させることもできるわけがない。

「先ほども言つた通り、プロヒーローになつたのは都合のためであつて、私に適性があるとは思つていない。そもそも、私の本職でもない」「そうだつたね。そうでなきや、私が君の言う通りになんてしないのさ」

「（）協力痛み入る」

「私としても苦渋の決断なのさ。皆には、何を言われても仕方ない」

それは、校長の嘆きであつた。一言で済ませてしまうならば大人の事情。しかし、こんな事情に生徒を巻き込むことを許してしまう自分に憤つてもいた。

三崎は、不思議と高揚感があつた。確信にも似た予感があつた。自分はもうすぐ開眼に至る。八咫の言葉を安請け合いしたのも、今この場であればモノにできそうだと感じればこそだつた。

緑谷の居る場所へ。しかし、その道をセメントスが個性『セメント』を使つて塞いでいた。被害拡大を防ぐためだ。他のヒーロー達も緑谷を何とか無事に助けるために尽力している。

三崎は双剣を取り出して、セメントスが作つた壁の破壊を試みたが、まるで歯が立たなかつた。

当のセメントスは緑谷を抑えるために前線にいるために三崎の存

在に気付いてはいなかつた。気付いていたら、止めるのが当然だ。

「くそっ！」

いや、まだ自分にはやれることがある。これもなんとなくでしかなかつた。けれど、やつてやる。ただ、それだけのことだつた。

双剣を捨て、何も背負つていない背中にまるで剣を引き抜く様な動作をする。

そして、何もないはずの虚空から大剣が出てきた。

「これで、どうだあ！」

力任せにV字に斬りかかつた。

「虎乱襲!!」

それは斬るというよりも碎く様な一撃だつた。壁は目論見通り突破できた。武器を投げ捨て、再び走る。

視界に入った緑谷は蹲つたまま動いていなかつた。黒い泡が全身を纏い、四肢の一部が異形な姿になりつつあつた。

「緑谷!!」

「m_i……s_k_i_k_n……?」

緑谷の声がひどく聞き取りづらかつた。

「なんで、君がここに!? 早く逃げなさい！」

ミッドナイトが声を上げる。

彼女の個性「眠り香」によつて、緑谷を眠らせようとしていたが、何故か効力を発揮できず困惑していた。そこに、更に生徒がやつて来たのだから対処に困る。

「校長から許可はもらつてる。勝手にやらせてもらうぜ」

「ちよつと、そんなこと許せるはずないでしょう！ 大人しくしていなさい！」

「俺ならA I D Aを……あの黒いのを取り除ける」

「……!? だとしてもダメよ」

現状は芳しいものとは言えなかつた。黒い泡からは、黒い腕が伸びて攻撃を仕掛けてくる。近づけば、緑谷が超パワーによる風圧によつて吹き飛ばされる。そのたびに、緑谷の身体が壊れていく。ただ、不幸中の幸いとも言えるのか黒い泡が身体を纏つてからは個性を発動

する際に起きるダメージがかなり軽減されていることだった。しかし、ヒーローとして考えていけないことだが、個性によるダメージで自滅という可能性もなくなつたためにどうしようもなくなつていた。

「でもよ……ふつ！」

伸びてきた黒い腕を三崎は大剣で弾き飛ばす。

「埒が明かねえんじやねえか。このままじゃジリ貧だ」

エクトプラズムもブラドキングもスナイプもセメントスもプレゼント・マイクも緑谷を抑えることができずにいた。相澤と13号は負傷のためにこの場にはいない。

そして、オールマイトは……

「そういうや、オールマイトは？」

「オールマイトは……あの黒い球体の中よ」

真つ黒のために遠近感がまるで働かないが、確かに緑谷の傍に黒い物体があつた。

「そうかよ。だが……俺ならやれる」

三崎は緑谷に直行する。特に考えなどはなかつた。

「待ちなさい！」

それを視界の端で捉えたエクトプラズムが、分身体を使い三崎を捕獲にかかりつた。

黒い腕に囲まれる中、安全に保護するのは不可能に近かつた。

黒い腕の一撃は、セメントスが作る壁も容易く切り裂き、粉碎する。その数も時間が経てば経つほどに数を増やしていく。対処に来たプロヒーローたちに行動不能になるほどの怪我を負つていなかつたが奇跡的に思えるほどに手強かつた。

「誰も邪魔すんじやねえ!!」

あと少しで、何かが掴める。ここで成長できなければ、きっと一生三爪痕には届かない。このまま被害が拡大すれば、短い付き合いとはいえ、クラスメイトを、緑谷を見捨てるに至ることになる。誰かを見捨てるという選択肢は選べない。誰かが消え去る様をまた見たくなかった。

ハ長調ラ音が頭の中で響く。

そして、何かの声が聞こえた。

『ミ・ツ・ケ・タ……!』

「……来い」

「ふと、口からこぼれる。何かを呼ぶ。誰を？何を？」

「……来い！」

そして、何かの影を感じ、オールマイトが脳無を吹き飛ばして作った穴に目をやる。

「オーヴァーーン!!」

その人影は笑みを浮かべたように見えた。

そして、再びハ長調ラ音が響いた。

「来た！……来た！……来た！……来た！……来たあああああ!!!」

三崎の身体が変容した。

以前使っていた変身の個性の様に、巨大な人形の様な姿。そして、その右手には巨大な死神の鎌の様なものが握られていた。

最も、その姿を認識できるものは碑文使いに限られる。

憑神を使用する際、その空間は法則がすべて塗り替えられる。時の流れも、物理現象も全く異質なモノへと変容する。AIDAも近い性質を持つが、AIDAは触れたものに限られ、憑神は辺り一帯が強制的に変容させる。しかし、それらを知覚できるものも碑文使いだけだった。

AIDAから黒い腕が視界を埋め尽くすほど、押し寄せてくる。三崎は鎌の一振りで全て薙ぎ払つた。

「うおおおおお！」

左手からは球体の電撃を緑谷に向けて放つ。

「g u a a a a a a a a !!」

黒い泡も含めてすべての動きが鈍くなつた。

「悪いな、緑谷。だが、これで終いだ！」

右手にあつた鎌が消え去り、右腕が砲台の様に変じる。そこから球体のエネルギーを緑谷に向けて発射し、直撃した。人形の右腕は砲身が縮み、盾のように拡がる。そして、球体のエネルギーからあらゆる

何かを吸収していく。最後には発射した球体も右腕に吸い込まれていった。

緑谷が蹲っていた状態からそのままうつ伏せに倒れた。そして、黒い泡が離れ消えていく。異形と化していた部分も元通りになつていった。

「収まつた……？」

教師の誰かが言葉をもらす。

「ククク……ハーツハツハツハ!!」

そう笑い声をあげたのは三崎だつた。

「どうだ！ 見たかよ！ 我の力をよ！」

達成感、優越感、そんな感情に入り浸る。プロヒーローにさえできないことを自分はやつてのけた。これを喜ばずにいられるはずがない。

そして、オールマイトを覆つていたと思われる黒い幕も消え去つていく。

そこに立つっていたのは、三崎にとつては誰かもわからない姿だった。

「……誰だ？」

教師たちには、三崎が何かをしたことは分かつたがそれ以上のことはわからなかつた。三崎の様子も気になるが、それ以上に緑谷とオールマイトを急いで保健室に連れていかなければという思いだつた。

「大丈夫ですか!? オールマイト!」

ミッドナイトが駆けつけた。

「ああ、何とかね。緑谷少年は……？」

「自身の個性でケガをしていて、気絶もしていますが、無事です」
ブラドキングが、緑谷の容態を確認し答えた。

「そうか……よかつた……しかし、彼には見られてしまつたな」
「もしかして、オールマイト……なのか?」

「ああ、昔あるヴィランとの戦いで負つた傷が原因でね。活動に制限

時間があるんだ

「まさか……三爪痕……!?」

「違う違う。でも、それに負けず劣らずの大物だよ。それとくれば
もこののことは他言無用で頼むよ」

「あ、ああ」

三崎の中で異常なまでの高揚感は既に失せていた。しかし、三爪痕
を倒しうる力を手にできた喜び、三爪痕への復讐心は燃え上がり続け
ていた。

11年前の真実

雄英高校がヴィラン連合に襲われた翌日、雄英高校は臨時休校となつた。その日、八咫はオールマイトの下に訪れていた。

「まずは、昨日の件を謝罪しておこう」

「それは、何についてだい」

「あなたの秘密が一部とはいえ三崎亮にばれてしまったことだ」

「……そこはまあ、仕方のないことだ。それより、私は君が三崎少年をあの場に差し向けたことに対しても怒っているよ」

「ヒーローとして、間違っているのは理解している。だが、いつかは必要になることだつた。それがあの時だつただけだ」

「君は……！　まあ、もう何も言うまいよ。それで、謝罪だけじゃないんだろう？」

「その通り。まずはこれを見てもらおう」

八咫は、透明なビニールに包まれた何かを取り出しテーブルの上に置いた。光っていること以外には何もわからない。

「これは、一体？」

「三崎亮があの事態を解決した後に手に持っていたのだ。この物質についてはきちんと調べたわけではないが、おそらく緑谷出久がの持つ個性が可視化されたもの。その欠片だと思われる」

「そ、それでは緑谷少年は!?」

「安心したまえ。彼から個性が失われたということはない。だが、しきるべき知識と施設を持つモノならばこれを複製し、利用することも可能……かもしれないな」

「それで、君はこれをどうするつもりなんだ？」

「あなたに差し上げよう」

「ど、どうして？」

「お詫びの品といったところだ。それに私にとっては無価値だ。それにもこの存在が割れれば狙われる要因にもなり得る」

「君は……君は変わらんなあ」

今、利用価値がないと言えば、確かにないかもしない。しかし、平

和の象徴が持つ個性を利用できるかもしれない物質が存在するとして、それが如何ほどの価値になるのか想像もつかない。

「そうでもない。そして、お詫びにしたいことはまだある」

「まだ、何かあるのかい？」

「11年前の事件。何故、起きたのか知りたくはないかね？」

「……聞かせてもらうよ」

そして、八咫は一から語り始めた。

かつて一部地域に壊滅的な打撃を与えた事件。無事に解決できていなければ、日本にとどまらず世界にも大きな被害をもたらしたともいわれるほどの事件。8人のヴィランが暴れた、その事件。

そのヴィランは、人ではなかつた。人ではなく、ある存在を産み出すために造られた人造生命。俗に言うならばホムンクルス。そのホムンクルスの名をモルガナといった。

そして、モルガナによつて造り出そとした存在。それは神であった。より正確に言うのであれば、この個性社会において神にも等しい能力を持つたシステム。そういう個性を持った人間だつた。その個性とは、全ての人間の個性の制御を可能とする個性である。他者の個性を封じることはもちろん、それを解除したり、暴走する個性を抑制する。あるいは、強制的に発動させることも可能とするものだつた。それを望んだ男は、世界を平和にしたい一心で行つていた。研究を行つた者の名はハロルド・ヒューリック。その男に出資した者の名を番匠谷淳。

当時、既にオールマイトがトップヒーローになつており、犯罪率が低下していつている最中であつた。平和の象徴、既にそう称える者もいた。しかし、番匠谷はオールマイトも人であると断じていた。いつかは限界が来ると考えていた。人である以上、病気に合うかもしれない。事故に遭うかもしれない。どちらもなくずつとヒーローを続けたとしてもいつかは引退する。そして、その後を背負うものは、存在するのか。いたとしても、さらにその先はどうなるのか。

いくら法を整備したところで個性の使用など心ひとつだ。ヒーローは個性を用いて個性を悪用するものたちを捕らえる。しかし、結局のところはそれでは根本的解決になりえない。そのためのシステムが必要だった。

それを可能としうる人物がハロルドだった。不世出の天才。彼が何故に日本に渡つて来たのかはわからなかつたが、彼は個性研究をしてきた人だつた。有名な論文の一つも書いていない彼であつたが、彼は人工的に個性を産み出すことに単独で成功していた。何故か彼は、それをどこにも発表もせず、またどこの研究所にも所属しておらず、たまたま番匠谷と出会つた。番匠谷はハロルドという天才が居るという情報だけは知つており、声をかけていた。

そして、番匠谷は今世の中に対する悩みをハロルドに打ち明けた。ハロルドはその悩みに対し環境とお金さえあればその悩みを解決できると力説した。番匠谷はその言葉を信じ、お金をかき集めた。当時、まだまだ広まっていないクラウドファンディングから、銀行からの融資、知人からもお金を借りた。研究施設も何とか借りることができた。

ハロルドは、場所を整えてから1週間もかからずにはモルガナを創り出して、モルガナには、様々な能力があり、そのうちの一つデーダドレインは、個性を封じる個性であり、番匠谷はそれに希望を見出した。ハロルドはまだこれは序の口であるという。このモルガナから産みだされる存在こそ、まさしくこの世の神となり得るもの、救世主であると語つた。

ほどなくして、モルガナから女児が誕生した。女児と言つても、生まれたばかりの段階で既に身長は150センチほどあり、銀の長髪で、言葉も交わすことができた。女児にはアウラと名付けられた。

アウラが産まれたその日、ハロルドは姿を消した。そして、モルガナが暴走した。モルガナは、自身の娘とも呼べるアウラを殺そうと動いたのである。アウラは、事前に気付いていたらしく、既に逃走していた。モルガナは一つの肉体であつたはずのモルガナは8つに分かれ、それぞれ形を変えた。その姿は、ハロルドが肌身離さずに持ち歩

いていた叙事詩に登場する8つの禍々しき波と呼ばれる存在に酷似していた。

8つに分かれたモルガナ。通称八相は、それぞれがアウラの捜索を始めた。アウラを探すためなら街を破壊し、道行く人々を攻撃することもためらいがなかつた。

その様な存在にヒーローが黙つているはずもなく、すぐに多くのヒーローが駆け付けたが、モルガナは異常なまでに強かつた。既にNo.1ヒーローとなつたオールマイトでさえ、単独では倒すことが叶わなかつた。

ありとあらゆる攻撃が効かず、モルガナの攻撃の全てが一撃で人の命を屠る威力を持つていた。モルガナは、積極的に人を攻撃するわけではなかつたので近づかないことが対抗策だつた。

アウラは、8相の一つ死の恐怖「スケイス」に見つかり、追いかげられていた。そして、その場に居合わせたモノが居た。ヒーローライセンスを取得したばかりのヒーローオルカと当時中学生で一般人であつたカイトと言う少年だつた。

オルカはアウラを助けるべく、スケイスに挑む。アウラは、その隙を見てカイトに一冊の本を託した。アウラはこの本を指してこう言つた。

『強い力……使う人の気持ちひとつで救い。滅び。どちらにでもなる』

オルカは、スケイスに戦いを挑んだもののデータドレインをくらい、カイトに「逃げろ」とだけ残し、遺体も残らず消え去つた。

スケイスは、カイトにもデータドレインを撃とうとしたが……
「私が来た!!」

オールマイトが、スケイスの攻撃を拳による風圧で阻止した。普通のヴィランであれば、その一撃で瀕死もしくは、それなりの怪我を負うだろうが、スケイスは多少仰け反つた程度だつた。

「少年!! 早く逃げたまえ!!」

「でも、そいつは!!」

「大丈夫! 何故つて? 私だからだ!」

オールマイトは、スケイスと善戦できていた。それはオールマイトの規格外の強さ故であつたが、それは同時に他のヒーローでは戦いにもならない差だということだつた。八相の共通の特徴として、攻撃の一切が効かない。衝撃によるノックバックこそ発生するが、まるでダメージも痛みを感じている様子もない。それはオールマイトの100%の一撃をくらつて、ようやく動きの鈍りを少しだけ見せる程度であつた。

オールマイトと言えど内心で「SHIT」と叫ばずにはいられなかつた。

オールマイトができることは、周りの人間が全員避難するのを待つて自身も全力で離脱することである。他のヒーロー達では時間稼ぎをするどころか、一瞬で命を奪われかねないため中々前線にでることはできなかつた。TOP10入りしているヒーローでやつと足止めが可能ぐらいである。たつた一体でそれなのだから8体が全國に散つてゐる状況で避難誘導に大半の人員がそちらに割かれていた。

不幸中の幸いというべきか、八相は人間に興味を示すことはほとんどない。邪魔をする相手には全く容赦はないが、邪魔した相手であつても積極的に追いかけることはない。と言つても、その前に大半の人間は死んでしまう。

カイトはその場から逃げたかつたが、同時にオルカの仇を取りたかつた。そして、アウラから渡された一冊の本。少女はいつの間にか姿を消していたが、カイトの頭の中で声が響く。

『本を開いて』

カイトは言われた通りに本を開くと、本から何かが流れ込んでくる様な感覚を覚えた。耐え切れず本を投げ捨てるが、まだ何かが流れ込んでくる。

そして、右腕には幾何学模様で半透明の腕輪が付けられていた。それは、八相がデータドレインを放つ際に生じる、物体によく似ていた。「うわあああああ！」

そして、右腕はスケイスに向けられ、データドレインが放たれた。データドレインはスケイスに直撃した。スケイスは、今までの攻撃を

くらつた時と違い、全身の一部が欠けていた。十字架の杖も消え去り、明らかに弱体化している。

オールマイトは突然の事態に困惑したが、このチャンスを逃すまいと全力の一撃をスケイスの放つた。

「UNITED STATES OF SMASH!!」

スケイスは、粉々になつて吹つ飛んでいった。

それが、八相が初めて撃破された時の出来事である。この闘いに巻き込まれた人々も多くおり、その地域の病院がどこも満床になつてしまふほどだった。その中には、三崎亮もいた。

スケイスの残骸は密かに、ハロルドの研究について知つていた政府の人間に回収された。スケイスを基の状態に復元することは不可能とみると、一部だけでも生かしておきたかった政府は、人間に移植することを考えた。そして、たまたま選ばれたのが三崎亮だった。移植が必要となるほどの怪我を負つており、自然な形になるように取り計らわれた。

そして、カイトは八相と闘つていくことになつたのである。その道則は険しいものだつた。八相が強力な敵であることもそうだが、一部ヒーローや一般人も時に辛辣であつた。彼自身は無個性であつたが、データドレインという異質な力を使つていたことには変わりなくヴィラン扱いするものが居た。また、データドレインは八相の使う特徴的な力もあり、それも嫌悪に拍車をかけていた。助けられなかつた人を指して、逆恨みする人も少なくはなかつた。

そんな困難な中でたくさんの犠牲（その犠牲の中にはアウラも居た）を払いながらも八相の全てを撃破し、無事事件は解決された。カイトは間違いなくその立役者であるが、本人は報道されることを拒んだ。犠牲者がでたことはもちろん無個性であつたとはいえ、個性の様な力を使つた。それは、この社会では立派な犯罪である。本人が望んだこともあり表立つて、彼が賞賛されることとはなかつた。

しかし、物理的に死んでしまつた人たちは二度と返つてくることはなかつたが、データドレインによつて、影すらも失つてしまつた人た

ちは帰つて來たのである。それを大きく称える人もおり、ネットで力
イトは伝説のヒーローとして名をはせた。

こうして、大災害にも等しい事件は幕を下ろした。

八咫は、三崎亮と日下千草がモルガナの臓器を移植され特別な個性
が使えることを伝えた。同時にそれはワン・フォー・オールやオール・
フォー・ワン以上に秘匿されなければならない個性であることも伝え
た。

「それで？ この話にも何か意図があるんだろう？」

「人聞きが悪いな。ただ、一つ伝えておきたかった。アウラを復活さ
せようとする動きが政府にあるとね」

「何だつて！？」

モルガナの事件を引き起こした原因とも言えるためオールマイト
も心中穏やかではいられない。

「一度は破棄された計画だが、モルガナの細胞はまだ碑文使いの中に
生きている。と言つても、現状はA I D A対策のために碑文使いが集
められているのだがね」

「つまり、君はその責任者か」

「その通り。これは政府の命令であり、根津校長にも話は入つてゐる」

「それでか。三崎少年があの場にいたのは」

「番匠谷淳の懸念はただ一人のモノではないということだ。碑文使い
は、平和の象徴に代わつて平和のシステムを創り出す」

「なら、何故あそこで三崎少年を送り込んだ」

下手をすれば、三崎亮は再起不能となつていたかもしれない。

「彼の覚醒を促すため。それと、オールマイトを失うこと避けた
かつた。オールマイトが敗れたとなれば社会の混乱を招く」

「……情けない話だ。平和をもたらす平和の象徴が、平和を保つため
に守られるなんて」

「これで話は終わりだ」

八咫はその場を去ろうとしたが、扉に手をかけて動きを止めた。

「そういえば、聞いていなかつたな。オールマイト、AIDAをどう思つた？」

「どう思つたつて……恐ろしい存在だと思つたよ。ただ……」

「ただ？」

「緑谷少年に感染したAIDAに閉じ込められてたわけだけど、閉じ込められたというよりは、何かから守ろうとしていた様な、そんな印象を受けたよ」

「……ふむ。参考にさせてもらおう。失礼」

彼は思考を続ける。他のヒーローより圧倒的に様々な知を持つ彼は何を思うのか。彼自身の願いはどこにあるのか。オールマイトは八咫が悪だと思っていないが、どこか歪さを感じるのであつた。

幕間 始まりの日

これは、この物語の発端。彼らが知る由もない知られざる話である。

ハロルド・ヒューリックは、天才であった。彼が生まれたころには既に、個性持ちの方が多数派となつてゐる時分であつた。そんな中で、彼は無個性として誕生した。しかし、その天才ぶりは生半の個性持ちなどより圧倒的に優れた力だと言えた。それは自他共に認める事実であつた。そんな彼が個性について研究をするようになつたのは、無意識にコンプレックスになつてゐたのか……それは彼のみぞ知ることである。

彼は、将来はいずれほぼ100%の人間が個性を持つだろうことを確信していたが、同時に個性を持つ者が完全に100%になることもないだろうと考えていた。そして、個性を持つていたにしても自身の望まない形、望まれない力、気付くこともできないような異質、あるいは小さな力。そんな問題を抱えることは、想像に難くなかった。

ヒーローという存在が、ヴィランを退治するそんな世の中は対処療法であつて、根本の解決には至らないと。だからこそ、全ての人間が個性を扱え、自身の望む形に変化させ、制御を可能とする手段が必要だと考えた。自身ならきつとそれらを可能にすることができると信じていた。しかし、その様な手段がそう簡単に見つかるはずもなく年月だけが過ぎ去つていく。周りの研究者たちの視線も天才に期待する目から冷ややかな視線へと変わつていくのも当然であつた。

彼は、途方に暮れ人の視線を避けて研究室の外へと出かけることが増えた。そして、ある時、一人の女性を見つけた。一目惚れであつた。研究以外のこと興味を持てたのは、とても久しぶりであつた。彼は、柄にもなく彼女をナンパしに行つた。慣れないこと故に拙い喋り、たどたどしい言葉、とても天才と呼ばれた男には見えなかつた。彼にとつて幸いだつたのは、その女性が聰明な人であつたことである。笑いながらハロルドの言葉を受け止めた。立ち話もなんだからと近くの喫茶店へと入つた。

彼女の名は、エマ・ウイーラントと言つた。彼女と会話を重ねたハロルドは、彼女への愛を募らせていつた。そして、会話を重ねていくうちに彼らが互いに無個性であることを知つた。しかし、互いにその個性がなくとも自分自身にはそれに負けないモノがあると語つた。ハロルドは自身の頭脳である。エマは、自身の夢である。夜に見る方の夢である。

ハロルドは意外に思つた。彼女もまた自身と同じように自身の知性にこそ自信があるものだと思つていたからだつた。

彼女は、その夢に夢とは思えないほどのリアリティを感じていた。これは人々に広めたいとそれを基に叙事詩をしたためていた。その叙事詩のタイトルは『黄昏の碑文（Epitaph of the Twilight）』。彼女にとつてその叙事詩は、架空の出来事などではなく、自分の知りえないどこか遠くで実際に起きた出来事なのだと、そう語つた。

ハロルドはそれを興味深く思つた。この聰明な女性が、そこまで語るモノ。夢が実際にどこがで起きていたという荒唐無稽な話。エマはその話をしたのは初めてではなかつたが、誰も信じる者はいなかつた。エマの書く叙事詩を面白いという人はたくさんいたが、そのファンタジーな物語が実際にあつたことと信じる者がいるはずもなかつた。

しかし、ハロルドはその言葉を信じた。きっと、それこそがエマの個性なのだと。誰も知らない世界を観測する個性なのだと。

ハロルドは、エマにその叙事詩を読ませてほしいと頼んだ。エマは、それを快諾した。

ハロルドは、黄昏の碑文を熟読した。そして、同時に考えていた。この世界が本当にあるとして、ただ一人が観測できる世界の存在を証明することができるのであるのか。熟考はしたもの、結論は初めからわかつていた。不可能であると。ハロルドは絶望した。天才ともてはやされようとも自分には成し遂げたいことが何一つとして成し遂げられていない。

ハロルドは、黄昏の碑文に描かれた世界を証明する方法はないかと自身の研究をつづけながら考え続けた。研究とは未知を既知へと変えるためのものだ。不可能が可能になることを起こすのが当たり前の世界。彼に諦めるという選択肢はなかった。幸い、彼にはエマとの逢瀬という癒しができていた。

彼女との会話は気持ちが弾む。馬鹿な人たちと話す苛立ちがない。幸せとはこういうものかと実感するほどに多幸感があつた。しばらく後にハロルドは、エマと交際するようになつた。しかし、自身の研究とエマの世界の証明はいくら時が経とうと進展をみせることはなかつた。

ある時、個性に関する論文を読み漁つているときに、無個性に共通している身体的特徴についての論文を見つけた。まだ、絶対にあつているとは言えないモノだったが、その論文における研究においては9割の精度で当たつていた。その論文に自分を照らし合わせてみると、自身には全く当てはまらなかつた。今まで自分を無個性だと思つていたが、何かしらの個性を持つているのかもしれない。しかし、気付けない程度の個性など大したものではないだろう。それにこの論文が絶対にあつているとも言えない。なんとなく、この話をエマにも共有すると、エマも無個性の特徴に当てはまらないとのことだつた。

その時、ハロルドの頭の中で何かのピースがはまつた様な感覚があつた。やはり、エマはこことは違う世界を観測しているのではないから。もしかしたら、自分も何か観測できない何かに関係する個性なのではないかと。突飛で飛躍した考え方だと、論理的でないと、否定する自分もいたが、研究は時にそういう考えが必要だと検証した。

今まで考えもしなかつた、自分には何かしらの個性が存在していることを探すのは、正に暗中模索だつた。そして何を思ったのかハロルドは、来る日も来る日も黄昏の碑文を読み続けた。エマとは違うどうが、それこそ夢を見るほどに読み込んだ。

そして、彼はついに異世界への扉を開けた。

ハロルドの個性は、異世界への道を創ることだつた。そして、今まで自身の個性に気付けないのも当然だつた。その異世界の子細を知

らなければ、その道を開くことはできないのだから。ハロルドが自分の個性に気付くことができたのはエマが居ればこそだつた。同時に、これがエマが観測した世界の証明にもなつた。この喜びをエマに伝えようと早速連絡を取ろうとしたが、電話が繋がることはなかつた。一抹の不安を感じながらも夜が更けていたこともあり、その日は床に就いた。

翌日、ハロルドには信じられない一報が届くことになつた。エマが交通事故に遭い亡くなつたとのことだつた。ハロルドは悲嘆にくれた。ようやく彼女が焦がれた世界に繋がれたのにその後に彼女が居なくなつてしまつた。そして、彼はこの世界から姿を消した。

数年の月日が流れ、ハロルドは日本に居た。この時、ハロルドはある目的ができていた。エマとの子どもが欲しい。既に彼女がこの世にいない中でどうするか。彼女が焦がれた世界を基に新たな命を創ろう。自分という天才と聰明な彼女に相応しい個性を持つた子を。そのために再びこの世界で研究をしなければいけない。研究をするためには環境とお金が必要だ。理論は、異世界を放浪する過程で組み立て終えていた。後は、実践するだけ。
そして、彼は番匠谷淳と出会つた。

雄英体育祭まで2週間

敵連合が雄英高校を襲つた翌日。当の敵連合の頭目である死柄木弔は苛立ちを抑えられずにいた。

「どういうことだ！ オールマイトは健在のままじやないか!!」

新聞を投げ捨てて怒りをぶちまける。

『見通しが甘かつたね』

電話がAFOと繋がっていた。

『うむ。脳無も回収できなかつたようだしな。肝心のAIDAも除去されてしまつたようだ』

AFOにドクターと呼ばれている人物が、軽く文句を言う。

「そうだ。お前、あれはオールマイトでも絶対に倒せないと言つていたじやないか！」

弔が指差し叫んだ先のバークウンターに座つていたのは、オーヴアンだつた。

「その通り。絶対にオールマイトには倒せない。倒せるのはデータドレインを使える者だけ。つまり、その場にデータドレインが使える者が居たということだな」

「はあ？ お前、データドレインは世界でも限られたやつにしか使えないとも言つてただろ。それが、偶々そこに居たつていうのか？」

「そうでなければ、雄英高校は既にこの世にはないよ」

「……ちつ」

『あれらに関して僕も詳しいことは知らないよ。ドクターも知らな
いってことだし、君も教えてくれないしね』

『切り札を簡単に教えるほど俺は甘くないよ。互いに利用しあえる関係が、望ましいからね。教えてしまつたら、簡単に切り捨てられてし
まいそーだ』

『おや、まだ信用してくれないのかい？』

『俺は曲がりなりにもヒーローであるからね。最も、今はヴィランと
そう変わらないか』

『お前、結局、何がしたいんだよ』

「前にも言つた通り、黄昏の鍵さ」

「だから何なんだよ、それは！」

『黄昏の碑文』

オーヴアンは表情を変えなかつたが、明らかにAFOのその言葉に反応した。

『未完成の叙事詩なんだつてね。興味深かつたよ。何せ、何時ぞやの事件の犯人たちにそつくりなのが出てたからね。君の言う黄昏の鍵もちよつと書いてあつたよ。と言つても、未完成だからか、詳しいことは何も書いてなかつたけどね』

「さすがは……と、言つたところかな。でも、結局のところは黄昏の碑文も関係はない。俺が黄昏の碑文を気に入つてゐる。それだけの話さ」

『おつと……もう少し、君が慌てるところが見れると思つたんだけど、そう上手くはいかないみたいだね』

死柄木弔は完全に話題に置いて行かれていた。そのことにイラライラし、首をかきむしる。

それを察したのか、AFOは弔に語り掛けた。

『弔、学ぶんだ。この男を上手く利用できるくらいに成長しなさい。

今度こそ、君という恐怖を世に知らしめるんだ』

成長……G l o w U p か。

オーヴアンは内心で一人呟いた。

三崎は、臨時休校の日、パイに呼び出された。憑神に慣れるための訓練である。山奥にて微弱なAIDA反応を検知しており、それを倒していく。途中、登山客がAIDAに巻き込まれそうになり、それをパイが庇い感染するというハプニングもあつたが、三崎の憑神によつて事なきを得た。

そして、臨時休校を終えて学校が再開した雄英高校。

その日には、相澤は復帰していた。包帯をぐるぐるに巻かれミイラの様になっていたが。

「先生、無事だったのですね！」

「無事、言うんかなあ。アレ……」

「俺の安否はどうでもいい。何よりも戦いは終わってねえ」

戦いという言葉に以前のヴィランの恐怖が一瞬過るが。

「雄英体育祭が迫ってる！」

「クソ学校っぽいのきたあああ!!」

ヴィランに侵入されたという事実がありながら開催が決定されたのは、逆に開催することで危機管理体制が盤石であることを示すためであるらしい。

雄英体育祭は、ヒーローたちがスカウト目的で観に来るイベントである。それを中止するのは、年三回しかないチャンスを潰す行為であり、受け入れられないということだ。

昼休み、クラスメイト達は雄英体育祭の話題で盛り上がっていた。目立てば一気にプロヒーローへの道が開けてくるため、盛り上がるのが普通である。しかし、三崎にはあまり興味がなかつた。雄英体育祭後には、職場体験があり、その職場体験に行ける場所の中には指名をしてくれた事務所がある。三崎は、体育祭のリザルトの如何を問わず指名すると八咫から通達されていた。最も「指名してもおかしくない程度には活躍してもらわねば困る」とも言っていたが。詰まるところ、モチベーションも何もないのだ。三爪痕のことしか頭になく、将来ヒーローになりたいという想いすら薄い。クラスメイトとの温度差をはつきりと感じていた。

食堂に行く最中、麗日のヒーローを目指す理由を緑谷、飯田と共に聞いた。言ってしまえば、両親に楽をさせてやりたい。ということだつた。自身が徹頭徹尾自分のためであるのに対し、麗日は誰かのためにヒーローをやろうとしている。それが、少しばかり心にひつか

かていた。

「三崎君は、どうしてヒーローを目指そうと思ったの？」

「俺か？ 俺にはどうしてもこ……捕まえたいヴィランが居るだけだ。だから、最悪ヒーローにならなくてもいいんだ」

復讐心丸出しで、殺したいなんて言いそそうになってしまった。爆豪が常日頃から殺すとは口にしているが、誰もそれを本気で言っているとは思っていないだろう。三崎は内心で爆豪の口の悪さには引いていた。しかし、自身の本音に近しいものを感じ親近感の様なものを感じていた。

「おお！ 緑谷少年がいた！」

そこでオールマイトが来た。そのまま緑谷を連れて昼食に行つてしまつた。

何故、呼び出されたんだろう。と、二人は疑問を抱いていたようだが、三崎はなんとなくは知っていた。緑谷はオールマイトの秘密を知つていた。それこそ三崎より何か深い部分を知つてているのだろう。三崎はそこを探ろうとも思わなかつた。興味がなかつたからだ。

「ところで、三崎君。君が捕まえたいというヴィランの名を聞いても？」

「……三爪痕だ」

「三爪痕……聞いたことないね。飯田君は？」

「俺も聞いたことないな」

「三爪痕は、誰も姿を見たことがない。わかっていることは、犯行現場に三角形の傷痕を残すこと。被害者は行方不明になること。それだけだ」

三崎自身は会つていたが、余計なことを言つて話を拗らせせるのも面白ないので言わなかつた。

「もし、何か情報があつたら教えてくれ。ネットに載つてることは大体調べ尽くしたけど、新しい書き込みもあるかもしれないからな。できたら、他の奴にも伝えといてくれ」

麗日と飯田の二人は快く引き受けた。そして、数日後にはクラスメイト全体に三崎が三爪痕というヴィランを探しているという話が広

まつていた。

放課後、1—Aの教室前にたくさんの人だかりができていた。

「何事だあ!?」

「出れねーじゃん！ 何しに来たんだよ」

「敵情視察だろ。ザコ。ヴィランの襲撃を耐え抜いた連中だもんな。体育祭の前に見ときてえんだろ。意味ねエから、どけ。モブ共」

「知らない人の事とりあえずモブつて言うのやめなよ！」

爆豪の口の悪さは今に始まつたことじやない。三崎も正直同じようなことを思つてしまつていた。

「どんなもんかと見に来たがずいぶん偉そうだなあ」

人混みの中から紫色の髪をした男が前に出てきた。

「ヒーロー科に在籍する奴は皆こんななのかい？」

「ああ!？」

「こういうの見ちやうと幻滅するなあ。普通科とか他の科つてヒーロー科落ちたから入つたて奴、結構いるんだ。知つてた？」

ヒーローを志すものが多いのは現代社会でヒーローが多いことからもわかることだ。その人気が衰える様子は見えそうもない。

「体育祭のリザルトによつちや、ヒーロー科編入も検討してくれるんだつて。その逆もまた然りらしいよ」

ヒーロー科の実技試験は対口ボットであるために対人とは勝手が違う。体育祭の方がより複雑な状況への対応力が求められるはず。それ故にヒーロー科編入の話があるというのは、至極合理的な話だ。「敵情視察？ 少なくともおれは、調子に乗つてつと足元ゴツソリ掏つちやうぞつづー、宣戦布告をしに來たつもり」

その後、ヒーロー科B組からも文句が飛んできた。

爆豪は気にせず帰ろうと動く。

「待てコラ。どうしてくれんだ。おめーのせいでヘイト集まりまくつちまつてんじやねえか！」

「関係ねえよ……」

「はあ!？」

「上に上がりや関係ねえ」

爆豪らしい、シンプルな答えた。切島はその言葉で納得してしまつているし、常闇も理解を示した。上鳴は、ただ敵を増やしただけだと騒いでいた。

「別にいいんじやねえの」

「はあ!? 何がだよ!」

「雄英高校の校訓なんだろ。P u l s u l t r a つてやつがさ。それなら、自分で作つて超えるのもありだろ。超える壁が多けりや、その分強くなれる機会も増える」

困難を超えることこそ成長の早道。できれば、実戦が好ましいが、それはなかなか難しい。しかし、実戦でなかろうと自身の将来がかかつたものであれば必死さも増す。それが嫌惡する相手なら猶更だ。そういう意味で体育祭は良い機会だ。そう思えば、三崎もモチベーションが上がつてくるのを感じられた。

「でもよお。間違いなく面倒なことになるぜ」

「ヒーローになるだけなら別にここじやなくともよかつただろ。ここに来たのは、トップヒーローになるため。違うか? なら、あいつの言う通り上に上がることを目指すべきだ」

実はまるでトップヒーローになりたいと思つていらない三崎であつたが、爆豪のおかげで自身のモチベーションを見つけることができたので軽くフォローを入れることにした。

「なるほど……」

あの態度は爆豪のいつもの態度があるので、元々嫌われていたといふわけでもないのだが、爆豪の言動に少しばかりの理解が得られたようだ。

三崎は帰ろうと席から立ちあがると、人混みの中に見覚えのある男が居た。

「あいつは……!」

A I D Aと共にいた男だ。その時は見失つて、その後A I D Aに襲われかけたところをクーンこと香住智成に助けられた。走つて追いかけるが、見失つてしまつた。

「あいつ……雄英生だつたのか……？」

少なくともヒーロー科ではないはずだ。1年の階に居たために学年はおそらく同じ。

「一体何者なんだ？」

八咫なら何か知っているかもしないと、連絡を入れて、特徴や以前ロストグラウンドで見かけたことを伝えた。

『二ノ瀬薰だな。我々の監視対象の一人だ』

やはり八咫は知っていた。

「やっぱり、AIDA関係か？」

『AIDAもそうだが、彼は碑文使いだ』

「何？」

『接触を図つたことも何度かあるのだが、避けられていてね。雄英生ということもあるが、校長にも話をしたこともあるが、あまり登校もしておらず、会いに行つた日も登校していなかつた』

「ヒーロー科に入れなかつたから……か？」

『それはないな。確かにヒーロー科を受けてはいたが、実技試験では試験会場を歩き回つただけで何もしていない。当然ながら結果は0点で不合格だ』

「なんだ、それ？」

『私としても理由が知りたいところだよ。ああ、それと彼が体育祭に参加するようなら君には彼との対話を頼みたい』

『はあ？ なんで俺がそんなことをしなきゃなんねえんだ』

『君は我々の持つ情報が欲しいのだろう？ 協力しないのであれば、三爪痕に関する情報は教えられないな』

『……わかつたよ。やりやいいんだろ』

『よろしい。それではよろしく頼む』

ブツリ、と電話が切られる。

「面倒なことになりそうだな……」

体育祭とはまた別のところで何かがありそだとそんな予感がしていた。

おまけ

その日の夜、一通のメールが届いた。

「緑谷から？」

そのメールによると、ネットの掲示板に三爪痕の話題が出ているのだそうだ。あの2人から三爪痕の話を聞いて早速情報を送つてくれたようだ。

確かにそのネット掲示板には三爪痕の話題が上がつていた。とうより、それを載せた人物がプロジェクト『G・U』の長として三爪痕に話したいことがある。とのことだった。

G・U・の長。八咫が長となつていて「レイヴン」という組織は表向きの名でそれとは別に裏向きの「G・U・」という名がある。

八咫がこれを書いたのだとしたら一体何のつもりなのか。

指定された場所は、以前三崎が三爪痕と遭遇した聖堂であつた。時間もないのですがさあ聖堂に向かつた。

廃墟と化した聖堂に明かりなどはなく、月明りだけが光源となつてゐた。聖堂は天井が崩れ、月明かりが大量に入つてくるためそこまで視界は悪くなかった。

奥まで進むと台座の上に誰かが立つていた。

「ふつふつふつふ。まんまと罠にかかつたな、三爪痕！　ここであつたが百年目。神妙にお縄を頂戴しろ！」

「誰だ？」

「ふんっ！　悪党に名乗る名前などないわ！　たあっ!!」

高く飛び上がりその姿が月明かりに照らされる。金ぴかである。頭の先から足の先まで金ぴか。その鎧がもし金であるなら馬鹿みたいに高そうな上に重そうである。しかし、そいつはそんな鎧を付けているとは思えないほどの高さまでジャンプした。

そして、一回宙返りして着地する。

「鈍き俊足のドーベルマン、ぴろし3！　ただいま参上!!」

ポーズを決め、キランと、効果音まで口にした。実際、歯は白く手入れがされている様なのが若干苛立しかつた。

「……名乗ってるじゃん」

「……」

数秒の沈黙が訪れた。

「それとさ、俺、三爪痕じゃないから」

「どわーっはっはっは。いやあ、失敗失敗。てつきり貴殿が三爪痕かと思ったのだが」

「あんた、どうして奴を追っているんだ？」

「……ふむ。これは例え話として聞いてほしいのだが、ある建設会社に一人のデザイナーがいたと思いたまえ。その男は自分のデザインに絶対の自信を持つていた。建てられた建物で使われた自身のデザインを堪能していた。ところが、ある日男は信じられないものを目にする。自分の作成した超流麗凄艶究極デザインに醜い三角形の傷痕が刻み込まれていたのだ！ 何という冒涜！ 何という暴挙！ 復讐の鬼と化した彼は、その犯人を突き止めるべく掲示板を利用した巧みなトラップを用意したのだ！」

「……それって、例え話？」

「そうだ。例え話として聞いてくれと、そう言つている」

「三爪痕はあんたが相手できる奴じやねえ。危ねえから、ヒーローにまかせて追つかけるのはやめとけよ」

びろし3は、首を振つて否定する。

「問答無用！ 私はヤツを捕まえるまでは止まらないぞ！ 貴殿も三爪痕を探しているのか？」

「……まあな」

「ふむ……」

「なあ、他に傷痕がある場所があつたら教えてくれないか？」

「ふうむ……一見ドス黒く濁つてゐるが……その奥に正義の輝きを秘めているように見えないこともないその瞳……！ よかろう！ 良き目をした人よ！ 貴殿と私は志を共にする者ようだ！」

「……は？」

「三爪痕の探索の同志と認め、この命果てるまで……共に闘うこと

誓おう！」

「……はあ？」

「ぴろし3は、連絡先を押し付けてきた。

「まあ、いいや。で、プロジェクト『G・U』の長ってどゆこと？」

「ん？ 貴殿も私のサークルに入りたいのか？ だが、絵が上手いことを条件だぞ。何しろ『グラフィック・うまい』で『G・U』だからな」

「八咫つてヤツ、知ってるか？」

「誰だね、それは？」

「いや、もういいや」

「そうか。では、私はまた策を練るとしよう」

そして、ぴろし3がまた不可解なポーズを取る。

「旅路の果てまでも！ 頭上に星々の輝きのあらんことを！ ジュ
ぱっち！」

そして、飛び上がる様な動作をするがそのまま飛んで行く様なことはなく走り去つていった。

「なんか……変なモンを見ちまつた……帰つて寝よ」

雄英体育祭まで1週間

休日のある朝の早朝。三崎の携帯に電話がかかってきた。三崎は寝ぼけた目をこすりながら通話ボタンを押す。

「もしもし」

『あ、あの、三崎亮さんの携帯でよろしかつたでしようか?!』

「ん? 日下か?」

『そそそ、そうです。あ、あの、そのお……えーっと』

「……早くしてくれ。眠いんだよ』

欠伸をしつつ、言葉を返す。

『ちよつ、ちよつと待つてください。その心の準備が……』
何か言い淀んでいるが、三崎は寝ぼけた頭で何も頭が回っていない。

「切るぞ」

『す、すみません! その、今日、一緒に特訓しませんか!』

「特訓? 僕とお前、二人でか?』

『そ、そうです!』

「いいぞ』

『ほ、本当ですか!? それじゃ、メールで場所と時間を伝えますね!』

「ああ』

電話が切られて、三崎は再び布団にもぐる。

特訓か……あいつと二人で……

「はあ!』

一気に目が覚めた。

なんで俺となんだ……B組の誰かとやればいいのにわざわざ自分を選ぶ理由がわからなかつた。同じ碑文使いという縁があるとはいえ、それ以外何かを共有しているわけでもない。

日下千草は七尾志乃に非常によく似ている。他人とは思えないほどに。それが、複雑な気分にさせる。日下を見ると志乃との記憶を呼び起こさせ幸せな気分になるのと同時にそれを奪つた三爪痕への憎悪も増す。そして、日下と志乃の違いが違和感をもたらし不快な気分

になる。ただの別人であるにも関わらずそういう感情を抱いてしまう自分にも嫌悪感を抱いてしまう。

しかし、寝ぼけていたとはいえ約束してしまった。約束を破ることは気が引ける。

「仕方ねえ……か」

再び携帯が震え、メールの着信を知らせた。場所と日時を確認し、動きやすい服装に着替える。そして、待ち合わせ場所に向かつた。待ち合わせ場所であつた駅には既に日下が居た。

「よう」

「おはよう」ぎります。三崎さん」

「お前、その恰好……」

フリルがついた女の子らしい服装であつた。確かにその服装は似合つていると言えた。

「私……何か変ですか？」

「別に変じやねえよ。ただお前、それで特訓するのか？」

「ちゃんと着替え、持つてきますよ」

「そりやそうか」

今のが恰好で動き回られるのは色々と困る。フリフリの衣装にスカートでは、きっと目のやり場に困る。汗で濡れれば……それ以上は考えないでおこう。

日下に連れられて、山にやつてきた。ハイキングコースである。

「……」

「三崎さん？ どうしました？」

「ホントに特訓しに来たんだよな？」

「そうですよ。ほら、行きましょう！」

山道をただ歩く。日下はとても機嫌な様子である。

「今日はとてもいい天気ですね。ピクニック日和です！」

「おい」

「あはは。 そうですよね。 今日の目的は特訓でした」

「いっ、 特訓する気ゼロだ……」

「一体、 日下は何を思つてこんなことをしているのか。

「……、 とつても景色がいいんです。 人も少なくて、 私のおススメス
ポツトなんですよ」

「へえ……」

「あの……退屈ですか？」

「ん？ まあ、 そんなことはねえよ」

わざわざ仲を悪くする様なことを言う必要はない。 だが、 正直な
話、 もうすでに帰りたくはなつていた。 これなら一人で筋トレでもし
てた方が有意義だ。

ついに山頂である。 別段、 高い山ではない上に、 道も整えられてい
たために疲れるような道ではなかつた。 これでは山というよりかは
丘だ。 確かに家族連れが来る分には悪くない場所かもしれない。 し
かし、 特訓に来る場所としてはぬる過ぎた。

「……でお昼にしましよう。 私、 お弁当持つて来たんですよ！ 一緒に
食べましょー！」

「はあ」

思わずため息をついてしまつた。 主目的からどんどん離れていく
ことに単純にイラついていた。

「三崎さん？」

「ああ、 ありがとう。 もらうよ」

日下はブルーシートを広げ、 弁当箱を並べる。

彩の良い手作り弁当だった。 おそらくは、 気合を入れて作つたこと
がうかがえる。

「どうぞ、お茶です」

「ああ」

水筒から紙コップにお茶を入れて三崎に渡す日下。三崎はそれを受け取りただ見つめていた。

「三崎さんはどうしてヒーローになろうと思つたんですか？」

「……別になんでもいいだろ」

「私はですね。榊さんっていうプロヒーローに憧れてヒーローになろうって思つたんです」

日下は、榊について色々語つた。月の樹という組織に属していること。平和を願う立派な人であること。その志に感銘を受けたこと。三崎は興味がなかつたので話半分に聞き流していたが。

「私、思うんです。ヒーローって、ヴィランを倒すことばかり注目されがちだけど、人を助けることこそが本分だつて」

「ヴィランを倒すことだつて、人助けだろ」

「でも、ヴィランだって人です。暴力を暴力で抑えつけたつて、同じことの繰り返しにしかならないと思うんです」

「それは違うだろ。何せオールマイツっていう実例が居る。No.1ヒーロー様の圧倒的な力が犯罪率を低下させているっていう実例がな」

「そのオールマイツの力を超えるヴィランが現れたら、どうなるんでしょう」

「それは……」

もし、オールマイツを超えるヴィランが現れたのなら社会は混乱することだろう。誰でも簡単に想像がつくことだ。誰もそれを考えないのはそれほどまでにオールマイツは多くの人々に信頼されているからだ。平和の象徴と呼ばれるほどであることがからもそれがわかる。「私、争うことって嫌いです。レスキュー・ポイントのこともあるって、なんとか雄英高校に受かることができましたけど、私ってどんな小さくて勝負ごとに勝てたことがないんですよね。だから、負けた時のつらさはわかるんですね」

「体育祭はそれでどうすんだよ」

「だから、迷つているんですよ。私はヒーローに強さは必要ないと思つ

ている。だけど、世の中はそうは思っていない。強さのないヒーローなんて誰も必要としてくれない」

強くなければ守れないのだから当然だ。ヴィランという脅威を打ち倒す強さがヒーローには必須だ。

「当たり前だろ。強くなれりや、守れないんだから」

「でも、傷つきます。私も闘っている相手もその人を想う見知らぬ誰かも」

「なら、お前はどうするんだ？」

「それは……まだ、どうしたらしいのかわかりません。でも、強さにばかり気を取られたら助けるべき人の声も聞き逃してしまいそうで……ちょっと立ち止まって綺麗な景色に心を洗われたり、そういうことも大事なことだって思うんです」

「くつアハハ……！ もう、無理。限界」

三崎の中で我慢ができなくなつた。志乃と同じ顔で……

「バツカジやねえの、お前。ヒーローに強さがなくて務まるかよ！」

三崎は日下に詰め寄つた。

「お前は、ヴィランを気遣つて倒せなかつたことを言い訳にそのヴィランによつて増える犠牲に目をつぶるのか!? ヴィランを気遣う必要も余裕もヒーローにあるもんか！」

三崎の豹変ぶりに日下は怯えた。

「そのヴィランだつて自分の欲望を満たそうとしているただの外道なんだよ!! そのヴィランを叩き潰すために力を求めて何が悪い！ 答えろよ！ どこが悪いか言つてみろ！」

「そんな……

「……帰れ」

「え？」

「まぎらわしいんだよ、お前は！ 二度と俺の前に姿を見せるな!!」

日下は涙を流しながら走り去つていった。

三崎は、日下が見えなくなつたところで独り呟く。

「くそつ……志乃の顔で『立ち止まれ』なんて言うなよ……」

三崎はその場で立ち尽くした。

雄英体育祭

雄英体育祭まであと一日。最後の調整をと思つていた三崎だつたが、両親が趣味でやつてゐる花屋。用事があるとかで店番を任せてしまつっていた。

なんで俺がこんなことをするの？

そう内心でぼやきながら意外と眞面目に仕事をする三崎。

「あのう……」

「いらっしゃいませえええっ！」

大きな声で笑顔で客に応える。が、客が見えず、すぐ下を見ると子どもが立つていた。

金色のショートカットで中性的な少年だつた。格好もユニセックスな服装なため、どちらかと性別を聞かれたら迷うかもしれない。「あのう……ぼく、ほしいものがあつて……」

「おう、どれだよ」

「シロタエギクです。ありますか？」

「ちよつと待つてろ……鉢植えに小さいのが一つあるな。500円だな」

少年は小学生が良く使つていそうなマジックテープの財布を開いて、止まつていた。

「どうしたんだ？ 買うのか？ 買わねえのか？」

「あ……おかね……たりない」

「足りない？ それじゃあ、売れねえよ。こつちも店番任せられてるんでね。きつちり商売しねえと。欲しいもんがあるならちゃんと金を貯めてきな」

「ためてたんだけど……なくなつちゃつたみたい……」

「なくなつたつて……自分の金なら使い道ぐらい覚えてるだろ」

「わかんないよ。きのうまで朔のばんだつたもの」

「朔のばん？」

「朔はおねえちゃんだよ。このおさいふ、きのうまで朔がつかつてた」

「要するにその財布を姉弟二人で共有しているわけか？」

「うん」

「それでお前が貯めてた金をねえちゃんが使いこんじまつたと。ひ
でえ、姉ちやんだな」

茶化した風に言う三崎。財布の共有がどうして行われているのか
甚だ疑問だが、あえてつっこむ必要もない。それぞれ家庭の事情とい
うやつもあるのだろう。

「……ううん、いいの。どうせ、朔のたんじょうびにプレゼントをかう
つもりだつたから」

「誕生日?」

「ふたごだから……ぼくのたんじょうびでもあるんだけど……」「
誕生日か……」

特別何か誕生日に思い入れがあるわけでもないが、子どもが誰かの
ために何かをしようとしていることに水を差すのは気が引けた。そ
んなに高い物でもないし……

「仕方なねえな。まけてやるよ」

「ほんとにいいの!」

「ああ。姉ちやんによろしくくな」

「うん! ありがとう!」

少年は花開いた様な笑顔を浮かべた。

ビニールポットに移し替えられた、シロタエギクを手渡す。シロタ
エギクはその名の通り菊に似た形の白い茎と葉があり、小さな黄色い
花を咲かせる。花言葉は、穏やか、あなたを支える。

「ぼくは伊織っていうんだ。たりないぶん、きつとかえすからね」

「おう。金のことは気にすんな」

「おにいちやん。ほんとにありがとう!」

「気を付けて帰れよ」

伊織は小走りで帰つていき、見えなくなりそうなところで三崎に手
を振つていた。三崎は小さく手を振り返した。

そして、雄英体育祭当日。

それぞれが控室で準備を整えようとしている中、三崎は控室のある建物に入る前に呼び止められていた。それも7人の女子に。

「なんだ、お前ら？」

「私はヒーロー科一年B組の拳藤一佳。あなたが三崎亮？」

その中を代表してなのか、オレンジ色の髪をサイドテールにした女子が話しかけてきた。

1年B組ということは、他の女子たちもそういうことだろう。

「そうだけど……」

「よくも千草を泣かせたね」

「はあ？」

誰かを泣かせた記憶なんて……と思ったが、思い当たる節は当然ながらあった。普段、日下と呼んでいたために下の名前を意識したことがなかつた。

「ちつ、てめえらにや関係ねえだろ」

「大アリよ！ 私たちの仲間を泣かせたんだから。ここに来たのはあんたに宣戦布告するためよ」

B組女子達は怒り心頭と言つた感じだ。一部、表情が見えないものもいるが、共通の目的でここに來たのだろう。

「ハッ！ 面白れえ！ てめえらまとめて返り討ちにしてやるよ」

「言つたわね。必ず報いを受けさせてやるから」

それだけ残し、B組の面々は去つて行つた。

B組の控室へと向かう女子たち。

「私、あの方がそんなんに悪い人には思えないのですが」

と、茨の様な髪をした少女。塩崎茨は言う。

実際、詳しい話を日下から聞いたわけではなかつた。ただ、B組の中で姉後肌である拳藤を頼つて日下が相談し、それに乗つたはいい

が、うまいアドバイスが思い浮かばず、他のB組の面々に聞いた拳藤によつて、B組女子全員に日下がA組の三崎という人物が気になつていることが伝わつてしまつたのである。それによつてアドバイスした拳藤であつたが、後日、日下が泣きながらに三崎を怒らせてしまつたと相談したことから、この事態に発展した。

「あの口の悪さじや、そつは思えないけど」

「ね」

それに反論するのは、ウェーブのかかつた縁がかかつた黒髪の少女、取蔭切奈。そして、それに同意する、「ん」とか「ね」とかしか喋らない黒髪の少女、小大唯。

「爆豪クン？」という人、口ワルイ、ヒアしたヨ」

角が生えた片言で喋る少女、角取ポニーが、まだまだ日本語がわからないので聞く。

「あれは口が悪いといつより、怖い」

と、白髪の少女でいつも幽霊のようなポーズを取つてゐる柳レイ子。

「とてもヒーロー志望とは思えないよねー」

長い髪で目が隠れているキノコを思わせる少女、小森希乃子。

段々と話がずれていく。

「塩崎さん。それで、どうして三崎は悪い人に見えないの？」

「いくつかありますが、一番大きいのは以前、街でお見掛けしたんです」

「何を？」

「その三崎さんが、何故か店番をしていたらしくそこに来た子どもが、お金が足りなくて困つていたんです。最初こそ、冷たくしていた様なんですが少し話をした後に、結局売つてあげたみたいで。その子、笑顔でお礼を言つていたんですよ」

B組の面々は意外だ、と共に通した思いを抱いていた。

「それにヒーローを志す方ですし、日下さんが好意を寄せる方でもありますから」

控室の扉が勢いよく開かれた。

「べ、別に三崎さんとはそんなのじゃありませんから！」

日下であつた。

「あれ？ 聞こえてた？」

「丸聞こえですよ!! 確かに、三崎さんはぶつきらぼうな様で意外と優しいところがあるというか……ちよつと、みなさんニヤニヤしないでください!!」

女子達は、日下をからかつて遊んでいたが、B組男子は、日下から好意を向けられていると言う三崎の話を聞いて、勝手にヘイトを高ぶらせていた。どこかのブドウほどではないが、モテない男の妬みである。B組の打倒A組に変わりはないが、爆豪と違い、本人と全く関係ないところでヘイトを買う三崎であつた。

障害物競走

1—Aの控室。

「おお、やつと戻つて来たか！ 三崎君！ もうそろそろ入場だぞ！」
「何してたん？」

「ああ、ちょっとな」

言葉を濁して、はぐらかす。麗日はそこまで気にしていたわけではなかつたらしく、追及してくることはなかつた。

そして、入場間近のこの時に轟が緑谷に宣戦布告とばかりにお前には勝つと宣言する。緑谷はそれに対し、自分も勝ちに行くと宣言した。轟が何故オールマイトを気にして、緑谷にその様な事を言つたのかは、三崎にとつてはどうでもいいことであつたが、少しばかりの苛立ちは感じた。自身の力を未だにクラスメイトに見せたことがないせいだろうが、クラスメイトの中での注目度は低い。実技を見学していた限りでは、実力で轟と爆豪が頭一つ抜けている。だが、三崎はそれに負けているとは思っていない。憑神に覚醒した今の自分なら何者が相手でも絶対に負けることはない。そういう自信があつた。憑神は、AIDAなどの異常な存在のみに使用するようになると八咫に止められてはいるが、三崎は使いたいときに使いたいように使うと決めていた。相手になめられっぱなしでいるぐらいなら憑神の一撃で黙らせる腹積もりだ。

入場の時を迎え、プレゼントマイクが派手にナレーションする。A組は先日のヴィラン襲撃を退けた件からも注目度抜群。例年であれば3年のステージが最も盛り上がるが、今年に限つて言えば恐らく1年ステージの方が盛り上がりを見せていく。

クラスごとに整列し、主審であるミッドナイトが選手宣誓をする生徒、爆豪を呼ぶ。

爆豪はポケットに手を突っ込んだまま壇上に上がる。
「せんせー、俺が一位になる」

他の生徒からのブーリング。あんなことを言えば当たり前である。

「せめてはねの良い踏み台になつてくれ」

三崎は、この前的一件からも見てなんとなくわかつた。態度が悪いのはいつも通りだが、ヘイトを集めて敵を増やし、自身を追い込み、強さを求めているが故の行動だ。三崎は不満を爆豪に投げ込む生徒たちばかりの中で、独りニヤリと笑つた。

「それじゃあ、早速第一種目行きましょう」

競技場にある大きな電光掲示板にルーレットの様に表示される。

「いわゆる予選よ。毎年ここで多くの者が涙を飲むわ！　さて運命の第一種目！　今年は……」

そして、電光掲示板に文字が止まる。

「コレ！」

障害物競走。

「計11クラスでの総当たりレースよ！　コースはこのスタジアムの外周約4キロ！」

ルールはコースさえ守つていれば何をしても構わない。

ヒーローを目指す者たちの祭典の上、全国中継されているためにヴィランの様なことをする者はそうはないだろうが、そのルールでいいのだろうか。

「きあきあ位置につきまくりなさい」

すぐにスタートシグナルが動き出す。そして、全てのシグナルの明かりが消えた。

「スタート！」

一気にスタートゲートに人が駆け込むが、狭いために一気に通り抜けることができない。それを見抜いたものたちはすぐに前へと抜けた。一番前へと抜けた轟は、凍結を使用しながら進むことで妨害に動いた。

A組は凍結に引っかかることなく、全員が突破した。事前に知識が

あつたことが大きかつた。他の実力者たちも避けることができいた。

三崎は、体力温存と情報収集を兼ねて後ろの集団に付くことになった。

『さあ、いきなり障害物だ！ まずは手始め……第一関門ロボ・インフェルノ!!』

プレゼントマイクの実況。それが知らせたのはヒーロー科の入試でも使われた仮想ヴィランだつた。

轟はその仮想ヴィランを一瞬で氷漬けにして抜けた。しかも、後続の妨害のために不安定な状態で凍させていた。

『――A 轟！ 攻略と妨害を一度に！ こいつあ、シヴィイー!! すぐえな！ つて、おい！ あいつ……あいつら誰だ!? 轟に並んでんぞ!?

一抜けかと思われた轟の横に並び、追い越している者が二人居た。

「なかなかやるじやん。色男」

そこに居たのは、赤髪のショートカットの女子だった。

「……」

さらに横を無言ですり抜けたのは一ノ瀬薰であつた。

『普通科の一ノ瀬薰と倉本智香だな』

相澤は、手元の資料に目を落としながら話す。

『うえ？ 何で知つてんの!?』

『別に知つているわけじやない。ただ、普通科の問題児つてことで、何度か聞き覚えがあるだけだ』

『問題児つて、何やつたんだ?』

『一ノ瀬が不登校。倉本が喧嘩だな』

『いや、なんで容姿も知つてんだよ』

『ここにあるからな、資料が……』

『いや、も――OK!! その調子で解説頼むぜ!!』

後続もどんどん第一関門を突破していく。しかし、三崎は、立ち止まつていた。日下が少しばかり気になつっていた。轟の凍結は他のB

組の助力で何とか抜け出したようだが、ロボの前でも縮まつて動けなくなっていた。さすがに完全に戦意を失っている仲間までは助け舟を出せないB組。仮想ヴィランの質量は、人が死にかねないかと思われるほど巨大なものだ。その攻撃が、日下に向かっていた。

「ちつ！」

巨大なロボの拳が日下に当たる前に、三崎が救い出していた。

『カツクイイイ!! A組三崎!! B組の日下を助けたあ！蹴落としのサバイバル上等のこの場で人助けなんてやるう!!』

『勝負の最中の今じや、そんなに褒められたことではないがな。あまり三崎らしくない感じもするが』

「み、三崎さん!!」

「こんなところで躊躇ぐらいならヒーローなんてやめちまえ!!」「……」

日下は三崎の叱責に涙目になつてしまふ。その様子に三崎は戸惑つてしまつた。以前、言つたことの手前合わせる顔もない。

「……お前にも、これぐらい乗り越える力ぐらいあんだけ。俺は先に行く

三崎は変身の個性を使って、姿を人形の様な姿へ変える。憑神ではない方の変身だ。普通に走つていてはもう先頭に追い付くのは無理だ。

「あの！ 三崎さん！」

「なんだ？」

「ごめんなさい……」

それは助けてもらつたことに対してか、先日のことに関してかはわからなかつた。だが、どちらにしても

「謝んな。お前の正しさはお前が証明するしかない」

自分は正しくはないことを承知で、復讐を為そうとしている。きっとお題目だけなら日下の方がずっと立派だ。それが本当に良いことかは別にして、理想としては自分の目的よりはずつとマシだ。それでも復讐を止めるつもりはないが。

しかし、それなら何故自分は日下を助けたのか。志乃と容姿が重な

るから……きっと、それだけだ。だが、それでは自分は志乃の容姿しか見てこなかつたのだろうか、と嫌な気持ちに苛まれる。

「クソツ」

『オイオイ、第一関門チヨロイつてよ！ んじや、第二はどうさ？！ 落ちればアウト！ それが嫌なら這いすりな！ ザ・フォール！』
かなり深い溝だった。岩場には、綱だけがかけられている。だが、空中を飛べる者には関係がない。

轟がトップに変わりないが、爆豪がそれに追いつこうとしていた。

三崎は、変身の個性によつて反重力の様な動きで音もなく移動する。その速度で第二関門をものともせずに、抜ける。

『空飛べんのはずりいな！』

『別にずるではないだろ』

『というか、あいつ誰？』

『お前、さつきまで見てただろ』

三崎亮は、変身の個性と武器を取り出す個性の二つを持つ。かなり変わつた個性だ。

普通科の二人はここでペースダウンしていた。二人ともその気になれば、一気に駆け抜けることもできそうな気もしたが、三崎は構わずに抜く。少なくとも一ノ瀬は碑文使いだと聞いてるので、自身と似たような変身の個性を持つていることは間違いない。そして、その変身の個性を使う碑文使い達は今のところ全員浮遊して移動する。一ノ瀬が例外の可能性も無きにしも非ずだが、恐らく全員で8名のはずの碑文使いのうち4名に共通する能力なので違うことは考えづらい。

『……そして、早くも最終関門！ かくしてその実態は——一面地雷原！ 怒りのアフガンだ！ 地雷の位置はよく見りやわかる仕様になつてんぞ！ 目と脚、酷使しろ！』

『ちなみに地雷、威力は大したことねえが音と見た目は派手だから、失禁必至だぜ！』

『人によるだろ』

実況が何か下品なことを言っているが、全国放送でそんなこと言つていいのか。

地雷原は、先頭に居るほど地雷を気にしなければならない。轟と言えど、あまり慣れる様なものではないために減速を強いられていた。

「俺は関係ねー!!」

爆豪は、爆発によつて空を飛べるために足に地を付けることがない。よつて地雷を気にする必要がまるでない。

「奇遇だな。俺も関係ないぜ」

そして、巨大な影。その巨体を飛ばす、三崎も先頭に追い付いていた。

「てめえ、誰だ!?」

「……まあ、誰にも見せたことはなかつたからな。先に行かせてもらうぜ」

「待てや！ コラ!!」

爆豪が三崎の腕を掴む。しかし、変身した三崎の膂力の前には意味をなさなかつた。簡単に振り払われる。それでも爆豪がそのまま引きはがされることはなかつた。轟も同様である。水柱を伸ばして三崎の動きを止めに入るが、それに捕まることもなかつた。

B O O O O O M !!

『後方で大爆発!! 何だ、あの威力!? 偶然か、故意か——A組緑谷爆風で猛追——!!』

プレゼントマイクの言葉通り、ロボの残骸を利用して爆風をその身上に受けて、先頭まで飛んできた。

『つーか！ 抜いたああ!!』

緑谷は三崎の頭上をも超えて前に出ていた。

『デク！ 俺の前を行くんじやねえ!!』

爆豪は、緑谷を先に行かせないために自身の個性の爆発で加速する。

「後ろを気にしてる場合じゃねえ……！」

轟は、自身の個性で地面を凍らせて地雷を気にせず走るための道を造った。

「面白れえ!!」

三崎はただ加速し、ゴールを目指す。

緑谷は爆発の勢いがなくなり減速し、地面に激突しそうになつたがロボの残骸を地面に叩きつけて、地雷を爆発させた。その爆発によつて、轟、爆豪、三崎の動きは一瞬止めされ、緑谷はその爆発によつて更に前へと進んだ。

そして、最初にゴールテープを切つたのは――

『さあさあ、序盤の展開から誰が予想できた!? 今一番にスタジアムへ還つてきたその男――緑谷出久の存在を!!』

「……一位は逃したか。まあ、ガチ戦闘じゃねえからいいか」

三崎は呟く。悔しさがないと言えば嘘になるが、予選さえ勝ち進めばこの場は良い。重要なのは、経験を積むこと。雄英体育祭は、例年最後はタイマンだ。

「予選通過は上位44名! そして次からいよいよ本選よ! ここからは取材陣も白熱してくるよ! 気張りなさい!」

三崎亮、第一種目――第2位。

騎馬戦

「さーて、第二種目よ！ 私はもう知っているけど、何かしら!? 言つてるそばからコレよ！」

電光掲示板に表示された種目は騎馬戦。

ルールは、2～4人のチームで騎馬を作ること。障害物競走の結果によつてポイントが割り振られ、その合計のポイントがそのチームの持ち点となる。

ポイントは下から5ずつ増える。そして、一位に与えられるポイントは1000万。

その情報が与えられた途端に緑谷へと注目が集まる。

1000万、もはやその数字に意味はない。持つていれば勝ちが確定する。そういう一発逆転を狙える様な要素だ。

チーム決めも競技時間も制限時間は15分。

三崎にとつては予選さえ突破できればそれでいい。わざわざ目立つ必要もない。となると、注目度が低い人間と組んだ方が漁夫の利を狙いやすい。影を潜めて終盤に奪い取る。それが理想的な形になるだろうか。それぞれの配点や誰がどれくらいの得点を持っているかでも状況は変わつてくるが、それが一番労力が少ない且つ勝ちやすい方策であると考えた。

「ねえ」

「ああ？」

誰かに話しかけられ、返事をしたら途端に意識が低下した。

なんだ……!? 一体、何が……？ ダメだ……意識が……

このまま気絶するかと思いきや、意識が覚醒した。ふと、脳裏にスケイスの影が見えた様な気がしたが、あれが起こしたのだろうか。

「てめえ、俺に何しやがつた」

話しかけてきた男は、以前A組の教室にやつてきた普通科の男だつ

た。その表情には驚きが見て取れる。

「……洗脳か？」

理由はわからないが、そういう個性だと思った。そう直感できたのは、自身の内側に居るスケイスが教えたとでも言うのだろうか。自身の力なのにどことなく気味の悪さを感じてしまった。

「……そうだよ。あんたの個性は障害物競走の時に見たよ。ヒーロー向きの良い個性だよな」

驚きは隠せていないが、極めて平静を装つた風に会話をする。三崎は、結果的には洗脳されなかつたので特に氣にすることもなかつた。「なんだ、羨ましいのか？　ま、俺にはどうでもいい話だ。それで、俺と組みたいのか？」

「……いいのか？　俺はお前を洗脳しようとしたんだぞ」

「結果的にはならなかつたし、お前の個性はこの予選を勝つのには便利そうだ。時間が少なくなつたところで、洗脳で動きを止めて奪えば、トップは無理でも予選通過ぐらいなら余裕だろ」

「……よし、組もう。後の二人は既に組んでるから。それに洗脳も済ませてある」

「へえ……なかなか手が早いな。つて、こいつは?!」

普通科の男——心操の後ろには普通科の二人。一ノ瀬と倉本が居た。

倉本は間違いなく心操の個性によつて洗脳されているだろうが、一ノ瀬は本当に洗脳されているのだろうか。自身と同じく碑文使いである一ノ瀬が洗脳にかかっているのは考えづらかつた。

「なんだ？　知り合いか？」

「いや、知り合いつて程でもねえけど……」

「個性は知らないけど、この二人、普通科とは思えないほど身体能力が高いんだよ」

「ああ。俺もそれは見てた」

障害物競走を途中までとはいえ、首位付近を走つていた。何故、順位が下がつてしまつたのかはわからないがこの二人のスペックの高さはヒーロー科に引けを取らない。

「名乗つてなかつたな。俺は心操人使」

「三崎亮だ。短い間だが、よろしく頼むぜ」

結論から言うと、事は三崎の目論見通りに進んだ。

騎手に心操を置き、序盤には早々にハチマキを取られてしまった。わざとだが。

ほとんどの騎馬は緑谷を狙つて動き、緑谷はサポート科の装備と麗日の個性によつて飛んで逃げ、更には常闇の牽制によつて上手くことを運んでいた。爆豪も当然ながら緑谷を狙つていたが、逆にB組の物間に取られていた。

三崎はこの目立つグループは、常に取り合いの状況に立たされているのでさり気なく取るというのは難しかつた。出来るだけポイントが高い且つ自分たちと同じように圈内に入れそだつたら逃げに入ろうとしている騎馬から取るのがベスト。得点を持つていのいのは状況を俯瞰的に見るという点に置いても悪くない選択だつた。

終盤、残り時間も僅かとなつたところで予選突破圏内に居るグループ及び競つてゐるグループ。すなわち、緑谷、轟、爆豪、物間、そして鉄哲この5グループ内でほぼ決まりだ。そして、現在競つてゐる状況には鉄哲だつた。正確には激しい競り合いではないといふこと。4グループは激しい競り合い状態で、この中に突つ込むのは危険だつた。そして、鉄哲チームに声をかけられる状況にあつた。

心操の「洗脳」は声をかけて相手が返事をすれば成立する。心操の個性を知らずして、これを避けるのはほぼ不可能だ。相当に無口だつたり、口を効けないなどの特殊な場合を除けばほぼ100%上手いく。洗脳にかかつてゐる間の記憶はなく、衝撃で洗脳は解ける。

予定通りに洗脳にかけることに成功し、苦も無く鉄哲の持つハチマキを全て奪取。

競技は終了となつた。

結果は1位轟チーム、2位爆豪チーム、3位心操チーム、4位緑谷チーム。以上の4チームが次の本選に進出することとなつた。

一時間の昼休憩となり、各々が昼食を取るべく移動する。倉本が何

が起きたのかもわからず、混乱していたが、一ノ瀬は早々に何処かへと行つた。

一ノ瀬とは早々に話をつけたかつたが、心操に一言も挨拶もなしに居なくなるのも悪いので一言。

「助かつたぜ」

「お互い様だ。……あんたとは当たりたくないもんだ」

「ゾ自慢のその個性も俺には効かねえみたいだからな」

「そうだな……でも、どちらにしろ次でバレるんだ。初見殺しの個性じや、勝ちあがるのは難しい」

雄英体育祭は例年最後は一対一のトーナメント戦になる。

「工夫だけでそれを何とかするのも厳しいな。特殊な状況にこそ強いだろうが、タイマンにはまるで向かねえ」

「ああ……それでも、俺はこれでヒーローに……！」

「まあ、初戦で俺に当たらない様に祈つておけ。初戦さえ乗り切れば、誰かしらはお前の個性の良さに気付くだろ」

「……あんたは俺の個性をヴィラン向きとか思わないのか？」

「はあ？ お前以外の大概の個性だつて悪用もできんだろ。ヒーロー向きもヴィラン向きもあるかよ。結局はどう使うかだ」

心操は少しだけ面食らつた様な表情をした後、僅かに微笑む。

「また会場でな」

「ああ」

思惑

昼休憩、エンデヴァーとオールマイトが10年ぶりの再会をしているところ。1人の少年の様な男がそこに蜂合わせた。

「あつ！ オールマイトだ！ それに、エンデヴァーも！」

「君は……確か、櫻……？」

二本の角を生やした少年の様な姿をした男。姿だけではなく振る舞いも子ども染みているがヒーローである。それも10位に入っているヒーローであった。

一切のヒーロー活動をしていないのにも関わらず10位という異様に高い順位に位置する特殊なヒーローである。

「はい、そうです！ あなたのファンですよ！」

「はつはつはつは！ それは嬉しいね！」

「ふん。話は済んだだろ。俺は行くぞ」

「あつ……！ エンデヴァーさん、行っちゃうんですか？」

「便所に行こうとしていたところなんだよ！」

「……それはごめんなさい」

「ふんっ」

エンデヴァーはそのまま行ってしまった。

「まあ、あまり人に聞かれたくない話をするつもりだったの丁度いいですけどね」

櫻は、小声で呟く。オールマイトにははつきりと聞こえていたが、エンデヴァーには聞こえない程度だつただろう。

「それで、何か用かな櫻」

「あなたの個性の話ですよ」

「！ げほっ、げほっ。すまないね。ちょっとむせちゃって」

オールマイトは個性に関する話は、誤魔化してきたが嘘ははつきり言つて苦手である。マスコミに対しても、白を切り続けることができたが、相手が恐らくは確実な証拠を掴みに来ている場合、オールマイトにはそれを誤魔化しきるのはなかなか難しい。

「隠す必要はありませんよ。あなたの残り時間が少ないととも承知済みです」

「……何が言いたいんだい？」

「僕の手術を受けませんか？」

「しゅ、手術？」

櫻がその様なことをすることは聞いたことがなかつた。そもそも櫻は普段ヒーロー活動をしておらず、自身の擁立した月の樹と呼ばれるボランティア組織を運営しているという話しか聞かない。

「はい。手術というより改造ですけどね。僕、治療はできないので」「か、改造う!？」

「あ、心配しなくても大丈夫ですよ。別にサイボーグ化したりとか、非人間になつたりとか、そういうことになつたりはしないので」

それは裏を返せば、そういうことが出来るということだろうか。

「以前、八咫さんから個性の結晶をもらつたはずです」

「なんで、君がそのことを!？」

「ま、その辺は気にしないでください。それを使えば、あなたの傷を治すことこそ叶いませんが、活動の限界時間は伸びるはずです」

それは願つてもないことだつた。緑谷に次の平和の象徴になるよう託しているとはいえ、まだヒーローの卵だ。自分の支えは世間にとつても緑谷にとつてもまだ必要になる。

「……色々と聞きたいことはあるけど、本当にそんなことができるならお願いしたい」

「はい。いいですよ。ただし、これは飽くまでもあなたの活動時間を延ばすだけです。体力や内臓機能が回復するわけではありません。もしかするとあなたの寿命を縮ませかねないです」

「……それは失敗することもあるということかい?」

オールマイトは心配を滲ませる。

「いえ、改造は100%成功します。僕の言う寿命というのは個性的出力が上がるためにはかかる負荷が増える身体的なもの。そして、運動的な活動時間が増えたことによつて生じる変化。何者かに殺されるかも……という危惧です」

「そうか……でも、何者かに殺されるかもしれないという話ならば、既に承知済みさ」

オールマイトは、自身のサイドキックであつた彼のヒーローを思い出す。

「予知ですか？」

「君、ホントに何者だい？ そんなことまで」

「それに関しては、サー・ナイトアイと組んでいたことを知つていれば予想が付きますよ。それと僕の正体に関してはまだ内緒です。それは次の機会にでも。それといつかはあなただけじやなくて世界中に伝えようと思つています。けど、それがいつになるかはわかりません」

オールマイトには檸がまだ信頼に足る人物なのかは、判断しかねるところはあつた。しかし、檸は明かせないまでも秘密を持つていてることを明かした。その上、人々の支持のみで順位を上げた多くの信頼を得ているヒーローだ。悪意を持つてているとは、考えたくはなかつた。

「君ほど社会に信頼されているヒーローは数少ない。君を信じよう」「ありがとうございます！ それでは後日連絡させてもらいますね」

檸は子どもの様に手を振つて去つていく。

そして、すぐそばの曲がり角で女性に鉢合わせになつた。

「檸様！ 今までどこに行つっていたのですか!? 本当にいつもあなたという人は……！」

「か、楓……何も、今ここで説教をしなくても……」

正に親に叱られる子どもの図であつた。

楓は檸と同じく月の樹に属するヒーローである。月の樹に属すると言つても、檸とチームアップをしていいわけでも、サイドキックの立場にいるわけでもなく、月の樹の幹部でヒーローというだけである。しかし、常に檸と共に居る人物であるためにそういう勘違いはよくされていた。

とは言つても、月の樹の幹部は櫻を含めた7人の幹部の内6人がヒーローであり、共に行動することも多いため実質同じ事務所であるとも言えた。

楓はオールマイトの存在に気付き、頭を下げた。

「すみません。お見苦しいところを……うちの櫻が迷惑をかけなかつたでしようか？」

「いえ……」

櫻はオールマイトを見て、口元に指をあてて「しーつ」と声を出さずジエスチャーする。

さつきの話は黙つていろという意味合いだろう。

「それでは私共はこれで失礼します」

「オールマイト！ またね！」

櫻は手を振りながら楓と共に去つて行つた。

ほぼ同時刻、轟は緑谷にどうして宣戦布告したのかを説明した。

轟焦凍は、父——エンデヴァーが個性婚によつてオールマイトを超えるヒーローにするべく作つた子どもだ。その個性婚によつて、結婚を強いられた母親にお前の左側が憎いと焦凍は煮え湯を浴びさせられていた。そして、轟はエンデヴァーを見返すために左側の個性を使わずにNo.1ヒーローになると決めた。

緑谷はオールマイトに気にかけられており、オールマイトに近しい何かを感じ取つたために超えるべき存在として宣戦布告した。といふことだつた。

緑谷はそれに対し自分だつて負けられないと力強く答えていた。轟と緑谷が別れたところで、そこには三崎が居た。

「よお

「……聞いてたのか？」

「立ち聞きすんのも悪いかとは思つたんだがな。タイミング逃した」「そうか」

轟は、盗み聞きされたことにあまり気にした様子はなかった。

「俺も人の事言えたもんじゃねえけど、ひでえ動機だな」

「……なんだと」

しかし、その言葉は聞き捨てならなかつた。

「さつきのつまりは、俺はNo.1になるまで全力を出しませんつて宣言した様なもんだろ」

「違う！」

「違わねえだろ」

轟は意識していなかつたが、それは手抜きに他ならなかつた。使える力を半分しか使つていないのでから。

「俺は、母さんの力だけで……！」

「言つとくが、俺は別にお前の動機を否定しているわけやねえからな」

「は……？」

先ほどまで、侮辱するようなことを言つておきながら、三崎はそれを覆すような発言をした。

「さつきも言つたが、俺も人の事言えねえぐらいひでえ動機でヒーローを目指してる。目指してるつてのもおかしいな。ヒーローになる過程を利用してる。お前に話しかけたのは俺以外にもマジだけど碌でもない動機を持つている奴がいる、つてのがわかつて少しだけ安心したからつてだけだ」

「……お前は何のためにヒーローに？」

「復讐だ」

そう端的に告げた。轟がそれに関して深く追及することはなかつた。しかし、全力を出さない宣言をした、と言われたことに引っ掛かりを覚えていた。

昼食時 食堂は混みあつており、三崎はどこに座つたものかと……うろうろしていた。

「おーい！ こつちだ！ こつち！」

聞き覚えのある声、探してみれば、その声の主は香住であった。

「なんで、あんたがここに居るんだよ」

体育祭は学年ごとにステージが違うためにそれなりに距離が離れている。昼食時で自由な時間とは言え、短い休み時間で来るような距離ではない。

「まあ、気にすんなよ。とりあえずは、予選突破おめでとさん！」

大袈裟な振る舞いに三崎は少しばかり面倒そうに

「ああ」

とだけ応えた。

「反応薄いねえ……別にいいけどさ。俺がここに来たのは、再度忠告しに来たつてだけだよ」

「忠告？」

「八咫から聞いただろ。憑神は使うなって」

「そういうや、そんなこと言つてたかもな」

本当はちゃんと覚えていた。覚えていないふりをして使う気満々であつた。

「お前なあ……！」

香住は、少しばかりの苛立ちを覚えたがすぐに抑えた。

「ただ、俺が憑神を使うなつてのと、八咫が言う憑神が使うなつてのは、同じ意味でも意図が違う」

「……？　どういうことだ？」

「八咫は多分、憑神という能力の情報が漏れる可能性を危惧しているんだ。憑神は国家機密だからな。それが全国放送されているこの体育祭で披露されてしまえば、碑文使い以外には見えないとはいえ、解析される恐れがある」

「それで、お前は？」

「俺が憑神を使うなつていうのは、単純にこの力が危険だからだ。お前は手加減しているつもりでもあつさりと命を奪つてしまいかねない。命が失われないにしても相手が未帰還者になり得る可能性がつてあるんだ」

「へえ」

三崎の生返事に香住のこめかみが少し動く。

「……、これがどれだけ危険なことかわかっているのか？　この力はA I D Aの様な異質な存在にのみ使われるべき力なんだ。決して、人間に向けていいものじゃない」

「あんたがそう思うつてだけだろ。人に向けるのが危険つて意味なら他の個性だつて似たようなもんだ。何も憑神に限つた話じやねえ」「そういう問題じやないんだよ！　憑神は……他の個性とはまるで違うんだ。この世の何物でもない力で、本来ここにあつてはいけないそういう力なんだ」

「はあ？」

言つている意味がまるでわからなかつた。強い力であるなら三崎にとつては願つてもないことである。

「クーン。お前が何と言おうと俺は必要だと思つた時に使う。相手が一般人だとかヴィランだとかA I D Aだとか、関係ねえ。俺は使いたいときに使いたいように使う」

「お前……！　何を言つてているのかわかつてゐるのか!?　それはヴィランと何ら変わりないんだぞ！」

「ヴィランで結構。俺は復讐が果たせるなら、何だつていいんだよ。ヒーローだろうが、ヴィランだろうがな。たまたま、ヒーローの方が復讐を果たしやすいと思つただけだ」

「もういい……勝手にしろ！」

「ああ、そうさせてもらうぜ」

黒い泡

会場にて、トーナメントの組み合わせが発表された。三崎の初戦の相手は芦戸であつた。

酸を飛ばすことができる個性を持つ女子生徒。身体能力は1—A女子の中ではトップクラスに高い。個性は単体でも強力なうえ、応用も効く。三崎は、勝つのが難しいとは全く考えなかつたが、油断していい相手でもなかつた。

「よろしく、三崎！」

芦戸は、とにかく社交的だ。明るく誰とでもコミュニケーションを取る。三崎にとつては、嫌い……という程でもないが、僅かな苦手意識がある。

「これから闘うつて相手に随分と馴れ馴れしいな」

「別に戦うつて言つたつて、これからもクラスメイトには変わりないし、競い合うライバル兼仲間つて感じじやん？ 馴れ馴れしくつたつて別に良いと思うんだけど」

「……まあ、いいんだけどよ」

三崎はA組女子が、チアのコスチュームを着てていることは完全にスルーしていた。

トーナメントが行われる前にレクリエーションの時間があるため、一旦解散となつた。

レクリエーションへの参加は自由であり、トーナメント出場者は、体力温存であつたり、精神集中の時間であつたり、気を紛らわせる時間など、各自で備えていた。

三崎は、会場の外をぶらぶらと歩いていた。

「三崎さーん！」

「……日下か」

日下は息を切らしながら三崎に駆け寄つた。

「お前、レクは？」

「抜けてきちゃいました。……レクでもあんまりお役に立てそうにな

かつたですし

日下の態度に思わずため息が出る。日下は自己評価が低い。雄英のヒーロー科に入学できただけでも誇つてもいいだろうに。さすがにそれだけで誇らしげにされたら、それはそれでイラつくだろうが。「あ、ごめんなさい！ こんな話をしに来たわけではなくてですね。遅ればせながら、本選出場おめでとうございます」

「用はそれだけか？」

「それと、障害物競走の時助けてくれてありがとうございました」「別に礼を言われたくて助けたわけでもねえし、気にする必要なんてねえよ」

「そうかい」

「そうはいきません。そうしないと私の気が済まないんです」

「律儀なものだと、そう思う。融通がきかないとも言えるかも知れない。

「それでお礼なんですが、今度一緒にご飯にでも……」

「断る

「え」

日下が言い切る前に三崎は断つた。日下の口から思わず声が漏れた。

「礼はいらない。その辺の奴でも誘つて行けよ」

「何で……？」

「俺は誰かと馴れ合うつもりはない」

「なら……どうして私を助けたんですか？」

「気まぐれだ。気まぐれ。たまたまそういう気分だつたってだけだ」

「それなら三崎さんはどうしてヒーローに……」

「もういいだろ！ 俺はトーナメントに向けて集中したいんだよ！ ほつとけ！」

「！ ごめんなさい！」

日下は走つて、会場に戻つていった。

「で、お前は何の用だよ」

そこに居たのは、B組の拳藤であつた。

「私は千草を追つて来ただけだよ」

「なら追いかけてろよ」

「あんたねえ……！」

拳藤は、三崎の胸倉を掴んだ。

「人を傷つけて何とも思わないの!?」

「別に傷つけた覚えなんてねえよ。変な妄想押し付けんな」

「あの子は、あんたのことを持つて……！」

「迷惑なんだよ、そういうの。勝ち残れなかつたB組にはわからねえだろうけどな」

三崎は、嘲笑した。拳藤は思わず、殴りにいきそくなつたがぐつと堪えた。負けたことは事実で、笑われても仕方ない。三崎を投げ捨てる様に手を離した。

「あんた、良いヒーローにはなれないよ」

「別になれなくていいんだよ。ご立派なヒーローにはお前らがなつてればいい」

「それどういう意味?」

「てめえで勝手に考えろ」

三崎はヒーローらしくない。ヒーローらしくないと言えば、爆豪もそうであるが、三崎はまた違つている。ヒーロー科にあつてヒーローを志していない。ヒーロー科に在籍する全ての人間に共通するはずの意識。それがない。

拳藤には、三崎が何を考えているのかわかるはずもなかつた。千草を傷つけて、何のつもりなのか、と。それでもヒーロー志願者か、と。それでも、彼は千草を助けている。

『（ダ）立派なヒーロー』。ただ嘲笑うための皮肉を込めた一言だろう。

なのにどこか自嘲染みていると感じたのは、何故だろう。

「お前らB組は、観客席で指くわえて見てるんだな」

「このつ……！」

煽られて、また怒りが湧き上がつてくるが抑える。

「あんたも精々一回戦負けしないようにね」

「負けねえよ。絶対にな」

負けないだけの強さを手に入れる。そのために戦い続ける必要がある。戦い続けるために負けるわけにはいかない。

一回戦第一試合。

心操 対 緑谷。

緑谷は心操の個性『洗脳』にあつさりとかかってしまった。洗脳により場外にさせられるというタイミングで緑谷は個性を暴発させて洗脳を解いた。心操は、もう一度洗脳をかけようと試みるがタネが割れているし、既に一度かかっている故に緑谷がそれに返事をするわけもなく、取つ組み合いになつたところを背負い投げで心操を場外に出した。

試合後、緑谷はリカバリーガールに治療を受けながらオールマイトと会話をしていた。心操が試合中に言つた「恵まれた人間」。無個性であつた緑谷には痛いほどに心操の気持ちがわかつた。それでもヒーローになりたいと願つた気持ちも。それでも勝ち抜かなければいけないのだと。

そして、緑谷は洗脳にかかっている時に幻覚を見たと語つた。オールマイトはそれをワンフォーオールに染みついた面影の様なものだと言つた。緑谷はそれに納得いかない様子だったが、オールマイトは次の対戦相手を見なくていいのかと急かした。

「それと大事なことを言い忘れました」

緑谷は深刻な表情を浮かべた。

「幻覚と一緒に……例の黒い泡みたいなのも見えた気がしたんです」

ヴィランが最後に残していつた謎の存在。ヴィラン曰く精神を暴走させるもの。それらしきものが幻覚と共に視界の端に居たのだ。

「……それは他の誰かに言ったかい？」

「いえ、まだ誰にも。もしかしたら、僕の気のせいかもしません。けど、もしも本当にあれが居たのなら……」

「中止……とはならないだろうね。実害が出ない限り」

「な、何でですか!?」

「あの黒い泡『A I D A』は政府が存在を秘匿しているんだ。社会に無用の混乱を招くとね」

それも理由の一つではあるが、政府の実験による副産物である可能性もあつたために揉み消したいという事情もある。また、問題は日本に限らず世界にまで波及する可能性があるために問題が明るみになる前に揉み消さなければ国際世論で叩かれるのは必至である。

「それでも……隠しておくなんて……」

「あれらはどうも普通の物理法則が効かないようで、極一部の例外を除けば対処法が存在しない」

対処法が存在しないものを公開したところで混乱を引き起こすだけで、害はあっても益はない。

「断言するが、仮に私が全盛期の頃の力を持つていたとしても『A I D A』には勝てない」

「オールマイトでも……!?」

「かつての彼がいればまた話も変わってきたかもしれないが……」

オールマイトが思い出すのはモルガナ事件解決の立役者。しかし、彼の力も既に失われたものだ。

「彼?」

『A I D A』に関しては私の方で対策を講じるから、緑谷少年は、試合の方に集中しなさい』

「は、はい……」

なら、僕はA I D Aに襲われた時どうやつて助かつたのだろうと……薄ぼんやりした記憶を思い出す。てっきりオールマイトや他の教師のプロヒーロー達に助けられたのだと思つていたが、全盛期のオールマイトでも倒せないものを他のヒーローたちが倒せるのだろうか。他のヒーローを侮っているわけではないが、それだけオールマ

イトは凄まじい力を持っている。あの時、最後に記憶に残っているのは、三崎亮の姿だった。

一回戦第二試合。

瀬呂 対 轟

瀬呂は、轟に氷結させる前に速攻に場外に出そうと狙つたものの轟の超広範囲氷結で一瞬にして氷漬けにされた。瀬呂も思わず「やりすぎだろ……」と言つてしまっていた。あまりにもあんまりな様子に観客からはドンマイコールが沸き起こるほどだった。

倉本智香

一回戦第三試合

『普通科、赤髪の問題児!? 倉本智香!』

『対』

『スパークリングキリングボーアイ！ 上鳴電氣！』

「問題児……ねえ。否定はしないけど」

倉本は、呟く。

自身の喧嘩つ早さには、自覚はある。普通科のクラスメイトは卑屈な人間が多い。ヒーロー科を目指したが落ちて普通科に受かつたという事実がその要因である。心操の様に転科するために必死になれる者がいない。あわよくば程度の想いしか持たない。その態度にイラついてしまうのだ。この場に居ては自分も腐つてしまいそうだ、と。

「コレが終わつたら飯とかどうよ?」

上鳴は、倉本の事情など知らず声をかける。倉本の容姿は美少女と言つて相違ない。勝気な瞳とその荒々しさを表すような赤髪であるが、小柄で可愛らしいと言つても良い。

「俺でよけりや慰めるよ」

倉本が障害物競走の時に一時首位近くにも居たことから身体能力の高いことはわかっている。しかし、ヒーロー科に居ないのは、戦闘に置いては何かしらに不安があると上鳴は見ていた。かと言つて、油断するつもりはない。

「多分、この勝負一瞬で終わつから」

『S T R A T !!』

上鳴は一気に放電する。倉本は瞬時に2本の短剣を取り出し、地面に突き刺す。上鳴が放電した電気は、刀身に流れていき分散された。

「ウエツ!』

「あんた、アタシがヒーロー科に落ちて普通科に入った……とか思つ

たんじゃないでしょうか？』

『図星。雄英高校に入ろうとする大半の生徒はそれが目的なので、普通科に入っているのは特にそういう傾向があるのは間違いない。

「それとヒーローになれそうにないからヒーロー科を選ばなかつたとかでもないからね。私が雄英高校に入ったのは全て、この体育祭でトップを取ること……正確にはガチバトルで一番になること！ 私が目指しているのは武の究極！ アリーナの宮皇！』

それを聞いた観客はざわつく。アリーナは、個性を使つた闘いの場。法的には限りなく黒に近いグレーな場所で、ヴィラン予備軍の溜まり場ともされている。賭博の場でもあり、黒い噂の絶えない所である。それでも存在が許されているのは、大量の税金と政治献金。アリーナでの個性使用によるガス抜きが、犯罪発生率低下に効果が出ているとされているためだつた。

「ヒーローになる気なんて最初からないから、ヒーロー科を受けなかつたんだよ。それでも雄英を選んだのはヒーロー科の強いやつと戦えると思ったから。そう思つてたんだけど、アンタは期待外れね」「ウエ、ウエ……そんなことウエイ！」

開幕全力放電のために、急激にアホ化が進んでいた上鳴。語彙がほぼウエイになつていた。

「……強い個性の癖して、情けない男だね」

瞬時に距離を詰める倉本。その速度は、アホ化している上鳴にはとても捉えられるものではなかつた。正気であつたとしても捉えられたかどうか。その瞬間的な速度は、観客席で見ていた一部プロヒーローでさえ見失うほどだつた。最後に放電で牽制しようとするもそれよりも速く、剣の柄で後頭部を殴られていた。その一撃で上鳴は気絶した。

『瞬殺！ あえてもう一度言おう。瞬・殺！』

倉本の個性は双剣士。短剣を取り出す個性。三崎と同質の個性だ。取り出せる武器の種類が三崎より少ない故に下位互換と言える。しかし、その素の身体能力は三崎より上だ。

観戦していた緑谷は、ぶつぶつと咳きながらノートにメモを取つていく。

上鳴に対し、八百万でも似たような対策は打てるだろうが、『創造』の個性の速度ではとても間に合うものでもない。武器を取り出す速度と瞬時に選択した判断力が優れていればこそ動きだった。武器を取り出せる以外は、無個性とほぼ変わらないはずだが、それでも上鳴を完封してみせた。個性抜きの試合をしたら、1年生の中でほぼ確実に1位になるのではないかと思わせる身体能力だ。さすがに格闘とするのならば尾白に分がありそうではある。

一回戦第四試合

飯田 対 発目

この二人の試合は、発目のサポートアイテムのPRの場となつた。飯田は、発目に乗せられてサポートアイテムをフル装備。発目はそれを解説しながら、観客席で見ているであろうサポート会社にアピール。自身の個性『ズーム』でも確認。全て解説し終えた後、自ら場外に降りた。

結果は飯田の勝利になるが、発目はやりたいことをやりきつたので勝負で言えば発目の勝ちだろう。飯田は終始、宣伝のための人柱にされたわけである。これがプロヒーローへのアピールになるかと言えば厳しいかもしない。しかし、この試合によつて本人の馬鹿が付きそうなぐらいの生真面目さが伝わり、ヒーロー一家の生まれでもあるために元々の注目度もそれなりにあつたから心配はいらないのかもしれない。

一回戦第五試合

『ピンクの酸性少女 芦戸三奈！』

『対』

『凶悪な面の割に意外にフェミニスト？ 三崎亮！』
「なに勝手なこと言つてんだ……あの教師は……」

プレゼント・マイクによる三崎の紹介を聞いて、芦戸は何かを思い出したように言う。

「三崎つて、障害物競争の時、B組の子助けたんだってね」

「ん？ ああ」

「その子のこと、好きなの？」

「そんなんじゃねえよ」

『START!』

三崎は双剣を出して構える。

芦戸は、もつと三崎が狼狽えると思っていたのだが、軽くあしらわれてしまった。

「ええー、つまんない」

「くだらねえこと喋つてねえで、かかつてこいよ」

三崎は、芦戸の発言はなんとなく予想が付いていた。如何にも陽キヤが言いそうな、頭が沸いた発言だ。陽キヤ云々というよりも、恋に恋するお年頃な少女の恋バナしたい衝動でしかないのだが、三崎からすれば鼻で笑つてしまう様なくだらない話題だ。

「ぶー。ケチ」

「何がケチなんだよ……」

ちよつと理解に苦しむ反応である。ある意味で日下以上のお花畠かもしけれない。

「私が勝つたら根掘り葉掘り聞かせてもらうからね」

「別に聞かせるようなことなんてないが……いいぜ！ お前がそれでやる気になるんならな！」

芦戸は、走つて距離を詰める。1Aの中でも高い身体能力を持つ彼女の動きは速く鋭い。しかし、肝心の酸は遠くに飛ばすことができない。懷に入られる前に対処する方が懸命だろう。

三崎は持っていた、双剣を芦戸に投げつけた。

「きやつ、危ない！」

「安心しろ。刃引きはしてある」

と、言いつつも投げられた双剣はしつかりと地面に突き刺さつていた。直接当たれば、それなりの怪我を負つていただろう。

「そおら!!」

今度は大剣を取り出し、芦戸めがけて振り下ろす。

「ちよつ、ちよおお!!」

芦戸は間一髪避けたが、大剣が地面を碎く際に生じる衝撃波を感じた。最早、剣というよりは鈍器だ。大剣が当たった部分はクレーターの様に小さな窪みができるがっていた。

「ひ、ひえええ」

マジに殺しに来ていなかと不安になる芦戸。酸で溶かすことも考えたが、一瞬でこの大剣を無力化するほどの酸を出して自身の肌もそうだが、三崎の無事も大丈夫か不安であつた。

次は大剣の横なぎが迫つていた。

「骨破碎！」

遠心力も利用した薙ぎ払い。ただ腕力だけで振るよりも速く威力も高まる。しかし、その分外した際の隙も大きい。それが普通だ。

芦戸はそう思つていた。だからこそ振り切つた状態を見て、その隙に懐に飛び込んでアッパーで決めるつもりだつた。だが、次の逆側から横なぎが既に迫つていた。

『直撃いい!!』

最初に遠心力の勢いがのつていた一撃程の威力はないが、それでも人を吹っ飛ばすには十分すぎる威力だつた。

芦戸は地面を転がりながら、場外手前で止まる。三崎は追い打ちをかける様に短剣を眼前の床に突き刺した。

「ひつ！」

「まだ続けるか？」

「こ、降参します……」

一ノ瀬薰

一回戦第六試合

常闇踏陰 対 八百万百

この試合は、常闇の圧勝であった。八百万が『創造』の個性で何かを創らせる前にダークシャドウによる中遠距離攻撃。八百万は何もできずに敗退することとなつた。

八百万の個性と三崎の個性は、似た部分があるが、根本的に違うものである。八百万の個性は、自身の脂肪を自身の知識のある物体にして創り出す。そのため、大きかつたり構造が複雑なものほど創り出すのに時間がかかるてしまう。

対して、三崎や倉本の個性は、武器を取り出す能力である。本人たちにはどこにしまつており、どこから取り出しているのかは理解していない。自身の持ち物を袋から取り出している。それぐらいの感覚である。武器もいつの間にか増えている。また、取り出せる武器は使い方がなんとなくわかるのである。故に、誰から学んだでもなく、修行したでもなくとも、ある程度使いこなすことができていた。本来、三崎の膂力は大剣を振り回すだけの強さはない。しかし、三崎の個性は身体能力を僅かに向上させ、身体の動かし方を感覚的にわかつているために自由に振り回すことを可能にしていた。

汎用性、万能性においては、八百万の方が圧倒的に上だが、三崎や倉本の個性の方が直接戦闘には向いていた。

一回戦第七試合

『普通科、ミステリアスボーイ！ 一ノ瀬薰！』

『対』

『ヒーロー科、堅く熱い漢！ 切島銳児郎！』

「おい、肩にいるその猫。危ねえから誰かに預けとけよ」

一ノ瀬の肩には、小さな白猫が座っていた。不安定であろうに、優雅に気品さえ漂わせる不思議な猫だ。

「心配ないよ……キミには、ボクも『彼女』も傷つけることはできはないから」

一ノ瀬の発言にむつとする切島。

「実際、一ノ瀬くんに不利になると思うけど、いいの？」

ミッドナイトがそう確認を取るが

「構わない。『彼女』と一緒にすれば戦う意味がない」

「……理由はよくわからないけど、互いに合意があるなら許可します。

切島君もそれでいい？」

「構わねえですよ。後悔すんじゃねえぞ」

「後悔させられたら、いいね」

『START!』

「このつ！」

切島は、若干の苛立ちを抑えられず、硬化を使つて一ノ瀬を攻撃にかかる。一ノ瀬は、その攻撃をただ避けていた。攻撃する素振りもなく、ただ避けていた。

「逃げ回んなよ！ 男らしくねえぞ！」

「……つまらないな」

「はあ？」

「キミは堅くなるだけだ。こんなことでは『彼女』が退屈してしまうよ」

一ノ瀬は自身を抱くように腕を組む。

「はあああああ！ はあ！」

周りから見ればただ叫んだだけ。だが、三崎にはそれがはつきり見えていた。

「あいつ……！」

三崎には、変身し、猫の様な姿をした人型の憑神が見えていた。下半身は薔薇の花の様な形をしており、手には鋭い爪が伸びていた。背にはベールの様なものが浮かんでおり、ドレスを着ている様にも見える。

他人の憑神を見るのは香住の使つていてるもの以来だが、その感覚を忘れてはいなかつた。まるで異空間に送られたかのような空気の変化。通常の変身とは違う、変化。周りを見渡してもその変化に気付けている者がいるようには見えない。一ノ瀬が変な叫び声を上げたかのようにしか見られていなかつた。

一ノ瀬の憑神は、手を上に延ばす。

「消えてくれ……キミはただのみにくい人形だ……」

憑神の手には光が集まり、それを振り下ろす。

「切島！ 避けろオ!!」

三崎は、限界まで声量上げて叫んだ。自分も使うつもりであつたそれだが、感覚的にわかつてしまつたのだ。それが、どんなに凶悪な力であるか。

切島は硬化で備えていたが、光が切島を襲つた。憑神は、元の一ノ瀬の姿へと戻り、切島は倒れ伏した。

『な、なんだあ!? 何が起きた!?』

『……俺にもわからん』

碑文使い以外には、何が起きたかなどわかりようもない。憑神が見えないので、攻撃したかもわからない。会場がざわつく。観客席に居る多くはスカウトに来たプロヒーローだ。それが誰一人として一ノ瀬のしたことがわからなかつた。観察眼に優れたヒーロー、イレイザーヘッドこと相澤でさえ見極められなかつた。

審判であるミッドナイトが、切島の状態を確認する。

「……氣絶してるわ。呼吸も脈拍も正常ね……」

ミッドナイトは切島が唐突に氣絶した（様に見えた）ものだから少しばかり焦つていた。とりあえず、ちゃんと生きていることを確認で

きたので一安心する。

「一ノ瀬くん一回戦進出！」

切島は、1分ほどで起き上がったが、何をされたかわかつていなかつた。悔しいことには違いないが、釈然としない気持ちでいっぱいであつた。

相澤は、一ノ瀬に関して疑問を覚えていた。

「あれだけの力があつて、何故ヒーロー科に受からなかつた……？」

プレゼント・マイクがそれに反応する。

「そりや、あれ対人限定とかじやねえの？」

「障害物競走の時にあいつの身体能力の高さを見ただろう。なのに一ノ瀬の得点は0だ」

「冷やかしとかじやね？」

「……どうだろうな。一ノ瀬は、実技試験の会場内には入っているんだ。だが、何もしなかつた」

「やっぱ冷やかしじゃねえの？」 雄英（ウチ）を記念受験する奴だつて結構居るだろ」

「杞憂ならいいんだがな……どうも一ノ瀬からは、妙な気配を感じる」

そして、観客席では

「三崎さん」

三崎に声をかけたのは、八百万であった。

「先ほど切島さんの試合で避けろとおっしゃっていましたが、何が起こつたのか見えていたのですか？」

「ケロ。私も気になるわ」

「俺も俺も」

近くに座っていたA組の面々が質問してくる。

三崎は何と言つていいものか悩んだ。咄嗟に大声をあげてしまつたが、事は國家機密だ。安易に言つて良いものじやない。一ノ瀬はそれを堂々と全国放送で使つたわけだが、奴にとつてはただの力でしかないからだろう。

「……勘、みてえなもんだ」

「勘……ですか？」

「なんとなくあいつがやばそうな事をしそうだと思つた、それだけだ」「なんだ、つまんね」

「ケロ。でも、それにしても確信をもつて言つてそうな気がしたけど銳いな。と、内心で舌打ちを打つ。蛙吹は、人を良く見ている。だが、それも証拠があるわけじやない。」

「俺の勘。結構、当たんだよ」

適当な誤魔化しを入れておいた。一応はそれで納得はしてもらえたようだつた。

そして、一ノ瀬の試合をテレビで観戦していた死柄木弔。

「はあ!? なんだよ、今い」

弔が声を挙げたことに対し、通話が繋がつていたオールフォーワンが反応する。

『弔、どうしたんだい?』

『普通科のガキがヒーロー科のガキを倒した』

『へえ……』

「しかも、何をしたのかまるでわからなかつた。それも、観客のプロヒーロー含めてだ」

『それは興味深いね。もしかしたら、彼の言つてた奴かな?』

『碑文使い……だつたか?』

『碑文使い以外には見えない個性。不可視にして防御不能の一撃。これは、欲しくなるなあ』

オールフォーワンはオーヴァンに関して情報集めを続けているが、オーヴァンの目的は未だに見えてこなかつた。オーヴァンは全てが

未知数だ。死柄木弔に任せると、まだイレギュラーが過ぎる。自身が万全であつたとしても、警戒に値する。そういう男だ。利用価値は十分にあるとも思つてゐるが、そろそろ切ることも考えた方が良いのかもしれない。

一回戦第八試合

麗日 対 爆豪

この二人の対決は、意外な好勝負であつた。と言つても、最終的には爆豪の個性の圧倒的な火力によつて麗日は敗北してしまつた。

麗日は、生物、非生物を問わず触れたものを無重力状態にすることができる。故に触れてしまえばほぼ確実に相手を場外に出せる。爆豪はそれを警戒し、一切手を抜かず爆破で応戦した。途中、観客席から遊んでないでさつさと場外に出てやれとブーリングを受けるが、相澤によつて喝が入れられた。ここまで勝ち抜いてきた相手に対して油断できないからこそ全力なのだと。そして、麗日はただ攻撃されていたわけではなく、爆破によつて飛び散つた瓦礫を浮かせて空中に武器を貯めていたのだつた。瓦礫を落下させて爆豪を攻撃するも爆豪はそれを爆破で全て破壊してみせた。麗日は、個性による限界を超えたためにそこで倒れ、勝者は爆豪となつた。

以上、これによつて二回戦に勝ち進んだ選手が決まつた。

緑谷出久

轟焦凍

倉本智香

飯田天哉

三崎亮

常闇踏陰

一ノ瀬薰

爆豪勝己

この8名によつて、二回戦が行われる。

資格

二回戦第一試合

轟 焦凍 対 緑谷出久

轟は氷結による範囲攻撃で攻めたが、緑谷は、指を弾くことによる風圧によって防いだ。しかし、緑谷のその手段を使うたびに指が壊れていく。轟が近づいてきた時に距離を取るために左腕を使つて振り払つたために左腕を大怪我してしまつていた。早々に両手分を使い果たしてしまつた。轟はどごめの氷結を放つたが、緑谷は壊れた指で再度氷結を防いだ。緑谷の指は更にボロボロになつていた。それに焦りはじめた轟が接近戦を仕掛けてきたところで緑谷は壊れた指で握つて拳を叩きこんだ。轟の氷結の個性は、使うたびに身体が冷えるために動きが鈍くなる。緑谷はそれを見抜いた。そして、その弱点は左側の個性である炎熱の方を使えば解消できることも指摘した。緑谷はその最後の締めくくりに「君の力じやないか！」と叫んだ。

轟はその言葉に応じて炎熱の個性を使用した。そして互いの全力を撃ち込んだ結果、冷やされた空気が一気に膨張したことで大爆風を起こした。それにより緑谷は場外にはじき出され、轟が三回戦へと進出した。

壊れた舞台を直すために、しばしの休憩時間が与えられた。飯田、麗日、蛙吹、峰田は、緑谷の見舞いに行つた。そして、三崎は轟が居る場所に向かつていた。

「よお

「三崎か……」

「左は使わねえんじやなかつたのか？」

その言葉には棘があるようで、ただの問い合わせしかなかつた。

「……そうだな。でも、あん時だけはそのことを忘れた。今でも親父を否定したい気持ちがなくなつたわけじやねえ」

「俺に気遣う必要はないぜ。勝手にお前に同族意識を感じてただけで、本当は違つたら今まで通りつて言うだけの話だ」

「別に気遣つたつもりはない。俺の本心だ。だけど……なんか、すまねえ」

三崎は味方とまでは言わなくとも共感できる相手を探していたのではないかと、轟は思った。その期待を裏切ってしまったのではないのか。

「謝んな。そんなつもりで来たわけじゃねえんだ。お前のそれが良いのか悪いのかはお前が勝手に考えることだ。ただ、それでお前が先に進めるのなら悪いことじやねえんだと思う」

「俺の親父を否定してやりたい気持ちも復讐心なんだと思う。だから、お前と似たような気持ちを持つていたんだ。俺はただ親父を否定することだけを考えてきた。自分がどうしてヒーローになりたかったとかそういうことも全部忘れるぐらいにな。でも、三崎。お前は周りが見えている。お前も復讐だけじやないはずだ。まだ、俺も清算できてねえから偉そうなこと言えねえし、上手く言えねえけど、俺はお前の仲間だ」

轟なりの精一杯の応援。とてもありがたいことで、嬉しく思う。でも、それに絆されて復讐を諦めてしまいそうで、怖くもあった。

「いらねえよ。お前が何をするのかは勝手だ。でも、俺は絶対に復讐を遂げてみせる」

「三崎……」

「控室に行つてる」

轟は未だ自分の進むべき道を迷っている。三崎もきつとそうなのだろう。緑谷の様に抱えているものをぶつ壊すことが必ずしもいい結果を産むかはわからない。結果はまだ出でていない。でも、三崎も言つたように前に進めた。三崎も前に進めるように味方をしてやりたい。そんな想いを抱えていた。

二回戦第二試合

『続していくぜ！ 倉本 対 飯田 だ!!』

倉本は、双剣を逆手で構える。

『START!!』

飯田は、走つて倉本との距離を詰める。個性『エンジン』のために
その速度は並みではない。

「へえ……一回戦のよりはマシかもね」

倉本は真正面から受けて立つた。飯田の加速の付いた蹴りを難なく双剣でいなす。

「僕より速い……!?」

「でも、その程度じゃ話にならない」

剣を眼前へと突きつけられる。

「くつ……レシプロバースト!!」

飯田の限界を超えた加速。騎馬戦の際は、緑谷が一切の反応すらできなかつた超スピードだった。

その速度の蹴りは速さゆえに避けづらく威力も高い。だが……倉本はその悉くを避けた。飯田のレシプロバーストは、十数秒しか持たない。そして、エンストを起こし動きが止まる。

「……ふう。速さだけはアタシに本気を出させたんだ。褒めておくよ」

飯田は再度、眼前に剣を突きつけられる。

「それで、次は？」

「降参だつ」

飯田は唇をかみしめ悔し気にそう告げた。

二回戦第三試合

『どんどんいくぜ！　お次は三崎 対 常闇だあ！』

常闇の個性は、中遠距離攻撃を得意とする。対して三崎は近距離攻撃しかできない。懷に詰めさえすれば、勝利を掴むのは容易いはずだ。

『START!!』

「ダークシャドウ！」

「アイヨツ」

常闇の個性『ダークシャドウ』は、それ自体に意思が宿っている。常闇の命令を受けて常闇の身体から黒い影のそれは伸びてくる。

三崎は双剣で迎え撃つ。ダークシャドウの攻撃は腕によるものだ。三崎はそれを剣で受けるが、ダークシャドウ自体にダメージを与えていた様子はない。

「ちつ！」

防戦一方で攻撃に移れるタイミングがない。一時的にでも振り払えれば距離を詰めることはできそうだが、ダークシャドウ自体に体力の概念があるのかはわからない。常闇がダークシャドウを操ることによる消費と三崎がダークシャドウの攻撃を捌くことにかかる消費はほぼ間違いなく後者の方が大きい。

このままではジリ貧だ。三崎は双剣を仕舞う。

「臆したか!?」

「はああああああ!!」

三崎の身体は変化を起こす。その身は巨大な人形の様な姿となる。「いい加減、鬱陶しいんだよ！」

拳を握り、ただ振り下ろす。巨大であるが故にそのリーチも質量も生半可ではない。数メートルの距離だらうと三崎の変身した姿では、腕が届く距離だ。

「ぐつ！ ダークシャドウ！」

常闇はダークシャドウで守りをかためる。ダークシャドウでは、勢いを殺しきれずにステージギリギリまで吹き飛ばされた。

「何と重い攻撃だつ！」

「これで止めだ!!」

三崎はダメ押しとばかりにもう一度拳を振るう。

「ダークシャドウッ!!

「アイヨツ！」

ダークシャドウは影を伸ばし、人形の拳を伸ばした影で包帯の様に巻いて止めにかかる。

「てめえのパワーじゃ足りねえよ！」

「そうかもしれん。だが、ここで諦念していくは己の信ずるものに到

達など決してできん！」

ダークシャドウによつて一瞬止められたかの様に見えたが、勢いは全く死なず人一人分はある大きさの拳が常闇に直撃した。

「ぐおおっ!!」

常闇はそのままステージ下へと叩きつけられた。

「無念」

三崎は次の試合に出る爆豪のところに居た。

「てめえ、何の用だよ？」

普通に観客席に戻つていれば、すれ違はずもなかつた。それがこうして目の前に爆豪の目の前には三崎が立つてゐる。

「お前が俺の言うことを素直に聞くとは欠片も思つちやいねえが、ちよつとしたアドバイスだ」

「ああ？ いらねえよ！」

「黙つて聞いておけよ。あいつの持つてゐる力に対処するには、特別な力がいる。強い弱いじやねえ。持つてるか、持つていなかだ」「だから、降参しろつてか？ ふざけんじやねえ！」

「本当はそういうつもりだつたけど、お前がそういうことを聞くなんて最初から思つてねえから。俺が言いたいのはお前の唯一の勝ち筋だ」

「てめえに言われなくとも俺だけの力で倒す」

「断言してやる。あいつが力を使えば、その時点でお前は負ける」

「ああ!? んだと！」

爆豪が三崎の胸倉を掴む。

「だから、力を使わせる前に速攻でぶちかませ。何故かは知らねえけど、あいつは一回戦でそれをすぐに使おうとはしなかつた。なら、使う前に倒しちまえ」

爆豪は投げ捨てるように手を離した。

「てめえ、なんでそんなことを俺に教える」

「特に深い理由はねえよ。敢えて言うなら、俺はお前のことを買つて

いるつてとこだな」

「は！ てめえに認められたつて嬉しかねえよ！ 僕は俺の手で1位になるだけだ！ あの野郎もてめえも超えてだ！」

「勝てよ」

「言わるまでもねえ！」

三崎は本当は爆豪を止めようと思つたが、それを聞くような相手ではないことはわかっていた。おそらく憑神のことをちゃんと伝えたとしても降参することはなかつただろう。切島は無事に済んだが、また次に誰かがくらえば無事で済むとは限らない。確実に無事であるためには、爆豪が一ノ瀬に憑神を使わせる前に勝つしかない。それを祈る他ない。

二回戦第四試合

『これで二回戦も終わり。一ノ瀬 対 爆豪だ!!』

『START!』

開始の宣言がされても、一ノ瀬は棒立ちのままだ。というより、肩に乗つていてる猫と戯れている。

「この野郎っ！」

爆豪はそれを自身がなめられていると感じ、一気に血が頭に昇る。掌で爆発を起こして加速し、一ノ瀬に爆破攻撃をしかける。

一ノ瀬はそれを何でもないかのように、速いようでいて緩やかに流水を思わせる動きで攻撃を躱していく。

「……なかなか速いね」

「ああ!? 上から見てんじやねえ！」

少しばかり大きな爆破で、目の前の視界が塞がれる。

一ノ瀬は煙幕の中から飛び出る腕に対して一瞬、反応が遅れた。

「遅え！」

一ノ瀬の眼前まで迫った爆豪の掌。確実に捉えた。そう確信した。

「ふつ」

しかし、一呼吸の内に一ノ瀬が眼前から消えた。一ノ瀬は刀を取り

出し、それを地面に突き刺してその柄を利用して、爆豪の背後に回つていた。一ノ瀬は攻撃するチャンスであつたにもかかわらず、そのまま距離を取る。

「強いね。キミは」

「なんなんだよ！　てめえは！　なめてんのか!?」

『彼女』はキミが気になつてゐるみたいだ……少し妬けちゃうな

「んの野郎!!」

爆破で飛び上がりさらには爆破で回転を加えて、一ノ瀬に飛び掛かる。

「榴弾砲着弾!!」
ハウザーハンパクト

爆豪の最大火力。威力も範囲もおおよそ防ぎきれるものではない。

しかし、一ノ瀬は無傷で立っていた。

「でも、キミがいくら強くても『彼女』はボクに負けることを許してはくれない」

「な、何つ……!?」

確かに直撃したはずだつた。真正面から無事であれを受け止められるはずなどない。

「強くても資格がないキミには、最初から勝ち目なんてなかつたけどね。哀れだね……キミは」

「俺が……哀れだと？　見下してんじゃねえ！」

「そうやつて吠えずにはいられない。キミはそのまま吠え続けることしかできないまま、夢も目標も叶えることもできずに老いて死んでいくんだ。可哀想に……かわいそう……カワイソウ」

「は？」

爆豪は完全にキレていた。見下されていることが許せない爆豪にとって一ノ瀬の言動、行動は癪に障るどころではない。騎馬戦においてB組の物間に対してもキレていたが、その時はある程度は抑えられていた。今回は、怒りが沸騰を通り越して逆に冷静になつていた。

自分は何故今こんなにも見下されているのか。哀れまれているのか。怒りというよりも疑問に近いものだ。そもそも何故爆破が効かなかつたのかもわからない。思考は加速し、どれだけ考えを巡らせて

も答えはでない。少しだけ引っかかつたのは一ノ瀬が言つたことと三崎が言つていたことが少し被つていたこと。三崎は、「その力を持つてゐるか持つていなか」一ノ瀬は、「資格がない」と。それがどういった意味なのは一切わからない。それが比喩などではなく、事実そのものなのだとしたら……そんなことあつてたまるか、とその仮説を否定する。

「これでキミは終わりだ。さようなら」

爆豪には、決してみることは叶わない。爆豪がハウザーベンパクトを放つ前には一ノ瀬は既に憑神を使つていた。憑神は、この世界の法則とは外れた位置に存在する。それ故に普通の方法では傷すらつかない。憑神を倒すためには同じく世界の法則から外れた攻撃をするしかない。

爆豪にはここで諦めるなどという選択肢はない。正体を暴いてみせる。そして、ぶつ倒す。ここで考へてゐるのはそれだけだ。

一ノ瀬の憑神の腕が振り下ろされる。爆豪には一ノ瀬が特に何かをしてゐるようには見えない。ただ一拳手一投足見逃さないように神経を張り巡らせていた。それでも、何も見えないままに憑神の爪によつて爆豪は切り裂かれ意識を失つた。

切島と同様に呼吸、脈拍共に問題はないようだつた。しかし、すぐには目を覚まさなかつた。

一ノ瀬は勝利宣言を受け、爆豪は担架でリカバリーガールの保健室へと運ばれていく。

観客席で三崎は頭を抱えた。爆豪をみすみす見殺しにした。まだ本当にそうかはわからないが、未帰還者になる可能性も捨て置けない。気になつてゐるので見に行きたいところだが、準決勝まで時間がない。このタイミングで行くのも不自然な気がして行きづらかつた。

轟との対戦で大怪我を負い、その手術が終わつて観客席から見てい

た緑谷はいつものようにぶつぶつと咳きながら思考していた。緑谷は爆豪が負けたことに少なからずショックを受けていた。幼馴染でその実力のほどをよく知っている。簡単に負けることなど想像もつかなかつた。しかし、それ以上に試合展開が不思議でしそうがなかつた。そして、三崎がその場に居たのなら聞き逃しできない一言を咳いた。

「かつちゃん、どうして避けようともしなかつたんだろう？」

女傑

リカバリーガールの保健室

爆豪が目を覚ました。一瞬、何故自分がベッドの上で眠っているのか理解できなかつたが、持ち前の頭の回転の早さがすぐに結論を出す。

「俺は、負けたのか……」

受け入れ難い事実。しかも、何もわからないままにだ。

「目が覚めたみたいだね」

リカバリーガールとしては一安心していた。外傷はなく、これと言つて何か身体に異常があるわけではないために対処に困つていた。ただ眠つているだけと結論付けても良かつたのだが、ミッドナイトの眠り香で眠らされたのとは何かが違つていた。しかし、無事に起きたのであれば杞憂であつたのだろう。

「リカバリーガール。あの時、何が起きた？」

「私が聞く限りじや、誰もわからなかつたみたいだね」

普段ならあまりの不甲斐なさに自分に対してもキレイていただろうが、そんな気力もなかつた。

「かつちやん！」

保健室に駆け込んできたのは、緑谷だつた。

「……デク、何しに来た」

一番、来て欲しくない相手。昔から氣味が悪い存在で、つい、何ヶ月前までは自分より間違いなく格下であつたはずの幼馴染。

「よかつた。無事だつたんだね」

「てめえに心配されるような覚えはねえよ」

「でも、あんなすごい攻撃を受けてたら心配もするよ」

「だから、心配されるような……デク、てめえ今なんて言つた？」

「あんなすごい攻撃を受けてたら心配もするよ……？」

爆豪は緑谷の胸倉を掴んで詰め寄つた。

「な、何!？」

「見えてたのか!？」

「み、見えてたって何が?!」

「俺が何をされたかだ！」

「何をされたって、あの大きい猫耳?の 人形みたいなやつの爪で…… 雰囲気は三崎君の変身した奴に近かつた様な…… 同種の個性?いや、でも三崎君のはちゃんと物理的な攻撃ができるみたいだつたし……」 話していくうちに一ノ瀬の個性のことが気になつてぶつぶつと思考モードに入る。

「勝手に考察してんじやねえぞ!! クソナード!!」

「はいい!!」

緑谷が言うには、人形の様なものに攻撃されて意識を失つたとのこと。何故、緑谷には見えて爆豪には見えなかつたのか。それが一ノ瀬の言うところの『資格』であるのか。そうであるのだとしたら何故緑谷——デクなのか。それが爆豪には不満で不愉快で堪らなかつた。 爆豪は緑谷を投げ捨てるよう手を放し、保健室から出て行こうとする。

「どこに行くんかい!? まだ治療は終わつてないよ!」

「もうどこも何ともねえよ!!」

そう言い残して保健室を後にする。緑谷と同じく心配して見に来た切島、上鳴と合流し「大丈夫か?」と声をかけられるもそつけなく返していた。

後に、緑谷もリカバリーガールから他の人には一ノ瀬が爆豪に何をしたのかが見えていなかつたことを知る。

リカバリーガールは、緑谷の話を聞き校長から話を聞いていた碑文使いの存在を思い出す。しかし、何故緑谷が憑神を視認することができるのは、推察することもできなかつた。

準決勝

『さあ、いよいよ準決だ! これが雄英一年ベスト4!』

『轟 対 倉本!!』

ステージの上に両者が立つ。轟はいつものようでありながら、内心は未だに迷いで溢れている。倉本は、自信に満ち溢れ満面の笑みを以つて轟と対している。

「アタシの見立てだと一年ヒーロー科の最強はアンタだとみてるけど、どうだい？」

「……俺が本当にそうかはわからんねえよ」

「謙虚なのか、自信がないのか。ま、どっちでもいいけどね、本気を出さなきゃ絶対にアタシには勝てないよ」

『START!!』

轟は開始直後にいつもの氷結で倉本を捕まえようとした。倉本は、いつものように双剣を取り出し氷結された氷を切り裂きながら進んで見せた。

その光景に轟だけでなく観客の全員が驚かされた。氷の堅さは、温度にも左右されるが瞬間的な堅さであれば鋼と同等に達することもある。岩と行つてもいい大きさはあろうそれを全て一太刀で切り裂いているのである。

「そらあ!!」

轟の懐まで辿り着いた倉本が思い切り振りかぶって、剣の腹で殴る。

「熱っ!?」

それは異様なまでの熱だつた。明らかに熱せられた鉄の温度。

距離を取るためにも広範囲の氷結をもう一度だが、倉本には容易く避けられた。

「アンタの個性、強力だけど、というか強力だからか。動きが雑だ」

剣の先を轟に向ける。

「何があつたかは知らないけど、全力を出せないなら闘いの場に出てくるな」

倉本に言われたことは、緑谷に同じようなことを言わされただけに申し訳ない気持ちになる。それでも迷いは未だに晴れない。

倉本の個性は、身体能力や操作技術に大きく左右される。才能の一言では片づけられない積み重ねてきたものを感じる。倉本はヒーローを目指してはいないが、その研鑽はヒーローを目指してきた者たちと何ら遜色はない。それどころか圧倒的に上回っているからこそ、この場に立っている。

轟も積み重ねてきた努力に引けは取らないとは思うが、ヒーローを目指すうえでの歪な想いがそこに陰りを落とした。ヒーローになりたかつたくせに、ヒーローをちゃんと目指していなかつた。

轟は、氷結による牽制で倉本を近づけないようにするが、驚異的な熱量を持つ短剣と飯田のレスプロバーストにさえ伍するその速さを前にしてはほぼ意味を為さなかつた。

倉本が轟を自身の間合いに捉えた。倉本の一撃が目前に迫る中、炎を出そうとも考えたが、結局出すことはせずに倉本の短剣による一撃をくらつて、場外へとたたき出された。

『勝者、倉本智香!!』

倉本は勝ったというのに不快そうな顔を浮かべた。こんな勝負はつまらない。最強の肩書を手に入れるための前座として、雄英体育祭を選んだというのに期待外れも甚だしい。これでは前座にもならない。せめて決勝ぐらいは良い相手ならばと思う。しかし、ここまで期待外れであつたものの決勝の相手に関しては少しばかり期待しても良さそだと思つていた。

倉本は三崎のことをよく知らないが、一ノ瀬に関しては何度か喧嘩を売つてゐる。一ノ瀬がそれにまともに対応したことは一度もないが、軽い牽制とは言え攻撃が当たつたことが一度もない。一ノ瀬が何を考えているかとか思つてゐることだと一切わからないが、多分強い。一ノ瀬ならば相手にとつて不足はないだろう。もしもその一ノ瀬に勝つような相手ならば、それも悪くない相手なのかもしれない。

猫

『三崎 対 一ノ瀬！ 決勝にコマを進めるのは一体どつちだ!? 一ノ瀬が勝ち上がれば前代未聞の普通科同士による決勝になる！ そもそもここまで勝ち上がつてくる普通科なんていなかつたけどな！』
『どつちもヒーロー科に入らなかつただけという話であつて、実力そのものはプロヒーローに比肩するレベルだからな。爆豪と轟もプロヒーローに引けを取らない強さを持っているが、あの2人はそれ以上だ。そういう意味で言えば、当然の結果だな』

三崎と一ノ瀬が舞台にて向き合う。

「てめえは一体、何を考えていやがるんだ」

「何のことだい？」

「憑神がどんな影響を持つているのかわかつてやつてているのか!?」

「ああ……キミはアレが見えるんだね。知らないよ……何も」

『START!!』

試合開始の合図が会場に鳴り渡る。

「さあ、来なよ」

とりあえず、ここは戦うしかない。憑神抜きの素の実力の程がどれくらいかはわかつてないが、思いつきりやつても簡単に勝てる相手だとは思えない。避けに徹している時の回避能力はかなり高いのはわかっている。憑神のことを抜きにしてもそれだけの相手だとは思えない。

「まあ、やるだけやつてみるか」と小声で呟いて双剣を取り出して、一ノ瀬との距離を詰める。

それに対して、一ノ瀬は剣を取り出していた。今まで逃げに徹していた一ノ瀬が剣を抜いた。三崎や倉本と同質の個性。斬刀士。

しかし、三崎の攻撃を受けていなすために使えどもその剣を攻撃のために振るつてはいなかつた。攻撃というよりは牽制に近いことはしてはいたが。

回避する。この一点に関しては今までと何の変化もない。

そして、何合か打ち合つたかと思えば、一ノ瀬が距離を取つた。

「足りない……全然足りないよ……」なんじや、『彼女』が喜んでくれない。さあ、もつと『彼女』を満たしてくれ！」

一ノ瀬の様子が変わる。

「はあああああ!!」

そして、姿は巨大な人形の様な姿へと変じる。猫の様な頭を持ち、下半身が薔薇の花の様になつていてる姿に。

「てめえが憑神を使うなら、こつちも使わせてもらうぜ！」

音叉の様に響くハ長調ラ音。

「スケエエイスっ!!」

三崎も人形の様な姿へと変じる。一ノ瀬のそれと比べれば小さくはあるが、それでも普通の人間と比べれば巨大な姿。手に持つ巨大な鎌は死神のそれを思わせる。オレンジ色の紋様を描きながら光るそれはいかなる物理法則で成り立つてゐるのか。三崎にそれにさしたる興味はない。ただ、目の前の敵を蹴散らすのみだ。

「ここは……どこ？　ここは……いやだ。だってここにはキミがいない。どうしてここにキミはいないの？」

一ノ瀬は何かに語り掛ける。まるで独り言の様に。

憑神へと変身する際、空間は別世界の様になる。碑文使い以外には認知できない。時間の流れさえも恐らくは普通の場所とは違う。三崎には、一ノ瀬の言う『キミ』は『彼女』を指すことは、推測が付いたがそもそも『彼女』が何物なのか全くわからない。

「ボクが弱いから……？だからなの……？」

「何言つてんだ……？」

一ノ瀬は普通科とは言え、弱いわけではないだろう。一年A組で一、二を争うであろう爆豪さえ容易に下してみせた。これで弱いのだと言つうなら、他は一体どうなつてしまふ。

「ボクが強くなつたら……ボクら、ずっと一緒にいられるのかなあ……？　だつたらボクは強くなる……！　キミを守れるほどに……!!」

一ノ瀬が戦闘態勢に入ったのが見て取れた。三崎は攻撃に備えて構えた。

一ノ瀬が巨大な爪を振るうとそこから円形の斬撃が飛ばされた。空を自在に飛び回れる今の状態では避けるのは容易だ。下手に受け未知の効果を発揮されても困るので、避けに徹する。その隙を狙つて一ノ瀬は直接爪による攻撃をしかけた。さすがにそれを避けられそうにもなく鎌で受け止める。弾き飛ばし、鎌で殴り飛ばす。吹き飛ばされはするが、あまりダメージらしいダメージを負つた様子はなかつた。

「キミは何故強くなろうとする?」

「俺は……」

志乃のことを思い浮かべる。言葉にはしなかつた。
「ボクと同じ……? だつたら、邪魔しないでよ」

「同じ……? お前も『彼女』を失つたのか?」

「1人はもうイヤだ……! もう失うのはイヤだ!!」

一ノ瀬から薔薇の花弁の様なものが4つ散らばり、それらはそれぞれ意思を持つように動き始めた。二枚合わせの花弁の中央からレーザーの様なものが放たれた。

三崎はその攻撃に対応してみせた。驚きはしたが、処理が難しいというほどではない。一ノ瀬の直接攻撃にも警戒しつつ、突進さえも仕掛けてくる花弁も鎌で斬り払つた。

「キミがいなくなつて、ボクはまた一人になつた。『彼女』が現れるまでは……ねえ、ボクは嬉しかつたんだよ。トモダチはキミだけだから。欲しいのもキミだけだから。でも、いいんだ。世界の外側……『彼女』は戻ってきた」

「なんだ……? 何のことと言つているんだ……?」

「ボクはもう1人じやない。姿は違つていたけど、ボクにはすぐにわかつたんだ」

「お前の言つている『彼女』つて、AIDAのことか?」

『彼女』は『彼女』だ

「お前はそんな得体のしれないものを受け入れていてるのか!? ふざけ

んな！」

三崎は、左手を一ノ瀬に向ける。そこから光球が発射された。何発も連射されたが、その悉くを一ノ瀬は爪で薙ぎ払つた。

「ぐあ!?」

一ノ瀬の身体を痺れが襲つた。全く身動きが取れない程だつた。三崎が放つた光球には電気が付与されており、帯電していくうちに痺れて動けなくなるものだつた。威力そのものは低いが、相手の動きを止める手段としてはかなり良い武器であつた。

三崎はその隙に一ノ瀬に大鎌を振り下ろす。

「はああああ!!」

痺れている状態の一ノ瀬が避けられるはずもなく、鎌は直撃する。

「ぐああああ!!」

しかし、一ノ瀬の憑神が両断されているということはなかつた。ダメージがないわけではない。憑神同士の闘いは、通常の攻撃だけで決着がつくことはない。通常の攻撃で削れるのはデータドレインから身を守るプロテクトだけである。憑神同士の闘いにおいて完全に決着をつけるためにはデータドレインを決める他ない。

「早く終わらせないと……『彼女』がいなくなっちゃう……『彼女』は『人』との対話を好むんだ」

『『人』との、対話……?』

三崎は、一ノ瀬の言つている意味がよくわからず、オウム返ししてしまう。

「キミはどんな言葉を残すのかな……！　言葉にならない——想いを！」

下半身の部分を三崎に向けた。花の様になつていてるその中心部は、眼の様に見える。

『データドレインかつ!？』

三崎の憑神であるスケイスを呑み込む程の大きさのエネルギーの球体。不意を突かれた三崎はデータドレインをくらつてしまつた。

「ぐおおおおお!!」

データドレインは三崎の憑神を酸で蝕む様に削つていく。だが、

完全に憑神のプロテクトが壊されていたわけではない。

「はああああああ!!」

データドレイン自体もプロテクトを浸食していくが、弾き飛ばしてしまえばそれだけの攻撃だ。大鎌を振り回し球体を破壊した。

「これで終いだ！」

一ノ瀬との距離を一気に詰めて、大鎌で切り裂いていく。プロテクトが完全に剥がれたのを確認し、蹴り飛ばして距離を取る。大鎌を虚空へと仕舞い、右腕が砲身の様に変形していく。そして、その砲の先には眼。

三崎からデータドレインが放たれた。プロテクトが完全に剥がれた状態からのデータドレインに防ぐ手立ては存在しない。

データドレインは一ノ瀬に直撃し、データを吸収していく。そして、全てを吸い取つたかの様に放つた球体も三崎の砲身へと戻つて来た。

「がああああ!!」

一ノ瀬の憑神が崩れていくように、元の姿に戻つていく。三崎は決着が着いたので元の姿へと戻る。一ノ瀬はそのまま後ろに倒れていく。肩に乗つていた小さな白猫も落ちていく。一ノ瀬は猫が地面に直接落ちないように手を差し伸べた。

「ミ……ア……」

白猫は、叫ぶように鳴き声を挙げる。白猫から黒い泡が溢れかえりる。

「いやだあああああ!!」

黒い泡が四方に飛び散つていく。最終的には、跡形もなく消え去つてしまつた。

一ノ瀬はそのまま気絶した。

「なんだつたんだ……今の」

ミッドナイトにより、一ノ瀬の状態確認が行われた。

「勝者、三崎君!!」

少しの休憩時間をおいて、決勝が行われる。三崎は控室へと向かつた。その途中

「決勝進出おめでとう。亮」

「オーヴアン……！ なんで、あんたがここにいんだよ」

「俺もプロヒーローだからな。別に居てもおかしくはないだろう」「あんたは今までそういうことやつてこなかつただろうが！」

「ふ……まあ、お前がいるからこそつていうのはあるかな」

「それで、何の用だよ」

「A I D A」

三崎はその言葉に驚く。それは限られた人間しか知らないはずの単語であつたからだ。

「どうして、あんたがそれを」

「一ノ瀬 薫の猫に擬態していたようだな」

「あれが……A I D A？」

確かに今までの様な黒い泡になつたが、あれは猫にしか見えなかつた。

「それと決勝はどうするんだ？」

「どうするつて、何の話だ」

「憑神を使うのか、否か」

「そんなことまで知つているのか!？」

「わかっているだろうが、今のお前じやほぼ100%、倉本には勝てない」

「やつてみなくちやわかんねえだろうが」

「確実に勝てる保証はない。憑神を使えば、話は別だがな」

憑神を使えば確実に勝てる。言われるまでもない。憑神に勝てるのは同じ憑神か同質の力を持つA I D Aだけ。しかし、一般人に使つた場合に引き起こされる事象は、本当に安全だと言えるのか。

「ヒーローにとつて敗北は、後ろにいる無辜なる人々の死を意味する。それがわからないお前じやないはずだ」

オーヴアンは囁く。

「だけど、別に今回勝つ必要もないだろ……」

「今日は敗北しても構わないと……？ なら、次はどうなる？ その時、また大事な何かを失わないと言い切れるか？」

「そ、れは……」

惑う。迷う。

オーヴァンの言葉が、脳裏に刻まれる。

「負けてはいけない。また、三爪痕に奪われてしまうぞ」

「嫌だ……それは、絶対に……」

「それじやあな。亮。決勝戦も楽しみにしている」

踵を返し、観客席へと戻るオーヴァン。三崎は、それをただ見つめていた。

「強くなれ。全ての悲しみと喜びを喰らい、踏み台にして」

オーヴァンの最後の小さな声が三崎に届くことはなかつた。

雄英体育祭決勝

決勝を間近に控え、観客席は盛り上がる。一方は普通科でありながら、その身体能力と身体技能はプロヒーロー以上であり、ここまで危なげなく勝ち上がってきた倉本。もう一方は、倉本と同質の個性持ちで、それ以外にも変身の個性を持ち、どういう手段で勝つたか不明であつた一ノ瀬を打ち倒した三崎。注目が集まるのは無理からぬことだつた。どちらが勝つんだろうかと予想を立てる者たちが後を絶たない。緑谷たちA組もその例に漏れなかつた。

「これ、どつちが勝つんだろうな？」

峰田が、そう呟く。

「三崎の変身も確かに強えけどよ、あの子の動きはそれより上だろ」

「上鳴君、直接対峙したわけだもんね」

「瞬殺されてたけどね」

「おい……！　おい……！」

上鳴の意見もその試合結果の情けなきから耳郎に笑われていた。言い返せる要素が一つもないでのツッコミを入れるつもりが何も言えていいえなかつた。

「直接対峙したで言えば、飯田はどうしたんだ？」

「飯田君なら電話がかかつてきただから、外で話してるとよ」

「でもよ、結局一ノ瀬がどうやつて勝つてきたのかわからなかつたし、三崎がそれに勝つた方法もわからずじまいだよな」

一ノ瀬と三崎の試合は、憑神での闘いであつたためにそれを見ることが出来た者はほとんどいない。

「おい、デク！　てめえは見えてたんだろ」

A組の面々の視線が緑谷へと集まる。

「そ、うなん？　デク君」

「え？　まあ、むしろなんで僕だけに見えてるんだろうっていう摩訶不思議現象だから……おかしいのは僕の方なのかなつて少し心配になつてるぐらいだよ」

「緑谷にはどういう風に見えてたんだ？」

「一ノ瀬君も三崎君も変身してて、巨人同士の闘いつて感じだつたよ。こつちに闘いの余波が伝わつてこないのが不思議なぐらいのすごい試合だつた」

「俺にはちょっと斬り結んだ後に、急に一ノ瀬が倒れたようにしか見えなかつたんだが。後は最後の方で、ちょっと一瞬チカつと光つたようにも見えたぐらいだな。みんなもそうだよな?」

「光つたのは多分、三崎君の最後の攻撃かな? なんというか光の玉を一ノ瀬君に発射してぶつけてたから。でも、同じようなのを一ノ瀬君も使つてたけどそれは三崎君は打ち破つてたから光つては見えなかつたのかな……そもそもなんで僕だけに見えるんだろうか。位置? 角度? 他にあれらが見えてるの? 一ノ瀬君と三崎君だけなのかな? 僕と彼らの共通項なんてあまり思いつかないけど……」

緑谷がまたぶつぶつと呟きながら思考する。

「怖いよ、デク君」

「あ、ごめん!」

「デク君は、どつちが勝つと思う?」

「素の身体能力だけで考えたら倉本さんの方が圧倒的に有利なのは間違いないと思う。三崎君の変身を踏まえたとしても倉本さんの方が上だと思うよ。でも、一ノ瀬君の使つていたあれはかつちやんの爆破をものともしなかった。まるで透過でもしたみたいに……もし、三崎君も同じことができるなら……三崎君が負けることは考えづらいな」依然に三崎は変身の個性を使つたことはあつたが、一ノ瀬の様に透過したりはしなかつた。しかし、三崎の変身した攻撃は一ノ瀬にちゃんと届いていた。そして、その時ばかりは三崎の変身さえも他の人は見えていなかつた。その違いが緑谷にはわからなかつた。三崎が一ノ瀬と同様の見えない方の変身を使えるのならば今までどうして使わなかつたのかも腑に落ちなかつた。それに一ノ瀬の肩に載つていた猫。黒い泡となつて消えてしまつたが、例のA I D Aだつたのではないだろうか。三崎はそれを退治したということなのだろうか。緑谷にとつては謎が深まるばかりであつた。

三崎は決勝戦を前にひどく落ち着かなかつた。決勝戦に緊張しているわけではない。自身が負けてしまうことに関して頭から離れなかつた。「負ければ奪われる」。ただの試合なのだからそんなことがあるはずはない。倉本は確かに強いが、それだけだ。ヴィランではない。

それとも自信がなくなる?負けた程度で自信がなくなるなら、三爪痕に負けた時に既になくしている。それでも、オーヴァンの言葉が頭から離れることはなかつた。

『さあ、いよいよラスト! 雄英1年の頂点がここで決まる! 決勝戦 倉本 対 三崎!!』

『START!!』

舞台の上、倉本と三崎が手に持つのは双剣で構えも逆手で同じだ。奇妙なものである。三爪痕もまた同じ逆手だつた。

「アンタ、自分と似たような個性を見るのは初めてか?」

「いや、そうじやないが……」

「アタシらみたいな個性持ちは結構、多いんだ。便宜上、個性として扱われて いるけど、同系統の個性という括りで考 えてもあまりに画一的過ぎるから、一部じやアタシらみたいな個性を職業ジョブって呼ぶやつもいるぐらいだ」

「何故、そんな話を……」

「アタシと同じ双剣使いに会うのは初めてだからね。と言つても、アンタはマルチウェポンみたいだけど」

その言葉を聞き、倉本と三爪痕は恐らくは関係ないだろうと見切りをつける。

「少しばかり期待させてもらうよ。アンタの実力をね!」

その言葉を言い切つたと同時に三崎へと斬りかかつた。

速つ!?

なんとか一撃を防ぐが、次の一撃、更に一撃と矢継ぎ早に放たれる斬撃に防戦一方になる。自身の攻撃より圧倒的に速い。それに重い。

このままでは確実にやられてしまう。

「ほらほらあ！ どうしたあ！」

「こ、このつ……！」

攻撃に転じようとするが、そんな隙は一切なかつた。強いことはわかつていたが、地力にここまで差があるとは思つていなかつた。負ける。そんな確信にも似た予感が頭を過る。

「アンタも期待外れか……」

そんな落胆の言葉と共に、三崎を蹴り飛ばした。

「ぐおつ……!!」

鳩尾に入り、膝から崩れ落ちる。

「これではつきりしただろ。アンタとアタシじや、格が違うんだよ。格が」

勝てない……素の実力において、三崎が倉本に勝っている点は何一つとしてない。

「……負けてたまるかあああ！！」

全身を変身させる。憑神ではない普通の変身である。

「そういうえば、そんなこともできたんだつけ。他の職業の個性じや見たことないね。鍊装士の特別か？ それともアンタだけなのか。どつちにしてもアタシの敵じやない」

「くそがあ！」

変身した三崎の拳が振り下ろされる。3m超えの巨体から繰り出されるそれは、破壊力に優れる。まして、鋼鉄に等しい強度を持つた拳である。剣で受け止められようと、その圧倒的質量で潰せる。そう三崎は思つていた。倉本はその一撃を受け止めるのではなく、いなし。その隙に倉本は飛び上がって、三崎の顔面に向けて拳を放つた。その一撃は、変身した三崎の顔面を文字通り碎いた。人形の様になつているため表情が変わることはないが、陥没しひび割れていた。

「な……んで……？」

「さつきも言つただろ。アンタとアタシじや、格が違うんだよ」やはり勝てない。このまま負けるのか。本当にこのまま何もできず、為す術もなく、負けるのか。でも、ここで勝つ必要は……

『負ければ奪われるぞ』

嫌だ。それだけは嫌だ。また、奪われるのは嫌だ。でも、勝つためには……

「ああああああああああああああああ!!」

その絶叫はどんな感情によるものかもわからない。それが負けに對することなのか、相手を害してしまうことに対してなのかは三崎には判然としなかつた。

「スケエエエエイス!!」

変身が憑神へと変化する。見た目以上では何も変わらない。だが、時の流れさえも異質となつた空間は、どんな強者であつても資格がなければ認識することさえ叶わない。

憑神となつた変身。スケイスには巨大な鎌が握られた。

「うわあああああ!!」

ただ横なぎに振り払つた。倉本はその攻撃を認識できない故に直撃し、意識を失つた。

三崎の変身は解け、倉本は舞台へと倒れ伏した。

ミツドナイトが、倉本の状態を見て、意識がないことを確認した。

「三崎くんの勝利!!」

『以上で全ての競技が終了! 今年度雄英体育祭1年優勝者は、A組

三崎亮!!』

三崎は勝つたはいいものの憑神を使つてしまつた罪悪感からか誰とも目を合わせられそうになかつた。気分の悪さに思わず舌打ちまでしてしまつた。

「しかし、結局何やつたかわからずじまいだな」

「ああ……観客席のプロも同じだろうな」

解説席で話す教師二人。相澤は、一ノ瀬や三崎がどの様にして勝つたのか依然として推測もつかないが、少しだけ思うところはあつた。

校長が三崎を特別扱いしていることに関してだ。特別扱いと言つても、除籍処分にしてはならないということだけだが、それだけでも生徒如何さえも教師の自由にさせている雄英高校の方針からすれば、それを反故にしている形になる。三崎の個性がそれに関係しているかはわからなかつたが、今のところ思い当たる点と言えばそこぐらいであつた。

そして、観客席

「テク君、一体何が起こつたん……？」

A組の面々おろかプロヒーロー達も誰も理解出来ていなか、数少ない見えていた者。緑谷には、三崎の憑神がはつきりと見えていた。

「三崎君がでつかい鎌で……でも、あの感じだつたら普通……」

爆豪が一ノ瀬から攻撃を受けて無傷であつたこともあつたので、未経験の感覚ではなかつたが、見たままで言えば間違いなく倉本の胴体と下半身が二つに分かたれる一撃であつた。

「テク君？」

「でつかい鎌で倉本さんを攻撃したら、倉本さんが氣絶した風にしか見えなかつたかな」

緑谷は言葉を少しだけ濁した。あまり考えたくはないが、三崎が人を殺す様な動きを見せたことがショックであつた。そんなつもりがあつたのか、なかつたのか、相手が無事である確信があつたのか。絵面だけで言えば、殺人の現場を見てしまつた様な気持ち悪さだけが胸中に渦巻いた。

しばらく後に、倉本は目を覚ました。そのことに三崎は表情には出さなかつたが安堵していた。そして、表彰式が行われた。

メダル授与にオールマイトが登場。その際、オールマイトの「私が来た」とミツドナイトの「我らがオールマイト」という紹介の声がダブつた。グダグダである。

まずは轟にメダル授与をした。オールマイトが轟に炎を使わなかつたことに關して尋ねると轟は、オールマイトに清算しなくてはならないものがあると伝えた。オールマイトはそれに対しても今の君にならきつとできると励ました。

そして、もう一人の3位である一ノ瀬。彼は柱に縛られていた。一ノ瀬はただ歩き回っていた。猫を探して。居るはずもないそれをただ探していた。

教師たちが連れてきても、またゆつくりと歩き出して探しに行こうとするために縛られていた。それに対して抵抗するわけでもなかつたが、それでも探しに行こうとすることを辞めなかつた。生氣のない、まるで人形の様に、機械的に歩みを止めようとしなかつた。

「ミア……」

ただ「ミア」とうわ言の様に呴き続けていた。

「一ノ瀬少年、おめでとう」

オールマイトが目の前に立ち、声をかけても返事も何もない。何も聞こえていない。

「あの……一ノ瀬少年？」

オールマイトには一ノ瀬と三崎との一連の攻防は全く見えなかつた。しかし、憑神の存在を知つてはいたので、何となしに何らかの特別な事情を抱えていることはわかつた。恐らくは、11年前の被害者である。11年前の事件は確かに解決したが、助けることが出来たようで、そうではなかつたのかもしれない。

「君が今、何に悩み苦しんでいるのかはわからないが……教師のみんな味方をするし、私にできることがあれば協力する。打ち明けてくれとは言わない。ただ、ここに立てる程の実力を誇れるように願つているよ」

一ノ瀬は、それを聞いても何も変わった様子を見せなかつた。「ミア」と呴くだけだった。

準優勝の倉本。

「倉本少女、おめでとう」

「おめでたくなんかないよ。アタシは勝ちたかったのに……」

倉本は血が出そうなほどに唇を噛みしめていた。

「そう言いなさんな。準優勝だつて立派なことだ」

「アタシは、誰よりも強くなりたいだけだ。オールマイトより、天狼より……アイツより」

「やつぱり、アリーナを目指すのかい？」

「当たり前だ。アタシは最強の称号を手に入れる。絶対に」

「……君の夢だ。私にそれを否定することはできない。ただ、その力くれぐれも悪用しないように頼むよ」

「アリーナチャンピオンは、誇り高い奴がなるんだ！　ヴィランなんかとは違う！」

「そんなつもりはなかつたんだが、なんか……ごめんよ」

アリーナには、ヒーローが参加することがないわけではないが、あまり良い行いとは思われない。アリーナ参加をきっかけに裏社会との関係を疑われて引退に追い込まれたヒーローもいる。事実関係としては、未だ不明のままであるが、信用のない者が続けるにはヒーローという仕事はあまりに過酷であつた。

オールマイト自身もアリーナには良い印象を持つていない。ただ、法的にはグレーではあるが、完全に悪だと決まつてているわけでもない。それを否定していい理由も持ち合わせていかなかった。

そして、優勝した三崎。

「見事だつたな。三崎少年」

三崎は、未だに気分が沈んでいた。

「どうしたんだい？　優勝したと言うのに浮かない顔で」

「オールマイト……人を殺したことはあるか？」

「……原則としてヒーローは、ヴィランが相手であつても殺したりしない。しかし、やむを得ない状況も少なからずある」

オールマイトは明確な回答は避けた。

「今回、俺は相手を殺しかねない手を使つた。相手を殺すかもしけないとわかつてそれを使つた。負けるのが怖かつたんだ」

「しかし、相手は死んでいない。結果が全てとまでは言わない。君は君の全力を尽くして、この試合に臨んで勝利した。負けるのが怖いのは当然さ。その恐怖を乗り越えてヒーローは日々人助けをしていくものだ」

三崎は人助けがしたいわけではない。ヒーローになりたいわけでもない。今も変わらずに三爪痕を倒したい以上のことはない。今この場に居るのはその過程にでしかなく、結果的に雄英体育祭で優勝したというだけの話だ。例え、先の試合で倉本を殺してしまっていたのだとしてもその目的を違えることはない。

オールマイトは三崎を励ました。しかし、意図したものとは違い、三崎は改めて自身の目的を再確認した。

「改めて優勝おめでとう。三崎少年」

「さあ、今回は彼らだつた！　しかし、皆さん。この場の誰にもここに立つ可能性はあつた！　ご覧いただいた通りだ！　競い！　高め合い！　さらに先へと登つていく姿！　次代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている！　てな感じで最後に一言！」

「皆さんご唱和ください！　せーの」

「プラス　　「お疲れさまでした!!」　　「プラス……

「プラスウ　　「プラスウルトラ　　「ブル

その場に居たオールマイトを除いた人は全員プラスウルトラと言うのだとばかり思つていた。

「そこはプラスウルトラでしょ、オールマイト！」

そんな観客の声も挙がつた。

「ああいや……疲れたろうなと思つて……」

良いこと言つたようで意外と抜けているオールマイトのグダグダな締めによつて1年生の雄英体育祭は幕を閉じた。

ハセヲ

雄英体育祭終了後、日下は落ち込んでいた。1人で人気のない場所で立ち尽くしていた。

「やあ、君はこんなところで何をしているのかな？」

そこに話しかけてきた1人の男。

「え、あの……ごめんなさい」

既に体育祭は終わり、ほんどの人が帰宅している。いつまでも居残っていたことを言われたのかと思い反射的に謝ってしまう。

「ああ……別に怒っているわけではないよ。君は亮の友達でいいのかな？」

「……？ 三崎さんのお知合いですか？」

「ああ。プロヒーローのオーヴァンだ。亮との関係は……そうだな。亮の兄貴分と言つたところかな」

「そうなんですか……三崎さんの友達……だと思つているのは私の方だけかもしません。私、主体性ないしどんくさいから三崎さんをいつもイライラさせてしまうんです」

「そうか……だけど君は亮ともつと仲良くなりたいんだろう？ だったら、君も努力しなくちゃ……違うかい？」

日下には、三崎に抱いている気持ちがなんなのかよくわかっていないが、仲良くなりたいという思いは確かにある。三崎は、冷たい態度こそ取るが助けてもらっている。彼の助けにもなりたいとも思う。

「私、どうしたらいいんでしょうか？」

「亮が三爪痕というヴィランを探しているのは知っているね」「それは……え？ でも……？」

オーヴァンが言わんとしていることはすぐにわかった。要は「三爪痕を見つける」ということである。しかし、ヒーローの資格を持つていないものが、ヴィランを探すというのは、様々な理由から危険だ。単純に三爪痕は強力なヴィランであるはずであるし、資格を持つていなければ、個性の使用はその時点で犯罪である。

「大丈夫。君のその音を聞く個性を使えば見つけられる。見つけたら

ヒーローを呼べばいい。そうすれば、亮は君を認めてくれるよ」「そう……でしようか……？」

「……ところで、亮が何故三爪痕を探しているかは知っているかい？」「知りませんけど……？」

「彼には幼馴染が居てね。七尾志乃という女の子なんだが、彼女は三爪痕に……殺された」

「え……!? それじゃあ、三崎さんは復讐のために……!?

「ああ。志乃は俺にとつては妹のような存在だった。亮とはとても仲が良かつた。大事な人を亡くすというのは……それは、身体の一部が欠けたかの様な喪失感だ。復讐はその欠けた部分を何とかして埋めようとする反応の様なもの。ヒーローとしては否定するべきなのだろうが、俺はあいつを止めることはしたくないし、できそくもない」オーヴァンは、内心で自嘲する。一体どの面下げてこんなことを言っているのか。しかし、自分の言葉に偽りもない。本当のことを言つていなければ。

「職場体験が近々あるはずだ。その時に、君が頼りに思うヒーローの指名があるならそこに行くんだ。きっと力になつてくれる。俺が指名しても良いんだが、生憎人を受け入れられる余裕は俺にはなくてね」

「私、頑張つてみます」

「それにしても君を見ていると志乃のことを思い出すよ

「私と志乃さんはそんなに似ているんですか？」

「世の中に3人は似ている人が居るとは言うが、居るはずのない志乃の双子の姉妹かと思つたよ」

オーヴァンは携帯端末で志乃の写真を見せた。日下は自分と見間違えそうなほど似ている人がそこには確かに写つていた。そして、そこに一緒に移つているのはオーヴァンと三崎の姿。

日下は、以前に三崎に紛らわしいと言われたことを思い出した。これ程までに似ているのならそう思うのもわかる。自分でさえも撮つた覚えのない写真の様に感じる。記憶にないだけでそこに居たので

は、と勘違いしてしまいそうなほどだ。

よく似ている別人。それも亡くなつた人で大事な人であつたのなら紛らわしいと思われても変ではない。そして、三崎が日下（私）に優しい時があるのは——那人（志乃さん）に似ているから？

自分の内面など関係なしに、三崎の人を想う優しさでもなく、志乃という人物に似ていたから三崎に優しくしてもらえた。それは、何とも……何とも虚しい。日下はただ自分を見てもらいたかった。認められたかった。三崎は、日下（私）を見ていてくれているのだと思った。しかし、本当は日下の姿を通して志乃を見ていただけだった。実際の真実はともかく、日下はそう確信していた。

雄英体育祭を終えて、次の登校日。全国放送されているだけあり、その影響力は計り知れず、雄英ヒーロー科のほとんどが一般の人々から声をかけられていた。

A組の教室でもその話題で持ち切りであり、雄英の凄さを改めて感じていた。

そこに相澤が入つてくると、一気に静かになる。毎度毎度、注意されていれば、そもそもなるだろう。

「相澤先生、包帯取れたのね。よかつたわ」

「婆さんの処置が大袈裟なんだよ。んなもんより、今日のヒーロー情報学ちょっと特別だぞ」

抜き打ちでテストかと内心怯える生徒が居たが

『コードネーム』ヒーロー名の公安だ

「「胸膨らむやつきたあああ!!」」

一気に騒がしくしたが、相澤の睨みですぐに静まつた。

「というのも、先日話した。プロからのドラフト指名に関係してくる。指名が本格化するのは2、3年から。つまり、今回来た指名は将来性に対する興味に近い。卒業までにその興味が削がれたら一方的に

キャンセルなんでことはよくある」

峰田が「大人は勝手だ」と机を叩く。

「頂いた指名がそんまま自身へのハードルになるんですね！」

「そ。で、その指名の集計結果がこうだ」

轟	2854
三崎	1531
爆豪	1231
常闇	280
飯田	250
上鳴	272
八百万	108
切島	40
麗日	20
瀬呂	14
緑谷	1

「例年はもつとバラけるんだが、3人に注目が偏った」

「三崎、一位だつたのに思つたより少ないね」

三崎はどうでもよかつたので、特に反応はしなかつた。結局はレイヴンのところに行くことに変わりがない。

「結果だけ見りや上等だが、実態が見えなかつたからだろ。どういう力かわからぬから、どう扱えбаいいかわからない。そんなクソみてえなのはほつときやいいんだ」

「爆豪がフオローエンダーリー入れるとは珍しい」

「ああ!?俺の推察と事実を言つただけだ。ボケが!!」

爆豪の周りはどうせキレられると思い言わなかつたが、「ツンデレなのか?」と思つていた。

「これを踏まえ、指名の有無に関係なくいわゆる職場体験つてのに行つてもらう。お前らは一足先に経験してしまつたが、プロの活動を実際に体験してより実りのある訓練をしようつてこつた」

「それでヒーロー名か!」

「俄然楽しみになつてきた！」

「まあ、仮ではあるが適當なもんは……「付けたら地獄を見ちやうよ!!」

相澤の言葉を遮る様に現れたのはミツドナイトだった。

「この時の名が！　世にそのまま認知され、そのままプロ名になつてる人、多いからね！」

「まあ、そういうことだ、その辺のセンスをミツドナイトさんに査定してもらう。俺はそういうのできん」

「将来、自分がどうなるのか。名を付けることでイメージが固まりそこに近づいてく。それが、『名は体を表す』つてことだ。『オールマイト』とかな」

考える時間が与えられたのだが、15分ほど経つと
「じゃ、そろそろ出来た人から発表してね！」

まさかの発表形式。ヒーローになつたら名乗りを挙げることもあるだろうから変な話ではないが、結構恥ずかしいものがある。

一発目に出てきた青山が「I can not stop twinking」という、短文を持つてきた。ミツドナイトは「よく普通に「そこは I を取つて can, t に省略した方が呼びやすい」なんて指摘する。次に発表したのが芦戸。「エイリアンクイーン」ミツドナイトに止められたが、大喜利っぽい空気になつたために次が出にくくなつてしまつた。

その空気を変えたのが蛙吹だつた。「フロッピー」普通に良い名称が出たことで次々と発表する人が出でてくる。

そして、三崎は

「ハセヲ」

「ハセオ？」

「『お』じやねえ『を』だ『うお』！　普通に書いてあんただろが！」
「ごめん、ハセラ角川書店、ケロケロエース連載、漫画『hack／Link 黄昏の騎士団』 第一話の誤植である。また、PSPで発売された『hack／Link』の限定版付属DVD、『hack／DRAMATIC DVD』内の、スペシャルスキットドラマ「出

張?」内のアスベル (Tales of Graces) の発言「す
まないハセラ 悪気はなかつたんだ」に対しハセヲは「そんなマニアックなネタを:」の後、「角川書●が青くなるからやめておけ」と返した。オーヴアン曰く「確かにケロケロA (エース) の第一話を見ていないと全力で置いて行かれるな」などとコメントしている。ニコニコ大百科より引用

「……おい、そのネタは多分誰にも伝わんねえからやめろ」「それで意味は?」

「特にねえよ。テキトーだ、テキトー」

その後、轟は「ショート」という自分の名前で通したのを見て、自分もそうすれば良かつたかと、少し悩みもした。

A組は爆豪を除き、ちゃんとヒーロー名が決まった。爆豪は最後までミッドナイトに拒否されたために自分の名前で行くことになつていた。

職場体験

指名があつてもなくとも職場体験に行くことが決まつていて、緑谷には指名が一つだけ來ていた。指名をしたヒーローは檸。ヒーロー オタクでもある緑谷は当然檸のことを知つていた。しかし、その彼であつてもオールマイトの秘密を知る以前のオールマイト以上に謎が多いヒーローだつた。個性不明。年齢不明。本名不明。経歴不明。活動不明。性別は男——とされてはいるが、中性的な見た目でもあるのでネットでは女性説さえある。そんな謎だらけの人物にも係わらずヒーローランキング10位という高順位にいる謎。と言つても、これは檸の作った『月の樹』と呼ばれるボランティア団体が多くの人に対する支持されているからだ。

『月の樹』はヒーローのみならず、多くの一般人が在籍しており、普段は市民レベルでの防犯対策や救急治療などの講義を行つている。全国に拠点があり、日本人の5人に1は在籍していると言われている。『ヒーローに頼り切りになるのではなく、ヒーローがより多くの人を助けられるようにするために自分を助けられるようにする』というのが、『月の樹』の目指すところである。また、平等である社会もを目指しております差別問題なども解決するべく積極的に動いている。

これらの活動が、大きく世間で評価されているために檸はヒーロー活動をほとんど行つていないにもかかわらず10位という高順位にいる。容姿が美少年というのも一役買つていそうであるが。

「緑谷少年、ちょっとおいで」

「なんですか？」

オールマイトは人の居ない廊下へと歩いていく。

「君は、檸の指名を受けるつもりかい？」

「いや、まあ、折角来た指名ですし……」

「彼には注意した方がいいかもしねん」

「え？ どうしてですか？」

「一体どこまで把握しているのかはわからないが、私の限界時間が近いことを知つっていた。それにワンフォーオールのことを知つていてる

かの様な口振りだったんだ

「秘密を明かしていないのに……ですか？」

「当日は、私を呼んでいるので私は行くつもりなのだが……君を指名するということは、もしかしたら本当に色々と知られているのかかもしれない」

「そ、そんな!! それって大丈夫なんですか!?」

「彼は信頼のあるヒーローだ。間違つても人々を混乱に陥れる様なことはしないと思うが……私にも彼が何をするつもりなのかが全く見ええてこないんだ」

後日、自分の秘密を打ち明けるとも言つてはいたが、一体どんな秘密なのか。

「指名を受けない方がいいんでしょうか……?」

「それは君の思う通りでいい。そういう懸念がある。ということだけ伝えたかつただけさ。彼が何を思つているのかわからないとは言つたが、私は彼を信用すると決めている。ただ、だからと言つて君が信用する必要もない。ということさ」

それはオールマイトの迷いの現れでもあつた。信用したいという気持ちは山々であるが、怪しいことこの上ない。一抹の不安がないわけではない。本当に信頼したのなら緑谷にわざわざ警戒を促す様なことを言う必要がない。それを理解できない緑谷ではなかつたが、悩んだ末に指名を受けることにした。

怪しいは怪しいかもしれないが、間違いなくトップヒーローの1人である。そんなヒーローがどんな活動しているか興味が沸かないわけがない。

飯田は、マニュアル事務所の指名を受けることにしていた。その理由は、ヒーロー殺しの二つ名を持つヴィラン『ステイン』が次に出没する可能性がある保須市に拠点を構えていたからだつた。飯田がステインを探そうと考えているのは、彼の兄であるヒーロー『インゲニ

ウム』が下半身不随となるほどの大怪我を負わされたからだ。つまるところ、復讐である。

『イングニウム』は飯田の兄であり、憧れのヒーローでもある。それを潰した『ステイン』がどうしても許せなかつた。怒りで腸が煮えくり返りそうな気持ちを表面上は、何事も無いようにしていた。これは自分がけの問題だから。友人にいらぬ心配をかけたくはないし、迷惑をかけたくもない。だが、1人だけ話を聞きたいと思つてはいる相手が居た。『三爪痕』というヴィランを探しているクラスメイト——三崎だ。その時は理由を聞かなかつたが、彼はもしかしたら自分と同じで復讐を考えているのではないかと思つていた。学生の身で特定のヴィランを追いかけるのはそれ以外に考えられなかつた。一体どんな気持ちであるのか、飯田は無意識に共感できる相手を探してはいた。「三崎君。ちよつといいか?」

「ん?」

「三崎君は『三爪痕』というヴィランを探していると言つていたが、何故か聞いてもいいか?」

三崎は飯田がどうしてこのことを今になつて聞いてきたのか少し考えて、すぐに答えは出た。周囲に興味があまりない三崎でも、そのニュースが耳に入らないわけがなかつた。

「既に答えは出てんだろ。答え合わせのつもりか?」

「僕は……この気持ちを抑えることができそうもない。君は一体どんな気持ちで……」

「俺は抑える気がない。例え犯罪者と罵られようと俺は三爪痕を……殺す」

「……そつか」

飯田は、その決心を強めようとしていた。ヒーロー殺しへの復讐を。

「俺はお前を止める気はないけど、それは本当にお前がしたいことなのか?」

横目でヒーローに憧れ、志し、努力を続ける姿を見ていた。その力は、復讐のために培つたものではない。憧れたヒーローに近づくため

のものだ。それを復讐のために使うのは惜しいと感じた。

「ヒーロー殺しが憎い。その気持ちで頭がいっぱいなんだ……！」

三崎には大切な存在を傷つけられて憎く思う気持ちは痛いほどわかつた。しかし、三崎と飯田には決定的に違う点があった。

「お前の兄貴は生きてんだろ。容態が落ち着いたら、話してこい。それからもう一度考えればいい」

「君は……」

「俺の幼馴染は殺された。目の前で消え去る姿を見ることしかできなかつた。復讐がそいつのためだなんて言う気はねえが、俺がそいつにしてやれるのはそれしか思いつかなかつた」

復讐なんて結局のところ自分のためだ。志乃が復讐を望む様な奴ではないことはわかっている。それでも、それ以外に考えつかなくなつた。

「お前の夢とその復讐を天秤に載せてどちらが重いか……落ち着いて考えれば見えてくるだろ。それでも復讐の方に傾くなら、好きにすればいい。その時は、自分の夢も捨てるんだな」

「君は、それで復讐を選んだのか」

「元から俺の天秤には復讐しか載つてねえんだよ」

飯田は、燃え上がる様な復讐の気持ちが少しだけ落ち着いたのがわかつた。復讐したい気持ちがなくなつたわけではない。ただ、自分がヒーローを志していることを思い出した。兄の様な立派なヒーローになりたい。その気持ちに今も変わりはない。

「ありがとう！ 三崎君！」

自分の道を正そうしてくれた三崎に感謝の念を覚えた。と、同時に、助けたいと思つた。三崎は、復讐しかないと言つたが、そんな人間がこんなアドバイスできるだろうか。自分と同じように復讐しか見えなくなつてているだけではないのか。そんな只中にあつて人を導くだけの力があるのだ。彼が本当にヒーローを志すのならば、きっと素晴らしいヒーローになる。

「僕は、兄さんの様な人々を導けるヒーローになる！」

「……そうかい」

クラスメイトの身では烏滸がましいかもしれないが、三崎を正しき道へと導いてあげたいと思つた。

職場体験、当日。駅構内に集まつたA組は、コスチュームを渡され、それぞれの職場体験場所へと移動を開始していた。

「飯田君、本当にどうしようもなくなつたら言つてね。友達だろ」

「ああ、大丈夫だ」

飯田は結局、ノーマルヒーローマニュアルの事務所を選んでいた。ヒーロー殺しに高い確率で遭遇できそなのは今だけだつたからだ。この機会を逃せば、捕まるか、次の出現場所が予想できなくなるか。いずれにせよ、復讐の機会は失われる。まだ、迷いに揺れている。自分があるべき姿、なろうとしている自分は思い出せたが、ヒーロー殺しへの恨みは晴れてはいなかつた。